

粹源英明の詩に未_レ至_三三十期とあるなどにや

そなたに一本四方に作る

朱買臣が云

いへば、「わびしの事や、いかで、あれがやうに誦_ズぜで」などの給ふ。「三十の期といふ所なん、すべていみじう、愛敬_{アヒキヤウ}づきたりし」などいへば、ねたがりて笑ひありくに、陣_{ジン}につき給へりけるをりに、わきて呼び出でて、「かうなんいふ。猶_{ナド}そこ教へ給へ」といひければ、笑ひて教へけるも知らぬに、局_{ツボ}のもとにて、いみじくよく似せて詠_ヨむに、あやしめて、「こは誰_タそ」と問へば、ゑみごゑになりて、「いみじき事聞えん。かうく昨日陣_{ジン}につきたりしに、問ひ来てたちたるなめり。誰_{タレ}ぞと、にくからぬ氣色にて問ひ給へれば」といふも、わざとさ習ひ給ひけんをかしければ、これだに聞けば、出でて物などいふを、「宰相_{サイシャウ}の中將_{チュウシャウ}の徳見る事、そなたに向ひて拜_ヒむべし」などいふ。下_{シモ}にありながら、「うへに」などいはするに、これをうち出づれば、「誠_{マコト}はあり」などいふ。御前_{ゴマエ}にかくなど申せば、笑はせ給ふ。内裏_{ウチウラ}の御物忌_{ゴモノイミ}なる日、右近_{ウチノ}のさうくわんみつなにかやいふものして、疊紙_{タガミ}に書いておこせたるを見れば、「參_マせんとするを、今日は御物忌_{ゴモノイミ}にてなん。三十の期におよばずは、いかど」といひたれば、返事_{カヘリコト}に、「その期は過_スぎぬらん、朱買臣_{シウバイジン}が妻_メを教

云一前漢書に見ゆ、三十の期を宣方_ノの年齢にとりなしたる洒落

宿直所一語らふ女房の意にていへるならん
聞ゆれば一
參らするに

へけん年にはしも」と書きてやりたりしを、又ねたがりて、うへの御前_{ゴマエ}にも奏しければ、宮の御かたにわたらせ給ひて、「いかでかゝる事は知りしぞ。四十九になりける年こそ、さは誠_{マコト}めけれとて、宣方_ノはわびしういはれにたりといふめるは」と笑はせ給ひしこそ、物ぐるほしかりける君かなとおほえしか。
弘徽殿_{コウキウテン}とは、閑院_{カンイン}の太政大臣_{ダイシヤウダイジン}の女御_{ニョウゴ}とぞ聞ゆる。その御方_{ゴカタ}に、うちふしといふ者の女_メ、左京_{サキヤウ}といひてさぶらひけるを、「源中將_{ゲンチュウシャウ}かたらひて思ふ」など人々笑ふ頃、宮の職_{シヤク}におはしまいにしに参りて、「時々_{トキトキ}は御宿直_{ゴシュウジキ}など仕_シうまつるべけれど、さるべきさまに女房_{ニョウバウ}などもてなし給はねば、いと宮づかへおろかにさぶらふ。宿直所_{シュウジキショ}をだに賜_{タマ}りたらんは、いみじうまめにさぶらひなん」などいひ居給ひつれば、人々けになどいふ程に、「誠_{マコト}に人は、うちふしやすむ所のあるこそよけれ。さるあたりには、しけく参り給ふなるものを」とさし答_{コタ}へたりとて、「すべて物きこえず。方人_{カタウジ}と頼_{タノ}み聞ゆれば、人のいひふるしたるさまに取りなし給ふ」など、いみじうまめだちてうらみ給ふ。「あなあやし、いかなる事_{コト}をか聞え

ほとほりー
あつくなる
立腹する
さまこそー
譯が

笑ふー人々
がうちふし
との關係を
笑ひ居るぞ
と殿上人宣
方に言ひ聞
かせし也

花かへりー
花色のかへ
りさめたる
衛士ー一説
繪師、清み

つる。更に聞きとどめ給ふことなし」などいふ。傍なる人を引きゆるがせば、「さるべきこともなきを、ほとほり出で給ふ、さまこそあらめ」とて、花やかに笑ふに、「これもかのいはせ給ふならん」とて、いとものしと思へり。「更にさやうの事をなんいひ侍らぬ。人のいふだにくきものを」といひて、引き入りにしかば、後にもなほ、「人にはぢがましき事いひつけたる」と恨みて、「殿上人の、笑ふとていひ出でたるなり」との給へば、「さては一人を恨み給ふべくもあらざさめる、あやし」などいへば、その後は絶えてやみ給ひにけり。

昔おほえてふようなるもの

經綯縁の疊の舊りてふし出できたる。唐繪の屏風の表そこなはれたる。藤のかよりたる松の木枯れたる。地摺の裳の花かへりたる。衛士の目くらき。几帳のかたびらのふりぬる。帽額のなくなりぬる。七尺のかづらのあかくなりたる。葡萄染の織物の灰かへりたる。色好の老いくづをれたる。おもしろき家の木立やけたる。池などはさながらあれど、

て讀む

ことなしが
ほーその事
を成就せん
といふかほ
つき

十二月の云
云ー十二月
の晦日と正
月一日との
間

山の井ー萬
葉、淺香山

萍水草しけりて。

たのもしけなきもの

心みじかくて人忘れがちなる。聾の夜がれがちなる。六位の頭しろき。虚言する人の、さすがに人のことなしがほに大事うけたる。一番に勝つ雙六。六七八十なる人の、心地あしうして日ごろになりぬる。風はやきに帆あけたる船。經は不斷經。

近くてとほきもの

宮のほとりの祭。思はぬ兄弟、親族の中。鞍馬の九折といふ道。十二月の晦日、正月一日のほど。

遠くてちかきもの

極樂。船の道。男女の中。

井は

堀兼の井。走井は逢阪なるがをかしき。山の井、さしもあさきためしになりはじめけん。

影さへ見ゆる山の井の浅き心は我思はなくに

飛鳥井、みもひも寒しと響めたるこそをかしけれ。玉の井。少將の井。櫻井。后町の井。千貫の井。

受領は

紀伊守。和泉。

やどりのつかさの權の守は

下野。甲斐。越後。筑後。阿波。

大夫は

飛鳥井一催馬樂、飛鳥井に宿りはすべしかけもよしみもひもさむし、みもひは飲料水

式部大夫。左衛門大夫。史大夫。六位藏人。おもひかくべき事にもあらずかうぶりえて、何の大夫、權の守などいふ人の、板屋せばき家もたりて、また小檜垣など新しくし、車やどりに車ひきたて、前ちかく木おほくして、牛つながせて、草などはするこそいにくけれ。庭いと清けにて、紫革して、伊豫簾かけわたして、布障子はりて住居たる。夜は「門強くさせ」など事行ひたる、いみじうおひさきなくこころづきなし。親の家、舅は

いたづらなる一明家となれる

またからず一全からず、崩れて

さらなり、伯父兄などの住まぬ家、そのさるべき人のなからんは、おのづからむつまじう、うち知りたる受領、又國へ行きていたづらなる、さらすば女院、宮腹などの屋あまたあるに、官まち出でて後、いつしかとよき所尋ね出でて住みたるこそよけれ。女のひとり住む家などは、唯いたう荒れて、築土などもまたからず、池などのある所は、水草ゑ、庭なども、いと蓬茂りなどこそせねども、所々砂の中より青き草見え、淋しげなるこそあはれなれ。物かしこげに、なだらかに修理して、門いたうかため、きはぐしきは、いとうたてこそ覺ゆれ。

おのづから一さしのぞくに係るまだ人の一

宮仕人の里なども、親ども二人あるはよし。人しゆく出で入り、奥のかたにあまたさまさまの聲多く聞え、馬の音して騒しきまであれどかなし。されど忍びてもあらはれても、おのづから、「出で給ひけるを知らで」とも、又「いつか参り給ふ」などもいひにさしのぞく。心かけたる人は、「いかがは」と門あけなどするを、うたて騒しうあやふけに、夜半までなど思ひたるけしき、いとにくし。「大御門はさしつや」など問はすれば、「まだ人の

門番の答

供なるものども一わらふの主語

のる一本いゆる

らいさうと未詳、一説に衍文、一説に今宵らはさぞとの誤

おはすれば」など、なまふせがしけに思ひて答ふるに、「人出で給ひなば疾くさせ。このごろは盗人いと多かり」などいひたる、いとむつかしう、うち聞く人だにあり。この人の供なるものども、この容今や出づると、絶えずさしのぞきて、けしき見るものどもを、わらふべかめり。眞似うちするも、聞きてはいかにいと厳しういひ咎めん。いと色に出でていはぬも、思ふ心なき人は、必來などやる。されど健なるかたは、「夜更けぬ、御門もあやふかくなる」といひてぬるもあり。誠に志ことなる人は、「はや」などおまた度やはるれど、猶居あかせば、たびくありくに、あけぬべきけしきをめぐらかに思ひて、「いみじき御門を、今宵らいさうとあけひろけて」と聞えごちて、あちきなく曉にぞさすなる。いかどにくき。親そひぬるは猶こそあれ。まして誠ならぬは、いかに思ふらんとさへつよましようて。兄の家なども、實に聞くにはさぞあらん。夜中曉ともなく、門いと心がしこくもなく、何の宮、内裏わたりの殿ばらなる人々の出であひなどして、格子などもあけながら、冬の夜を居あかして、人の出でぬる後も、見出したるこそをかしけ

れ。有明などはましていとをかし。笛など吹きて出でぬるを、我は急ぎても寝られず、人のうへなどいひ、歌など語り聞くまよに、寝いりぬるこそをかしけれ。

雪のいと高くはあらで、うすらかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ。又雪のいと高く降り積みたる夕暮より、端ちかう、同じ心なる人二三人ばかり、火桶中に居ゑて、物語などするほどに、暗うなりぬれば、こなたには火もともさぬに、大かた雪の光いと白う見えたるに、火箸して灰などかきすさびて、あはれなるもをかしきも、いひあはするこそをかしけれ。よひも過ぎぬらんと思ふほどに、杳の音近う聞ゆれば、怪しと見出したるに、時々かやうの折、おほえなく見ゆる人なりけり。今日の雪をいかにも思ひきこえながら、何でふ事にさはり、そこに暮しつるよしなどいふ。今日來ん人をなどやうのすぢをぞ言ふらんかし。晝よりありつる事どもをうちはじめて、よろづの事をいひ笑ひ、圓座さし出したれど、片つ方の足はしもながらあるに、鐘の音の聞ゆるまでになりぬれど、内にも外にも、いふ事どもは飽かずおほゆる。味爽のほどに歸るとて、雪何の山

おほえなく一ふと、突然 今日來ん人を一拾遺、山里は雪ふりつみて道もなし今日來ん人を哀

とは見ん
雪何の山
朗詠、曉入
梁王之苑
雪滿群山
いと高う
一本いみじ
うに作る
雪月花の時
朗詠、琴
詩酒伴皆抛
我雪月花
時最憶君
沖一炭火
(おき)に掛
けしならん
御形の宣旨
女房の
名、今昔物

に満てるとうち誦じたるは、いとをかしきものなり。女のかぎりしては、さもえ居明さ
ざらましを、たどなるよりはいとをかしう、すきたる有様などを言ひあはせたる。
村上の御時、雪のいと高う降りたりけるを、楊器にもらせ給ひて、梅の花をさして、月
いと明きに、「これに歌よめ、いかどいふべき」と兵衛の藏人に賜びたりければ、雪月花
の時と奏したりけるこそ、いみじうめでさせ給ひけれ。「歌などよまんには世の常なり、か
う折にあひたる事なん、言ひ難き」とこそ仰せられけれ。同じ人を御供にて、殿上に人
侍はざりける程、佇ませおはしますに、すびつの烟の立ちければ、「かれは何の烟ぞ、見
て來」と仰せられければ、見てかへり参りて、

わたつみの沖にこがるゝ物見ればあまの釣してかへるなりけり

と奏しけるこそをかしけれ。蛙の飛び入りてこがるゝなりけり。

御形の宣旨、五寸ばかりなる殿上わらはのいとをかしけなるをつくりて、髻結ひ、装束
などうるはしくして、名かきて奉らせたりけるに、ともあきらのおほきみと書きたりけ

語に、御形
の宣旨とい
ふ人は優に
やさしく形
めでたかり
けり
念じて一恥
しさを耐へ
て
葛城の神
前註引歌、
一八六頁參
照
はなたせ給
へ一格子を
開け給へ、
上にまゐら
ずとあるは
開けずの意

るをこそ、いみじうせさせ給ひけれ。

宮に始めて参りたるころ、物の恥しきこと數知らず、涙も落ちぬべければ、夜々まゐり
て、三尺の御几帳の後に侍ふに、繪など取り出でて見せさせ給ふだに、手もえさし出す
まじうわりなし。これはとあり、かれはかよりなどの給はするに、高杯にまゐりたるお
ほと油なれば、髪のおすぢなども、なか／＼晝よりは顯證に見えてまばゆけれど、念じ
て見なです。いとつめたきころなれば、さし出させ給へる御手のわづかに見ゆるが、い
みじう匂ひたる薄紅梅なるは、限なくめでたしと、見知らぬさとび心地には、いかどは
かゝる人こそ世におはしましけれと、驚かるゝまでぞまもりまゐらす。曉には疾くなど
急がるゝ。「葛城の神も暫し」など仰せらるゝを、いかですぢかひても御覽せんとて臥し
たれば、御格子もまゐらず。女官まゐりて、「これはなたせ給へ」といふを、女房聞きては
なつを、「待て」など仰せらるれば、笑ひてかへりぬ。物など問はせ給ひの給はするに、久し
うなりぬれば、「おりまほしうなりぬらん、さは早」とて、「よさは疾く」と仰せらるゝ。

あへなきま
で一暇もな
き程
急がせば一
原本出せば
に作る

御まかなひ
一御配膳

あうよりて
一奥へより
て

るざり歸るや遅きとあけちらしたるに、「雪いとをかし、今日は晝つかた參れ、雪にくも
りてあらはにもあるまじ」など、たびく召せば、この局主人も、「さのみや籠り居給ふ
らんとする。いとあへなきまで御前許されたるは、思しめすやうこそあらめ。思ふに違
ふはにくきものぞ」と、唯いそがしに急がせば、我にもあらぬ心地すれば、參るもいとぞ
苦しき。火焼屋のうへに降り積みたるも珍しうをかし。御前近くは、例の炭櫃の火こち
たくおこして、それにはわざと人も居ず。宮は沈の御火桶の梨繪したるに向ひておはしま
す。上臈御まかなひし給ひけるまよに近くさぶらふ。次の間に長炭櫃に間なく居たる人
人、唐衣著垂れたるほどなり。安らかなるを見るも羨しく、御文とりつぎ、立ち居ふる
まふさまなど、つよましけならず、物いひるみわらふ。いつの世にか、さやうに交ひな
らんと思ふさへぞつよましき。あうよりて、三四人集ひて繪など見るもあり。暫時あり
て、さき高うおふ聲すれば、「殿參らせ給ふなり」として、散りたる物ども取りやりなどする
に、奥に引き入りて、さすがにゆかしきなめりと、御几帳のほころびより僅に見入れ

道もなし一
拾遺集、山
里は雪降り
つみて道も
なし今日來
ん人を哀と
は見ん

さぞ一斯様
斯々の者な
り

たり。大納言殿の參らせ給ふなりけり。御直衣指貫の紫の色、雪にはえてをかし。柱の
もとに居給ひて、「昨日今日物忌にて侍れど、雪のいたく降りて侍れば、おほつかなきに」
などのたまふ。「道もなしと思ひけるに、いかでか」とぞ御答あなる。うち笑ひ給ひて、
「あはれともや御覽ずるとて」などの給ふ御有様は、これよりは何事かまさらん。物語に
いみじう口にまかせて言ひたる事ども、違はざめりとおほゆ。宮は白き御衣どもに、紅
の唐綾二つ、白き唐綾と奉りたる、御髪のかよらせ給へるなど、繪に書きたるをこそ、か
かることは見るに、現にはまだ知らぬを、夢の心地ぞする。女房と物いひ戯れなどし給
ふを、答えさよか恥しとも思ひたらず聞えかへし、空言などの給ひかくるを、争ひ論じ
など聞ゆるは、目もあやに、あさましきまで、あいなく面ぞ赤むや。御菓子まわりなど
して、御前にも參らせ給ふ。「御几帳の後なるは誰ぞ」と問ひ給ふなるべし。さぞと申す
にこそあらめ、立ちておはするを、外へにやあらんと思ふに、いと近う居給ひて、物など
の給ふ。まだ參らざりしとき聞きおき給ひける事などの給ふ。「實にさありし」などの給

猶いと云々
—此語の上
に、然るに
今かく近く
添はれ奉り
てはと補ひ
見るべし、
おほけなく
云々は身分
不相應に如
何で斯く出
仕したりし
と也

たて—立た
せ、清少が
我を捉へて
立たしめず
と也

ふに、御几帳隔てて、よそに見やり奉るだに恥しかりつるを、いとあさましう、さし向ひ聞えたる心地、うつとも覺えず。行幸など見るに、車のかたにいさよか見おこせ給ふは、下簾ひきつくろひ、透影もやと扇をさし隠す。猶いと我心ながらも、おほけなくいかで立ち出でにしごと、汗あえていみじきに、何事をか聞えん。かしこきかけと捧けたる扇をさへ取り給へるに、振りかくべき髪のおやしさを思ふに、すべて誠にさる氣色やつきてこそ見ゆらめ、疾く立ち給へなど思へど、扇を手まさぐりにして、「繪は誰が書きたるぞ」などの給ひて、頓にも立ち給はねば、袖を押しあてて、うつぶし居たるも、唐衣にしろい物うつりて、まだらにならんかし。久しう居給ひたりつるを、論なう苦しと思ふらんと心得させ給へるにや、「これ見給へ、これは誰が書きたるぞ」と聞えさせ給ふを、嬉しと思ふに、「賜ひて見侍らん」と申し給へば、「猶こよへ」との給はすれば、「人をとらへてたて侍らぬなり」との給ふ。いといまめかしう、身のほど年には合はず、かたはらいし。人の草假字書きたる草紙、取り出でて御覽す。「誰がにかあらん、かれに見せさせ

一所—御ひと方

我も—其人御自身も

鼻を云々—
當時人と會
話中傍に噓
する人あれ
ば對手の言
を虚言と思
ふ俗ありし
なり

給へ。それぞ世にある人の手は見知りて侍らん」と怪しき事どもを、唯答させんとしたまふ。一所だにあるに、又さきうちおはせて、同じ直衣の人參らせ給ひて、これは今少し花やぎ、猿樂ことなどうちし、譽め笑ひ興じ、我も、なにがしがとある事、かよる事など、殿上人のうへなど申すを聞けば、猶いと變化の物、天人などのおり来るにやと覺えてしを、侍ひ馴れ、日ごろ過ぐれば、いとさしもなきわざにこそありけれ。かく見る人々も、家のうち出で初めけん程は、さこそは覺えけめど、かく爲もて行くに、おのづから面馴れぬべし。物など仰せられて、「我をば思ふや」と問はせ給ふ。御いらへに、「いかにかは」と啓するに合せて、臺盤所のかたに、鼻をたかくひたれば、「あな心う、虚言するなりけり。よし〜」とていらせ給ひぬ。いかでか虚言にはあらん。よろしうだに思ひ聞えさすべき事は、鼻こそは虚言しけれとおほゆ。さても誰かかくにくきわざしつらんと、大かた心づきなしと覺ゆれば、わがさる折も、おしひしぎかへしてあるを、ましてにくしと思へど、まだうひ〜しければ、ともかくも啓しなほさで、明けぬれば

御けしきは
—中宮の思
召はこの御
歌の如しと
取次の人の
詞也

職の神—陰
陽家に使は
れ咒咀など
にて災禍を
なす神

きしろふ云
云—競争激
しき際の藏
人に我愛す
る子をなし
たる人

おりたるすなはち、あまのり淺縁なる薄様に、いん艶なる文をもてきたり。見れば、
いかにしていか知らましいつはりをそらにたどすの神なかりせば
となん、御けしきはとあるに、めでたくも口をしくも思ひ亂るゝに、なほ昨夜の人ぞた
づね聞かまほしき。

うすきこそそれにもよらねはなゆゑにうき身の程を知るぞわびしき
猶こればかりは啓しなほさせ給へ、職の神もおのづからいと畏しとて、参らせて後も、う
たて、折しもなどてさはたありけん、いとをかし。

したりがほなるもの

ちつきつたち正月一日のつとめて、さいそ最初にはなひたる人。きしろふたびの藏人に、かなしうする子な
したる人のけしき。除目に、その年の一の國得たる人の、よろこびなどいひて、「いとか
しこうなり給へり」など人のいふ答に、「何か、いと異様に亡びて侍るなれば」などいふ
も、したり顔なり。また人多く挑みたる中に、選られて壻に取られたるも、我はと思ひ

ふくつけき
—欲深き、
原本ふくつ
けさに作る
ありく—て
—長き間待
ちに待ちて

ぬべし。こはき物怪調じたる驗者。掩韻の明疾うしたる。小弓射るに、片つ方の人咳嗽
をし紛はして騒ぐに、念じて音高う射てあてたるこそ、したり顔なるけしきなれ。碁を
うつに、さばかりと知らで、ふくつけきは、又こと所にかよぐりありくに、ことかたよ
り、目もなくして、多くひろひ取りたるも嬉しからじや。ほこりに打ち笑ひ、たどの
勝よりはほこりかなり。ありく—て受領になりたる人の氣色こそうれしけなれ。僅にあ
る従者の無禮にあなづるも、妬しと思ひ聞えながら、いかどせんとして念じ過しつるに、我
にもまさる者どもの、かしこまり、たど仰承らむと追従するさまは、ありし人とやは見
えたる。女房うちつかひ、見えざりし調度装束の湧き出づる。受領したる人の中將にな
りたるこそ、もと公達のなりあがりたるよりも、氣高うしたり顔に、いみじう思ひたしめ
れ。位こそ猶めでたきものにはあれ。同じ人ながら、大夫の君や、侍従の君など聞ゆるを
りは、いと侮り易きものを、中納言、大納言、大臣などになりぬるは、無下にせんかた
なく、やんごとなく覺え給ふ事のこよなきよ。ほどくにつけては、受領もさこそは

供奉—内供奉
奉とて宮中
奉仕の僧
なりかゝり
—なり形の
み氣にかけ
繕ふ、一説
に、あなづ
られてなり
(句)かゝり
こそすれ

花風—一本
あまかぜ

あゝめれ。數多國に行きて、大貳や四位などになりて、上達部になりぬれば、おもくし。されど、さりとしてほど過ぎ、何ばかりの事はある。又多くやはある。受領の北の方にてくだるこそ、よろしき人の幸福には思ひてあゝめれ。只人の上達部の女にて、后になり給ふこそめでたけれ。されどなほ男は、わが身のなり出づるこそめでたくうち仰ぎたるけしきよ。法師の、なにがし供奉などいひてありくなどは、何とかは見ゆる。經たふとく讀み、みめ清けなるにつけても、女にあなづられて、なりかゝりこそすれ、僧都僧正になりぬれば、佛のあらはれ給へるにこそとおほし惑ひて、かしこまるさまは、何にかは似たる。

風は

嵐。こがらし。三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる花風、いとあはれなり。八九月ばかりに、雨にまじりて吹きたる風、いとあはれなり。雨のあし横ざまに、さわがしう吹きたるに、夏とほしたる綿絹の、汗の香などかわき、生絹の單衣に、引き重ねて著たるも

この生絹だ
に云々この
の語の上
に、夏の程
は、又はさ
いつ頃はな
ど補ふべし

おもはず—
心外

格子のつば
—格子の目
をいふにや

をかし。この生絹だにいとあつかはしう、捨てまほしかりしかば、いつの間にかうなりぬらんと思ふもをかし。あかつき、格子妻戸など押しあけたるに、嵐のさと吹きわたりて、顔にしみたるこそいみじうをかしけれ。九月三十日、十月一日のほどの空うち曇りたるに、風のいたう吹くに、黄なる木の葉どもの、ほろく〜とこほれ落つる、いとあはれなり。櫻の葉、棕の葉などこそ落つれ。十月ばかりに、木立多かる所の庭は、いとめでたし。

野分の又の日こそ、いみじう哀におほゆれ。立部透垣などのふしなみたるに、前裁ども心ぐるしけなり。大なる木ども倒れ、枝など吹き折られたるだに惜しきに、萩女郎花などのうへに、よろほひ這ひ伏せる、いとおもはずなり。格子のつほなどに、颯と際を殊更にしたらんやうに、こまなくと吹き入りたるこそ、あらかりつる風のしわざともおほえね。いと濃き衣のうはぐもりたるに、朽葉の織物、羅などの小袷著て、まことしく清けなる人の、夜は風のさわぎにねざめつれば、久しう寐おきたるまゝに、鏡うち見て、

花もかへり
—花色も褪
め
宿直物—寝
衣
そぎすゑ—
髪かみの切り揃
へたるさき

物まるる—
食事をする

母屋もやより少しるざり出でたる、髪は風に吹きまよはされて、少しうちふくだみたるが肩にかよりたるほど、實まことにめでたし。物あはれなる氣色けしき見るほどに、十七八ばかりにやあらん、ちひさくはあらねど、わざと大人おとななどは見えぬが、生絹なまぬいの單衣ひとへのいみじうほころびたる、花もかへり、濡れなどしたる、薄色の宿直物さのりものを着て、髪は尾花おなのやうなるそぎすゑも、長ながばかりは衣きぬの裾すそにはづれて、袴はかまのみあざやかにて、そばより見ゆる。わらはべの、若き人の根籠ねこめに吹き折られたる前裁せんざいなどを取り集め起し立てなどするを、羨うらやましけに推し量りて、つき添そひたるうしろもをかし。

こころにくきもの

物へだてて聞くに、女房にようぼうとは覚えぬ聲の、忍びやかに聞えたるに、答こたへわかやかにして、うちそよめきて参るけはひ、物まるる程にや、筋飯はしかひ匙しなどのとりまぜて鳴りたる、提ひきの柄わのたふれ伏すも、耳みみこそとどまれ。打ちたる衣きぬの鮮あざやかなるに、騒さわしうはあらで、髪かみのふりやられたる。いみじうしつらひたる所の、おほとなぶらは参らで、長炭ながすす櫃びつに、いと多く

はしの云々
—火箸ひしを眞
筋達しんたつに立て
たる

驚おどきて—目
を覺おぼして

たと島—萬
歳抄まんざいせうに、た
くのしまの
誤あやか然しからば
出雲也

おこしたる火の光に、御几帳みきさやの紐ひものいとつややかに見え、御簾みすだの帽額ぼうがくのあけたる、鈎かぎのきはやかなるもけざやかに見ゆ。よく調しらじたる火桶ひかきの、灰清はいけにおこしたる火に、よく書きたる繪えの見えたる、をかし。はしのいときはやかにすぢかひたるもをかし。夜いたう更けて、人の皆寝ぬる後に、外そとのかたにて、殿上人てんじやうびなど物いふに、奥おくに、碁石いし筈はずにいゑる音のあまた聞えたる、いと心にくし。簀すい子こに火ともしたる。物へだてて聞くに、人の忍ぶるが、夜半よなかなどうち驚おどきて、いふ事は聞えず、男も忍びやかに笑ひたるこそ、何事ならんとをかしけれ。

島しまは

浮島うきしま 八十島やそしま たはれ島たはれしま 水島みづしま 松が浦島まつがうらしま 籬まがきの島しま 豊浦とよらの島しま たと島たとしま

濱はまは

そとの濱はま 吹上ふきあの濱はま 長濱ながはま 打出うちでの濱はま 諸寄もろよせの濱はま 千里ちよの濱はまこそ廣うおもひやられるれ。浦うらは

生の浦。鹽竈の浦。志賀の浦。名高の浦。こりすまの浦。和歌の浦。

寺は

壺坂。笠置。法輪。高野は、弘法大師の御住處なるがあはれなるなり。石山。粉川。志賀。

經は

法華經はさらなり。千手經。普賢十願。隨求經。尊勝陀羅尼。阿彌陀の大呪。千手陀羅尼。

文は

文集。白氏文集七十卷。文集。文選。博士の申文。

佛は

如意輪は、人の心をおほしわづらひて、頰杖を突きておはする。世に知らずあはれにはづかし。千手、すべて六觀音。不動尊。藥師佛。釋迦。彌勒。普賢。地藏。文珠。

文集—白氏
文集七十卷
申文—願書

物語は

殿うつり—以下世に傳らず。かほぼり—扇。すみよし、うつほの類は、殿うつり。月まつ女。交野の少將。梅壺の少將。人め。國のづり。むもれ木。道心すゝむる松が枝。こまの物語は、ふるきかはほりさし出でてもいにしが、をかしきなり。

野は

そうけ野—國不詳、僧毛にとりなしての洒落にや。嵯峨野さらなり。印南野。交野。こま野。粟津野。飛火野。しめぢ野。そうけ野こそす。すろにをかしけれ。などさつけたるにかあらん。安倍野。宮城野。春日野。紫野。

陀羅尼は

あかつき—あかつき—曉讀むが尊しと也。讀經は

ゆふぐれ。

あそびは

夜人の顔見えぬほど。あそびわざは、さまあしけれども、鞠もをかし。小弓、掩韻。碁。

舞は

漢土に云々
—鴻門の會
に項莊項伯
の劍を抜い
て舞へるを
いふ
まみ—目つ
き
駿河舞。求子。太平樂はさまあしけれど、いとをかし。太刀などうたてくあれど、いとおもしろし。漢土に敵に具して遊びけんなど聞くに。烏の舞。拔頭は、頭の髪ふりかけたるまみなどはおそろしけれど、樂もいとおもしろし。落蹲は、二人して膝ふみて舞ひたる。こまがた。

ひきものは

琵琶。箏のこと。

しらべは

風香調。黃鐘調。蘇香の急。鶯のさへづりといふしらべ。相府蓮。

笛は

横笛いみじうをかし。遠うより聞ゆるが、やうく近うなりゆくもをかし。近かりつるがはるかになりて、いとほのかに聞ゆるも、いとをかし。車にても徒歩にても馬にても、すべて懐にさし入れてもたるも、何とも見えず。さばかりをかしきものはなし。まして聞き知りたる調子など、いみじうめでたし。曉などに、忘れて枕のもとにありたるを見つけたるも、猶をかし。人の許より取りにおこせたるを、おし包みて遣るも、たゞ文のやうに見えたり。笙の笛は、月のあかきに、車などにて聞えたる、いみじうをかし。所せく、もてあつかひにくくぞ見ゆる。吹く顔やいかにぞ。それは横笛もふきなしありかし。筆筈は、いとむつかしう、秋の蟲をいはど、轡蟲などに似て、うたてけぢかく聞かまほしからず。ましてわろう吹きたるはいとにくきに、臨時の祭の日、いまだ御前には出ではてで、物の後に、横笛をいみじう吹き立てたる、あなおもしろと聞くほどに、半ばかりより、うちそへて吹きほせたる程こそ、唯いみじう麗しき髪もたらん人も、皆立ちあがりぬべき心地ぞする。やうく琴笛あはせて歩み出でたる、いみじう

ふきなしありかし—異本ふきなしなめりかしむつかしう—異本かしがまし
うちそへて—筆筈を也立ちあがり

―餘り面白
さにぞつと
して毛髪も
立つ

やうしたる
―様した
る、又は耀
(えう)した
るにて磨き
立てたる義
にや

賀茂の社の
―古今集、
千早振賀茂
の社のゆふ
だすきひと
日も君をか
けぬ日はな
し

をかし。

見るものは

行幸。祭のかへさ。御賀茂詣。臨時の祭、空くもりて寒けなるに、雪少しうち散りて、挿頭の花、青摺などにかよりたる、えもいはずをかし。太刀の鞘の、きはやかに黒うまだらにて、白く廣う見えたるに、半臂の緒のやうしたるやうにかよりたる。地摺袴の中より、氷かと驚くばかりなる打目など、すべていとめでたし。今少し多く渡らせまほしきに、使は必にくけなるもあるたびは、目もとまらぬ。されど藤の花に隠されたる程はをかしう、猶過ぎぬるかたを見送らるゝに、陪従のしなおくれたる、柳の下襲に、かざしの山吹おもなく見ゆれども、扇いと高くうちならして、「賀茂の社のゆふだすき」と歌ひたるは、いとをかし。
行幸になすらふるものは何かあらん。御輿に奉りたるを見参らせたるは、明暮御前に侍ひ、仕う奉る事もおほえず、かうくしういつくしう、常は何ともなきつかさ、ひめま

御綱助―春
註に、鳳輦
の御綱を奉
行する大舍
人をいふに
や
あえしを―
原本あへし
をに作る

をかしけれ
―原本をか
しに作る
奉りて―齋
院の乗らせ
給ひて

うちぎみさへぞ、やんごとなう珍しう覺ゆる。御綱助、中少將などいとをかし。祭のかへさいみじうをかし。きのふは萬の事うるはしうて、一條の大路の廣う清らなるに、日の影もあつく、車にさし入りたるもまばゆければ、扇にて隠し、居なほりなどして、久しう待ちつるも見苦しう、汗などもあえしを、今日はいと疾く出でて、雲林院、知足院などのもとに立てる車ども、葵かつらもうちなえて見ゆ。日は出でたれど、空は猶うち曇りたるに、いかで聞かんと、目をさまし、起き居て待たるゝ杜鵑の、數多さへあるにやと聞ゆるまで、鳴きひどかせば、いみじうめでたしと思ふ程に、鶯の老いたる聲にて、かれに似せんとおほしく、うち添へたるこそ、憎けれど又をかしけれ。いつしかと待つに、御社の方より、赤き衣など著たる者どもなど連れ立ちてくるを、「いかにぞ、事成りぬや」などいへば、「まだ無期」など答へて、御輿、腰輿など持てかへる。これに奉りておはしますらんもめでたく、けぢかく如何でさる下司などの侍ふにかとおそろし。はるかけにいふ程もなく歸らせ給ふ。葵より始めて、青朽葉どものいとをかしく見ゆるに、所の

をさくし
く尤もら
しく、きち
んとして
わりなく
詮方なく
おどろかし
げに亂れ
茂りて
えも通るま
じう車の

衆の青色白製を、けしきばかり引きかけたるは、卯の花垣根ちかうおほえて、杜鵑もか
けに隠れぬべう覺ゆかし。昨日は車ひとつに數多乗りて、二藍の直衣、あるは狩衣など亂
れ著て、簾取りおろし、物ぐるほしきまで見えし公達の、齋院の垣下にて、ひの装束う
るはしくて、今日は一人づつ、をさくしく乗りたる後に、殿上童のせたるもをかし。
わたりはてぬる後には、などかさしも惑ふらん。我もくと、危くおそろしきまで、前
に立たんと急ぐを、「かうな急ぎそ、のどやかに遣れ」と扇をさし出でて制すれど、聞き
も入れねば、わりなくて、少し廣き所に強ひてとどめさせて立ちたるを、心もとなく
くしとぞ思ひたる、きほひかよる車どもを見やりてあるこそをかしけれ。少しよろしき
程にやり過して、道の山里めきあはれなるに、うつ木垣根といふ物の、いと荒々しう、お
どろかしけにさし出でたる枝どもなど多かるに、花はまだよくもひらけはせず、つほみ
がちに見ゆるを折らせて、車のこなたかなたなどに挿したるも、柱などの萎みたるが口
惜しきに、をかしうおほゆ。遠きほどは、えも通るまじう見ゆる行くさきを、近う行き

雑沓して也
峯にわかる
る一古今、
風吹けば峯
に別る、白
雲の絶えて
つれなき君
が心が

おほめかし
きに一黄昏
時に判然
と見えざる
に

もてゆけば、さしもあらざりつるこそをかしけれ。男の車の誰とも知らぬが、後に引き
つゞきてくるも、たゞなるよりはをかしと見る程に、引き別るゝ所にて、「峯にわかるよ」
といひたるもをかし。
五月ばかり、山里にありく、いみじくをかし。澤水も實にたゞいと青く見えわたるに、う
へはつれなく草生ひ茂りたるを、ながくとたゞまに行けば、下はえならざりける水
の、深うはあらねど、人の歩むにつけて、とばしりあけたるいとをかし。左右にある垣
の枝などのかよりて、車のやかたに入るも、急ぎてとらへて折らんと思ふに、ふとはづ
れて過ぎぬるも口惜し。蓬の車に押しひしがれたるが、輪のまひたちたるに、近うかど
へたる香もいとをかし。
いみじう暑きころ、夕すゞみといふ程の、物のさまなどおほめかしきに、男車のさき
おふはいふべき事にもあらず、たゞの人も、後の簾あけて、二人も一人も乗りて、走らせ
て行くこそ、いと涼しげなれ。まして琵琶ひきならし、笛の音聞ゆるは、過ぎていぬるも

かへたる
一説か
へたる、香
残りて含ま
れ居るなり

山吹のはな

口惜しく さやうなるほどに、牛の鞞しりがいの香かの、怪しうかぎ知らぬさまなれど、うち嗅かがれたるが、をかしきこそ物ぐるほしけれ。いと暗闇くらやみなるに、さきにともしたる松の煙けむりの、かの車にかよれるもいとをかし。
五日いつかの菖蒲さうぶの、秋冬過ぐるまであるが、いみじう白み枯れて怪しきを、引き折りあけたるに、その折の香残りて、かどへたるもいみじうをかし。
よくたきしめたる薰物たきものの、昨日きのう、一昨日おととい、今日けふなどはうち忘れたるに、衣きぬを引きかづきたる中に、煙の残りたるは、今のよりもめでたし。
月のいとあかきに川を渡れば、牛の歩むまゝに、水晶などのわれたるやうに、水のちりたるこそをかしけれ。

おほきにてよきもの

法師。くだもの。家。餌囊えぶくろ。硯すずりの墨すみ。男おとこの目。あまりほそきは女めきたり、又また鏡かみなりのやうならんはおそろし。火桶ひおけ。酸漿はらばら。松の木。山吹のはなびら。馬も牛も、よきは大おほきにこ

びら一本
山吹櫻のは
なびら

そあめれ。

みじかくてありぬべきもの

とみの物ぬふ糸。燈臺とうだい。下種げす女の髪かみ、うるはしく短くてありぬべし。人の女によめの聲こゑ。

人の家につきぐしきもの

かき板一物
を載せて運
ぶ板

厨くりや侍ざむらいの曹司そうし。箒はきのあたらしき。懸盤かけばん。童女わらわめ。はしたもの。衝立障子ついでたてきりぎりす。三尺の几帳きりぎりす。装束まつぷくよくしたる餌囊えぶくろ。からかさ。かきいた。棚厨子たなづし。ひさけ。銚子てうし。中盤ちゅうばん。圓座わらうだ。ひぢをりたる廊らう。竹王繪ちくわうゑかきたる火桶ひおけ。

竹王繪一
説に作り繪
の誤かとい
へり

ものへ行く道に、清けなる男おとこの、豎文たてがみのほそやかなる持ちて急ぎ行くこそ、何地いづちならんとおほゆれ。又清けなる童女わらわめなどの、裯あこめいと鮮あざやかにはあらず、萎なえばみたる、履子けいしのつやよかなるが、革かわに土多くついたるをはきて、白き紙に包みたる物、もしは箱はこの蓋ふたに、草紙くさしどもなど入れて持て行くこそ、いみじう、呼び寄せて見まほしけれ。門かどぢかなる所をわたるを、呼び入るよに、愛敬あいぎやうなく答こたへもせで往く者は、つかふらん人こそ推しはからる

あながち云云一あまり甚しくやつしたる様にあらんは

れ。行幸はめでたきもの、上達部、公だち車などのなきぞ少しさうぐしき。よろづの事よりも、わびしけなる車に、装束わろくて物見る人、いともどかし。説經などはいとよし。罪うしなふかたの事なれば。それだに猶あながちなるさまにて、見苦しかるべきを、まして祭などは、見でありぬべし。下簾もなく、白きひとへうち垂れなどしてあゝめりかし。唯その日の料にとて、車も下簾もしたてて、いと口をしうはあらじと出でたるだに、まさる車など見つけては、何しになど覺ゆるものを、ましていかばかりなる心地にて、さて見るらん。おりのほりありく公達の車の、推し分けて近う立つ時などこそ、心ときめきはすれ。よき所に立てんといそがせば、疾く出でて待つほどいと久しきに、居張り立ちあがりなど、あつく苦しく、まち困する程に、齋院の垣下に参りたる殿上人、所の衆、辨、少納言など、七つ八つ引きつゞけて、院のかたより走らせてくるこそ、事なりにけりと驚かれて、嬉しけれ。殿上人の物言ひおこせ、所々の御前どもに水飯くは

おぼえある一良家の、世に時めく

人給一副車

所ある一すきたる場所のある
げすも一一本げすども
に作る
便なき人
宿らすまじき人

すとして、棧敷のもとに馬ひき寄するに、おほえある人の子どもなどは、雑色などおりて、馬の口などしてをかし。さらぬものの、見もいれられぬなどぞ、いとほしけなる。御輿の渡らせ給へば、簾もあるかぎり取りおろし、過ぎさせ給ひぬるに、まどひあぐるもをかし。その前に立てる車は、いみじう制するに、などて立つまじきぞと、強ひて立つれば、いひわづらひて、消息などするこそをかしけれ。所もなく立ち重りたるに、よき所の御車、人給ひきつゞきて多くくるを、いづくに立たんと見る程に、御前ども唯おりに下りて、立てる車どもを唯のけに退けさせて、人給つゞきて立てるこそ、いとめでたけれ。逐ひのけられたるえせ車ども、牛かけて、所あるかたにゆるがしもて行くなど、いとわびしけなり。きらくしきなどをば、えさしも推しひしがすかし。いと清けなれど、又ひなび怪しく、けすも絶えず呼びよせ、ちご出しすゑなどするもあるぞかし。廊に便なき人なん、曉に笠さよせて出でけるといひ出でたるを、よく聞けば我がうへなりけり。地下などいひても、めやすく、人に許されぬばかりの人にもあらざんめるを、怪

手のかぎり
—手だけ

こと紙—別
の紙

菖蒲輿—菖
蒲にて飾れ
る小さき輿

しの事やと思ふほどに、うへより御文もて来て、「返事只今」と仰せられたり。何事にかと思ひて見れば、大笠の繪をかきて、人は見えす、唯手のかぎり笠をとらへさせて、下に

三笠山やまの端あけしあしたより

とかせ給へり。猶はかなき事にても、めでたくのみ覺えさせ給ふに、恥しく心づきな
き事は、いかで御覽ぜられじと思ふに、さるそらごとなどの出でくるこそ苦しけれと、
をかしうて、こと紙に、雨をいみじう降らせて、下に、

雨ならぬ名のふりにけるかな

さてや濡れぎぬには待らんと啓したれば、右近内侍などにかたらせ給ひて、笑はせ給ひ
けり。

三條の宮におはしますころ、五日の菖蒲輿など持ちてまゐり、薬玉まゐらせなど、わか
き人々 御匣殿など、薬玉して、姫宮若宮つけさせ奉り、いとをかしき薬玉ほかよりも參

あをさし—
青麥にて作
れる菓子
ませこし—
ませがき越
しの麥
あたらしき
—可惜しき
又は目新し
く風變りの
義ならん
よくも云々
—よくも靴
負佐に似た
まひしかな
と言ひてや
がて靴負佐
と渾名した
りと也
蚊の睫の云

らせたるに、あをさしといふものを人の持てきたるを、青き薄様を艶なる硯の蓋に敷き
て、「これませこしにさふらへば」とてまゐらせたれば、

みな人は花やてふやといそぐ日もわがころをば君ぞ知りける

と、紙の端を引き破りて、書かせ給へるものとめでたし。

十月十餘日の月いとあかきに、ありきて物見んとて、女房十五六人ばかり、皆濃き衣を
うへに著て、引きかくしつゝありし中に、中納言の君の、紅の張りたるを著て、頸より
髪をかきこし給へりしかば、「あたらしきぞ」とて、「よくも似たまひしかな。靴負佐」と
ぞわかき人々はつけたりし。後に立ちて笑ふも知らずかし。

成信の中將こそ、人の聲はいみじうよう聞き知り給ひしか。同じ所の人の聲などは、常
に聞かぬ人は、更にえ聞き分かず、殊に男は、人の聲をも手をも、見わき聞きわかぬも
のを、いみじう密なるも、かしこう聞き分き給ひしこそ。

大藏卿ばかり耳とき人なし。まことに蚊の睫の落つるほども、聞きつけ給ひつべくこそ

云一列子湯問篇の比喻にもとづく

勞多きに云云一墨の久しく使はれしをいふ、ささし一一本さし、墨挾み也、傍註には、たる(句)かささしなど云云筆のかさ也とあれど如何
青磁の龜一

ありしか。職の御曹司の西おもてに住みしころ、大殿の四位少將と物いふに、側にある人、この少將に、扇の繪の事いへとささめければ、「今かの君立ち給ひなんにを」と密にいひ入るよを、その人だにえ聞きつけで、「何とかく」と耳をかたぶくるに、手をうちて、「にくし、さのたまはど今日はたよじ」とのたまふこそ、いかで聞き給ひつらんと、あさましかりしか。

硯きたなげに塵ばみ、墨の片つかたにしどけなくすりひらめかし、勞多きになりたるが、さよしなどしたるこそ心もとなしと覺ゆれ。萬の調度はさるものにて、女は鏡硯こそ心のほど見ゆるなめれ。おきぐちのはざめに、塵など打ち捨てたるさま、こよなしかし。男はまして文机清けに押し拭ひて、重ねならずば、ふたつ懸子の硯のいとつきづきしう、蒔繪のさまもわざとならねどをかしうて、墨筆のさまなども、人の目とむばかりしたてたるこそ、をかしけれ。とあれどかよれどおなじ事とて、黒箱の蓋も片方おちたる硯、わづかに墨のゐたる、塵のこの世には拂ひがたけなるに、水うち流して、青

龜形の水入、一説には瓶人わろし一體裁悪し

こはものややりと一説こはものへやるとてに作る、落合直文氏は假名にこはものややりと細櫃の蓋などに書き散らしてならん、こは

磁の龜の口おちて、首のかぎり穴のほど見えて、人わろきなども、つれなく人の前にさし出づかし。人の硯を引き寄せて、手ならひをも文をも書くに、「その筆な使ひたまひそ」と言はれたらんこそ、いとわびしかるべけれ。うち置かんも人わろし、猶つかふもあやにくなり。さ覺ゆることも知りたれば、人の爲るもいはで見るに、手などよくもあらぬ人の、さすがに物かよまほしうするが、いとよくつかひかためたる筆を、あやしのやうに、水がちにさしぬらして、こはものややりと假名に細櫃の蓋などに書きちらして、横ざまに投げ置きたれば、水に頭はさし入れてふせるも、にくき事ぞかし。されどさいはんやは、人の前に居たるに「あなくら、奥より給へ」といひたるこそ、又わびしけれ。さしのぞきたるを見つけては、驚きいはれたるも、思ふ人の事にはあらずかし。

めづらしといふべきことにはあらねど、文こそ猶めでたきものなれ。遙なる世界にある人の、いみじくおほつかなく、いかならんと思ふに、文を見れば、唯今さし向ひたるやうにおほゆる、いみじきことなりかし。わが思ふ事を書き遣りつれば、あしこまでも行

ものは堅き物、やはりは遺戸の義といへり

きつかざらめど、こころゆく心地こそすれ。文といふ事なからましかば、いかにいぶせく、くれふたがる心地せまし。よろづの事思ひくへて、その人の許へとて、こまなくと書きて置きつれば、おほつかなさをも慰む心地するに、まして返事見つれば、命を延ぶべかんめる、實にことわりによ。

むまやは

梨原。ひくれの驛。望月の驛。野口の驛。やまの驛。あはれなる事を聞き置きたりしに、又あはれなる事のありしかば、なほ取りあつめてあはれなり。

岡は

船岡。片岡。鞆岡は笹の生ひたるがをかしきなり。かたらひの岡。人見の岡。

社は

布留の社。活田の社。龍田の社。はなふちの社。美久理の社。杉の御社。しるしあらんとをかし。任事の明神いとたのもし。さのみ聞きけんといはれ給はんと思ふぞいとを

笹の云々―神樂歌に、この笹はいづこの笹ぞ舍人等が腰にさがれる鞆岡の笹杉の社―三

輪の社、しるしはしるしの杉也、古今集に、我庵はみわの山本こひしくげとぶらひ來ませ杉たてる門

家に云々―老人の出で仕へずして家に居らん者をば云々

かしき。蟻通の明神、貫之が馬のわづらひけるに、この明神のやませ給ふとて、歌よみて奉りけん、やめ給ひけん、いとをかし。この蟻通とつけたる意は、まことにやあらん、昔おはしましける帝の、唯若き人をのみ思しめして、四十になりぬるをば、失はせ給ひければ、他の國の遠きに往きかくれなどして、更に都のうちにさる者なかりけるに、中將なりける人の、いみじき時の人にて、心なども賢かりけるが、七十ちかき親ふたりをもたりけるが、かう四十をだに制あるに、ましていとおそろしと懼ち騒ぐを、いみじう孝ある人にて、遠き所には更に住ませじ、一日に一度見ではえあるまじとて、密によるく家の内の土を掘りて、その内に屋を建てて、それに籠めすゑて、往きつゝ見る。おほやけにも人にも、うせ隠れたるよしを知らせてあり。などでか、家にいり居たらん人をば、知らでもおはせかし、うたてありける世にこそ。親は上達部などにやありけん、中將など子にてもたりけんは。いと心かしこく、萬の事知りたりければ、この中將若けれど、才あり、いたり賢くして、時の人に思すなりけり。唐土の帝、この國の帝を、いかで謀り

まるに丸
かへりて
向き返り先
に立ちて

すげえ末
生へすゑは
え）又は直
生（すぐは
え）の義が、
普通には末
條の義にて

て、この國うち取らむとて、常にこゝろみ、争事あらがひごとをしておくり給ひけるに、つやくと、ま
ろに、美しけに削りたる木の二尺ばかりあるを、「これが本末もとすえいづかたぞ」と問ひ奉りたる
に、すべて知るべきやうなければ、帝思みかきしめし煩ひたるに、いとほしくて、親の許に行
きて、かうくの事なんあるといへば、「只はやからん川に立ちながら、横ざまに投げ入
れ見んに、かへりて流れん方を、末と記してつかはせ」と教ふ。参りて我われしり顔にして、「こ
ころみ侍らん」とて、人々具して投げ入れたるに、さきにして行くかたに印しるしをつけて遣
したれば、實まことにさなりけり。又二尺ばかりなる蛇くちなはの同じやうなるを、「これはいづれか雄
雌おんな」とて奉れり。又更に人え知らず。例の中將行きて問へば、「二つをならべて、尾のかた
に細きすげえをさしよせん、尾はたらかさんを雌めと知れ」といひければ、やがてそれ
を内裏だいりのうちにてさ爲しければ、實まことに一つは動さず、一つは動しけるに、又しるしつけて遣
しけり。ほど久しうて、七曲ななわだにわだかまりたる玉の中通りて、左右さうに口あきたるが小さき
を奉りて、「これに緒通なごほしてたまはらん、この國に皆し侍ることなり」とて奉りたるに、い

すわえの假
名なりと云
へり、木の
若枝

なほやは
りの義

老いたる父
母—自己の
父母のみに
限らず廣く
世間一般に
對する禁令
を解き給へ
との意にて
言へりに見
ゆ

みじからん物の上手じやうずか不用むようならん。そこらの上達部かんだらめより始めて、ありとある人知らずとい
ふに、又いきて、かくなんといへば、「大なる蟻たほきを二つ捕へて、腰に細き糸をつけ、又そ
れに今少しふときをつけて、あなたの口に蜜を塗りて見よ」といひければ、さ申して、蟻
を入れたりけるに、蜜の香かを嗅かぎて、實まことにいと疾さう穴のあなた口ぐちに出でにけり。さてそ
の糸の貫かれたるを遣したりける後になん、なほ日本ひのもちはかしこかりけりとて、後々はさ
る事もせざりけり。この中將をいみじき人に思たはしめして、「何事をし、いかなる位くらゐをか賜
はるべき」と仰せられければ、「更に官位つかさくらゐをも賜はらじ、唯老いたる父母ちちははの隠れうせて侍
るを尋ねて、都にすますることを許させ給へ」と申しければ、「いみじうやすき事」とて
許されにければ、よろづの人の親これを聞きて、よろこぶ事いみじかりけり。中將は大臣たみ
までになさせ給ひてなんありける。さてその人の神になりたるにやあらん、この明神の
許もとへ詣まうでたりける人に、夜現よるれてのたまひける、
七曲ななわだにまがれる玉の緒なごをぬきてありとほしとも知らずやあるらん

とのたまひけると、人のかたりし。

ふるものは

雪。霰あられ。霰はにくけれど、雪の眞白にてまじりたるをかし。雪は檜皮ひだかき葺いとめでたし。少し消えがたになりたるほど、又いと多うは降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黒う眞白に見えたる、いとをかし。時雨しぐれ。霰は板屋いたや。霜も板屋。庭。

日は

入日、入りはてぬる山際やまぎはに、ひかりの猶とまりて、赤う見ゆるに、うす黄ばみたる雲のたなびきたる、いとあはれなり。

月は

有明ありあけ。東の山の端はに、ほそうて出づるほどあはれなり。

星は

昂星あきほし。牽牛ひしほし。明星みやうじやう。長庚ちやうけい。流星りゅうせいをだになからましかば、まして。

まじりたる
一本、ま
じりてふる
に作る
庭一本に
は庭の字な
し

昂星一七曜
の星、和名
抄に、六星
火神也云々

黒き雲云々
一本、く
ろきもをか
し

朝にさる色
一 文選宋玉
賦に朝爲
行雲暮爲
行雨一など
あるを云ふ
にや

産飯一散飯
ならん、飲
食物の端を
食前神佛に
供ふるも
の、後取り
下げて家根

雲は

しろき。むらさき。黒き雲あはれなり。風吹くをりの天雲あまぐも。明け離るとほどの黒き雲の、やうやう白うなりゆくもいとをかし。朝あしたにさる色とかや、文ふみにも作りけり。月のいと明き面に、薄き雲いとあはれなり。

霧は

川霧かはぎり

さわがしきもの

はしり火。板屋のうへにて、烏からすの齋さいの産飯うぶくふ。十八日清水きよみづに籠りあひたる。くらうなりて、まだ火もともさぬほどに、外々ほかほかより人の來集りたる。まして遠き所、他國ひまのくになどより家の主ぬしののほりたる、いと騒がし。近き程に火出いでで來ぬといふ、されど燃えは附かざりける。物見はてて車くるまのかへり騒ぐほど。
ないがしろなるもの

に撒けるにや

宮のめ一巫
覘の類、か
んなぎ

おし一本
をし、をば
強勢辭、し
は爲の義と
いへり
してかけ一
作りて懸
け、一本し
でかけに作
る、垂れか
け也

女官どもの髪あけたるすがた。唐繪の革の帶のうしろ。聖僧の舉動。
ことばなめけなるもの

宮のめの祭文よむ人。舟こぐものども。雷鳴の陣の舍人。相撲。

さかしきもの

今やうの三年子。兒の祈。祓などする女ども。物の具こひ出でて、いのりの物どもつく
るに、紙あまたおし重ねて、いと鈍き刀してきるさま、ひとへだに断つべくも見えぬに、
さる物の具となりければ、おのが口をさへ引きゆがめておし、切目おほかるものど
もしてかけ、竹うち切りなどして、いとかうぐしうしたてて、うちふるひ、祈る事ど
もいとさかし。かつは「何の宮のその殿の若君、いみじうおはせしを、かいのごひたるや
うにやめ奉りしかば、祿多く賜はりし事、その人々召したりけれど、しるしもなかりけ
れば、今に女をなん召す。御徳を見ること」など語るもをかし。けすの家の女あるじ。し
れたるものそひしもをかし。まことに賢しき人を、をしへなどすべし。

上達部は

春宮大夫。左右の大將。權大納言。權中納言。宰相。中將。三位の中將。東宮權大夫。
侍從宰相。

公達は

頭辨。頭中將。權中將。四位少將。藏人辨。藏人少納言。春宮亮。藏人兵衛佐。
頭辨。頭中將。權中將。四位少將。藏人辨。藏人少納言。春宮亮。藏人兵衛佐。

律師。内供。

女は

典侍。掌侍。
宮仕所は

内。后宮。その御腹の姫宮。一品の宮。齋院は罪深けれどをかし。ましてこのころはめ
でたし。春宮の御母女御。

頭の辨一辨
官にして藏
人頭を兼ね
る者
内供一内供
奉に同じ、
禁中奉仕の
僧
罪深けれど
一齋院は神
を祀る役に

て佛事を忌めば也

御琴もたりし賀茂臨時祭に所の雑色、或は所の衆など御琴を昇く也

おどろおどろしきとごとしき、色の麗はしきないふ

身をかへたらん人などはかくやあらんと見ゆるもの

たどの女房にて侍ふ人の、御乳母になりたる。唐衣も著ず、裳をだに用意なく、白衣にて御前に添ひ臥して、御帳のうちを居所にして、女房どもを呼びつかひ、局に物いひやり、文とりつがせなどしてあるさまよ。言ひ盡すべくだにあらず。雑色の藏人になりたるめでたし。去年の霜月の臨時の祭に御琴もたりし人とも見えす。君達に連れてありくは、いづくなりし人ぞとこそおほゆれ。外よりなりたるなどは、おなじ事なれどさしもおほえず。

雪たかう降りて、今もなほふるに、五位も四位も、色うるはしう若やかなるが、袍の色いと清らにて、革の帯のかたつきたるを、宿直すがたにひきはこえて、紫の指貫も、雪に映えて、濃さ勝りたるを著て、柏の紅ならずば、おどろくしき山吹を出して、傘をさしたるに、風のいたく吹きて、横さまに雪を吹きかれば、少し傾きて歩みくる、深沓半靴などのきはまで、雪のいと白くかよりたるこそをかしけれ。

櫻を云々一冠の後に垂れたる櫻を前に引越して顔をふさぐなり

凶會日一曆に記しあれど世人さまで忌み憚らぬ日なりしならん、拾芥抄に、凶會日正月庚寅、辛卯、甲寅云々

廊の遣戸いと疾う押しあけたれば、御湯殿の馬道よりおりてくる殿上人の、萎えたる直衣指貫の、いたくほころびたれば、いろくの衣どもの、こほれ出でたるを、押し入れなどして、北の陣のかたさまに歩み行くに、あきたる遣戸の前を過ぐとて、櫻をひきこして、顔にふたぎて過ぎぬるもをかし。

たどすぎにすぐるもの

帆あけたる舟。人のよはひ。春夏秋冬。

ことに人にしられぬもの

人の女親の老いたる。凶會日。

五六月の夕かた、青き草を細う麗しくきりて、赤衣著たる子兒の、ちひさき笠を著て、左右にいと多くもちてゆくこそ、すどろにをかしけれ。

賀茂へ詣づる道に、女どもの、新しき折敷のやうなるものを笠にきて、いと多くたてりて、歌をうたひ、起き伏すやうに見えて、唯何すともなく、うしろさまに行くは、いか

いかなりし
人か一春註
には之も俗
歌といへど
抄により清
少の評言と
見るべから
む、なかだ
か云々は歌
詞
鶯は一重出
錯簡にや
早苗とりし
か一古今
集、昨日こ
そ早苗とり
しかいつの
間に稻葉そ
よぎて秋風
の吹く

なるにかあらん、をかしと見る程に、郭公ほろよすをいとなめくうたふ聲ぞ心憂き。「ほとよぎすよ、おれよ、かやつよ、おれなきてぞ、われは田にたつ」とうたふに、聞きも果てずいかなりし人か、いたくなきてぞといひけん。「なかだかわらはおひ、いかでおどす人」と。鶯ほろよすに郭公は劣れるといふ人こそ、いとつらう憎くけれ。鶯は夜よるなかぬいとわろし。すべて夜なくものはめでたし。兒こどもぞはめでたからぬ。
八月晦日はつまつこもりがたに、太秦うづまさにまうづとて見れば、穂に出でたる田に、人多くてさわぐ。稻刈るなりけり。早苗さなへとりしか、いつの間にとはまこと。實ひにさいつごろ賀茂に詣つとて見しが、哀にもなりにけるかな。これは女もまじらず、男の片手に、いと赤き稻の、もとは青きを刈りもちて、刀かたなか何にあらん、もとを切るさまのやすけに、めでたき事にいとせまほしく見ゆるや。いかでさすらん、穂をうへにて竝なみ居る、いとをかしう見ゆ。庵いほりのさまことなり。
いみじくきたなきもの

がうし一和
名抄三器四
部に合子と
あり、それ
にや、今の
朱塗椀の類

蛸たぬこ せせ板敷の箒はき 殿上のがうし。
せめておそろしきもの
夜鳴る神。近き隣なすびに盗人の入りたる。わが住む所に入りたるは、唯物もおほえねば、何とも知らず。

たのめたる
一たのまし
めたる
まがくし
き一呪呪な
どする程に
いふなり

たのもしきもの
心地あしきころ、僧あまたして修法ほふしたる、思ふ人の心地あしきころ、眞まことにたのもしき人の言ひ慰めたのめたる。物おそろしき折の親どものかたはら。
いみじうしたてて壻取りたるに、いとほどなくすまぬ壻の、さるべき所などにて舅しゅうに逢ひたる、いとほしとや思ふらん。ある人の、いみじう時に逢ひたる人の壻になりて、一月もはかなくしうも來こで止やみにしかば、すべていみじう言ひ騒さわぎ、乳母めのなどやうの者は、まがくしき事どもいふもあるに、そのかへる年の正月ひつきに藏人くらんになりぬ。「あさましうかよるなからひに、いかでとこそ人は思ひためれ」など言ひあつかふは聞くらんか

とみのを—
鴟尾(トビ
ノヲ)、轅の
如くにて牛
車の後に出
でしもの

かなし—可
憐、可愛な
どの義

し。

六月に、人の八講し給ひし所に、人々集りて聞くに、この藏人になれる塔の、綾のうへの袴、蘇芳襲、黒半臂などいみじう鮮かにて、忘れにし人の車のとみのをに、半臂の緒ひきかけつばかりにて居たりしを、いかに見るらんと、車の人々も、知りたる限はいとほしがりをしを、他人どもも、「つれなく居たりしものかな」など後にもいひき。なほ男は物のいとほしさ、人の思はんことは知らぬなめり。

世の中に猶いと心憂きものは、人ににくまれんことこそあるべけれ。誰てふ物ぐるひか、われ人にさおもはれんとは思はん。されど自然に、宮づかへ所にも、親はらからの中にも、思はるゝおもはれぬがあるぞ、いとわびしきや。よき人の御事は更なり、けすなどのほども、親などのかなしうする子は、目だち見たてられて、いたはしうこそおほゆれ。見るかひあるはことわり、いかど思はざらんと覺ゆ。ことなることなきは、又これをかなしと思ふらんは、親なればぞかすとあはれなり。親にも君にも、すべてうち

いかで—契
らんと望願
するなり

おほやけは
らだち—我
が關せぬ事
ながら傍よ
り見聞きて
腹立つをい
ふ、宣長の

かたらふ人にも人に思はれんばかりめでたき事はあらじ。

男こそ猶いとありがたく、怪しき心地したるものはあれ。いと清けなる人をすてて、にくけなる人をもたるもあやしかし。おほやけ所に入りたちする男、家の子などは、あるが中に、よからんをこそは選りて思ひ給はめ。及ぶまじからん際をだに、めでたしと思はんを、死ぬばかりも思ひかくれかし。人のむすめ、まだ見ぬ人などを、よしと聞くをこそは、いかでとも思ふなれ。かつ女の目にも、わろしと思ふをおもふは、いかなる事にかあらん。かたちいとよく、心もをかしき人の、手もよう書き、歌をもあはれに詠みておこせなどするを、返事はさかしらにうちするものから、寄りつかず、らうたけにうち泣きて居たるを、見捨てて往きなどするは、あさましうおほやけはらだちて、眷屬の心地も心憂く見ゆべけれど、身のうへにては、つゆ心ぐるしきを思ひ知らぬよ。よろづの事よりも、情ある事は、男はさらなり、女もこそめでたく覺ゆれ。なけの詞なれど、せちに心にふかく入らねど、いとほしき事をいとほしとも、あはれなるをば實にいかに

説には法界
香氣の語に
よくあたる
といへり

かど一瑕疵
缺點

いとほし云
々一缺點を
擧げんはい
たはしと我
心に思ひ解
き我慢して
いはぬと也

思ふらんなどいひけるを傳へて聞きたるは、さし向ひていふよりもうれし。いかでこの人に、思ひ知りけりとも見えにしがなと、常にこそおほゆれ。必思ふべき人、訪ふべき人は、さるべきことなれば、取りわかれしもせず。さもあるまじき人のさし答をも、心易くしたるは嬉しきわざなり。いと易き事なれど、更にえあらぬ事ぞかし。大かた心よき人の、實にかどなからぬは、男も女もありがたきことなめり。又さる人も多かるべし。

人のうへいふを、腹立つ人こそ、いとわりなけれ。いかでかはあらん、我身をさし置きて、さばかりもどかしく、いはまほしきものやはある。されどけしからぬやうにもあり。又おのづから聞きつけて恨もぞする、あいなし。また思ひ放つまじきあたりは、いとほしなど思ひ解けば、念じていはぬをや。さだになくば、うち出で笑ひもしつべし。人の顔に、とりわきてよしと見ゆる所は、度ごとに見れども、あなをかき、珍しとこそ覺ゆれ。繪など數多たび見れば、目もたよすかし。近う立てる屏風の繪などは、いとめ

みにくきも
一みにくき
顔も

やり捨て
破り捨て

合せ一夢合
はせ

われに云々
一我目を見
合はせ給ひ
て云々

のたまふも
のう折一
説のたまふ

でたけれども見もやられず。人の貌はをかしうこそあれ。にくけなる調度の中にも、一つよき所のまもらるよよ。みにくきもさこそはあらめと思ふこそわびしけれ。

うれしきもの

まだ見ぬ物語の多かる。又一つを見て、いみじうゆかしう覺ゆる物語の、二つ見つけたる。心おとりするやうもありかし。人のやり捨てたる文を見るに、同じつとき數多見つけたる。いかならんと夢を見て、恐しと胸つぶるよに、ことにもあらず合せなどしたる、いとうれし。よき人の御前に、人々數多侍ふ折に、昔ありける事にもあれ、今聞しめし、世にいひける事にもあれ、かたらせ給ふを、われに御覽じ合せてのたまはせ、いひきかせ給へる、いとうれし。遠き所は更なり、おなじ都の内ながら、身にやんごとなく思ふ人の悩むを聞きて、いかにくと覺束なく歎くに、おこたりたる消息得たるもうれし。思ふ人の、人にも譽められ、やんごとなき人などの、口をしからぬものに思しのためふものよ折、もしは人と言ひかはしたる歌の聞えてほめられ、うちきよなどに譽め

にて句、其
下にうれし
と補ふ
物の中一何
か書物の中

ばかりいた
ばかりだま
す
たう一春註
黨、だまさ
るゝ人の加
擔、一説た
ふの誤、答
にて其だま
したる返報
の義

らるよ、みづからのうへには、まだ知らぬ事なれど、猶思ひやらるよよ。いたううち解
けたらぬ人のいひたる古き事の知らぬを、聞き出でたるもうれし。後に物の中などにて、
見つけたるはをかしう、唯これにこそありけれと、かのいひたりし人ぞをかしき。檀紙、
白き色紙、たどのも、白う清きは得たるもうれし。恥しき人の、歌の本末問ひたるに、ふ
とおほえたる、われながらうれし。常にはおほゆる事も、又人の問ふには、清く忘れて
止みぬる折ぞ多かる。頓に物もとむるに、見出でたる。只今見るべき文などを、もとの
失ひて、萬の物をかへすぐ見たるに、捜し出でたる、いとうれし。物あはせ、何くれ
と挑むことに勝ちたる、いかでか嬉しからざらん。又いみじうわれはと思ひて、したり
がほなる人はかり得たる。女どちよりも、男はまさりてうれし。これがたうは必せんず
らんと、常に心づかひせらるよをかしきに、いとつれなく、何とも思ひたらぬやうに
て、たゆめ過すもをかし。にくき者のあしきめ見るも、罪は得らんと思ひながらうれし。
指櫛むすばせて、をかしけなるも又うれし。思ふ人は、我身よりも勝りてうれし。御

むつかしう
心煩はし
く、じれつ
たき義

姥捨山の月
一古今集、
我心なぐさ
めかれつ更
科や姥捨山
に入る月を
見て

前に人々所もなく居たるに、今のほりたれば、少し遠き柱のもとなどに居たるを、御覽
じつけて、「こち來」と仰せられたれば、道あけて、近く召し入れたるこそ嬉しけれ。御
前に人々あまた、物仰せらるゝ序などにも、「世の中のはらだたしう、むつかしう、片時
あるべき心地もせて、いづちもく行きうせなばやと思ふに、たどの紙のいと白う清ら
なる、よき筆、白き色紙、檀紙など得つれば、かくても暫時ありぬべかりけりとなん
覺え侍る。また高麗縁の疊の筵、青うこまかに、縁の紋あざやかに、黒う白う見えたる、
引き廣げて見れば、何か猶さらに、この世はえおもひはなつまじと、命さへ惜しくなん
なる」と申せば、「いみじくはかなき事も慰むなるかな。姥捨山の月は、いかなる人の見
るにか」と笑はせ給ふ。さぶらふ人も、「いみじくやすき息災のいのりかな」といふ。さ
て後にほど經て、すぐろなる事を思ひて、里にあるころ、めでたき紙を二十つよみに裏
みて賜はせたり。仰事には、「疾く參れ」などのたまはせて、「これは聞しめし置きたる事
ありしかばなん。わろかめれば、壽命經もえ書くまじけにこそ」と仰せられたる、い

とをかし。無下に思ひ忘れたりつることを、思しおかせ給へりけるは、猶たど人にてだにをかし、ましておろかならぬ事にぞあるや。心も亂れて、啓すべきかたもなければ、ただ、

かけまくもかしこきかみのしるしには鶴のよはひになりぬべきかな

御座といふ
疊—春註に
貴人のしか
るゝ疊とい
ふ心也、疊
は巻き疊む
といふ義よ
り出でし語
にて元は今
の所謂ござ
の類に云へ
る也

あまりにやと啓せさせ給へとてまゐらせつ。臺盤所の雑仕ぞ、御使には來たる。青き單衣などぞ取らせて。まことにこの紙を、草紙に作りてもてさわぐに、むつかしき事も紛るゝ心地して、をかしう心のうちもおほゆ。二月ばかりありて、赤衣著たる男の、疊を^も持て來て「これ」といふ。「あれは誰ぞ、あらはなり」など物はしたなういへば、さし置き^て往ぬ。「いづこよりぞ」と問はすれば、「まかりにけり」とて取り入れたれば、殊更に御座といふ疊のさまにて、高麗などいと清らなり。心の中にはさにやあらんと思へど、猶おほつかなきに、人ども出しもとめさすれど、うせにけり、怪しがり笑へど、使のなければいふかひなし。所たがへなどならば、おのづからも又いひに來なん。宮のほとりに案内

すゝろにさ
るわざば—
やたらに斯
様な物ずき
な事をば

しに參らせまほしけれど、なほ誰すゝろにさるわざはせん、仰事なめりといみじうをか^し。二日ばかり音もせねば、うたがひもなく、左京の君の許に、「かゝる事なんある。さ^る事やけしき見給ひし。忍びて有様のたまひて、さる事見えすば、かく申したりとも、な^漏し給ひそ」と言ひ遣りたるに、「いみじうかくさせ給ひし事なり。ゆめくまろが聞え^{たる}となく、後にも」とあれば、さればよと、思ひしもしるく、をかしくて、文かきて、又^密に御前の高欄におかせしものは、惑ひしほどに、やがてかきおとして、御階のもとに^おちにけり。

積善寺—原
本釋泉寺に
作る、寺は
道隆が法興
院内に別に
造營せる
堂、法興院
は二條北に
あり元は道
兼の邸也

關白殿、二月十日のほどに、法興院の積善寺といふ御堂にて、一切經供養させ給ふ。女院、宮の御前もおはしますべければ、二月朔日のほどに、二條の宮へ入らせ給ふ。夜更けてねぶたくなりしかば、何事も見入れず。翌朝、日のうらよかにさし出でたる程に起きたれば、いと白うあたらしうをかしけに作りたるに、御簾より始めて、昨日かけたるなめり。御しつらひ、獅子、狛犬など、いつのほどにや入り居けんぞをかしき。

御階のもと
に一本、
御階の東に
作る

うるさかり
巧みに麗
しき義

直衣一本
御直衣に作
る

立紋一説
綾紋、(リウ
モン)地紋
ありて織目
高くなれる
綾

櫻の一丈ばかりにて、いみじう咲きたるやうにて、御階のもとにあれば、いと疾う咲きたるかな、梅こそ只今盛なめれと見ゆるは、作りたるなめり。すべて花のほひなど、咲きたるに劣らず、いかにうるさかりけん。雨降らば、萎みなんかしと見るぞ口惜しき。小家などいふ物の多かりける所を、今作らせ給へれば、木立などの見所あるは、いまだなし。たゞ宮のさまぞ、けぢかくをかしけなる。殿渡らせ給へり。青鈍の堅紋の御指貫、櫻の直衣に、紅の御衣三つばかり、唯直衣にかさねてぞ奉りたる。御前より初めて、紅梅の濃きうすき織物、堅紋、立紋など、あるかぎり著たれば、唯ひかり満ちて、唐衣は萌黄、柳、紅梅などもあり。御前に居させ給ひて、物など聞えさせ給ふ。御答のあらまほしさを、里人に僅にのぞかせばやと見奉る。女房どもを御覽じ渡して、「宮に何事を思しめすらん。こよらめでたき人々を並べするて御覽するこそ、いと羨しけれ。一人わろき人なしや、これ家々の女ぞかし。あはれなり。よくかへりみてこそさぶらはせ給はめ。さてもこの宮の御心をば、いかに知り奉りて集り参り給へるぞ。いかにいやしく物惜

しりうごと
後言、隆
口

辱く一畏お
ほく

すみのまよ
り一本み
すのうちよ
りに作る

しみせさせ給ふ宮とて、われは生れさせ給ひしよりいみじう仕うまつれど、まだおろしの御衣一つ給はぬぞ。何かしりうごとには聞えん」などの給ふがをかしきに、みな人々笑ひぬ。「まことぞ、をこなりとてかく笑ひいまするが恥し」などの給はする程に、内裏より御使にて、式部丞某まるれり。御文は、大納言殿取り給ひて、殿に奉らせ給へば、ひき解きて、「いとゆかしき文かな。ゆるされ侍らば、あけて見侍らん」との給はすれば、怪しうとおほいた。めり。「辱くもあり」とて奉らせ給へば、取らせ給ひても、ひろけさせ給ふやうにもあらず、もてなさせ給ふ、御用意などぞありがたき。すみのまより、女房茵さし出でて、三四人御几帳のもとに居たり。「あなたにまかりて、祿の事ものし侍らん」とてたよせ給ひぬる後に、御文御覽す。御返しは紅梅の紙に書かせ給ふが、御衣のおなじ色にほひたる、猶斯うしも推し量り参らする人はなくやあらんとぞ口をしき。今日は殊更にとて、殿の御かたより祿は出させ給ふ。女の装束に、紅梅の細長そへたり。肴などあれば、酔はさまほしけれど、「今日はいみじき事の行幸に、あが君許させ給へ」と大

うへなど云
云—大人び
給ひて、う
へなど申上
げんにふさ
はしと也、
うへは奥方
の義

むとく—無
得、甲斐な
く見所なし

納言殿にも申して立ちぬ。君達などいみじう假粧し給ひて、紅梅の御衣も劣らじと著給へるに、三の御前は御匣殿なり。中の姫君よりも大に見え給ひて、うへなど聞えんにぞよかめる。うへも渡らせ給へり。御几帳ひき寄せて、新しく参りたる人々には見え給はねば、いぶせき心地す。さし集ひて、かの日の装束、扇などの事をいひ合するもあり。又挑みかはして、「まろは何か、唯あらんにまかせてを」などいひて、「例の君」などにくまる。夜さりまかづる人も多かり。かよる事にまかづれば、え止めさせ給はず。うへ日々に渡り、夜もおはします。君達などおはすれば、御前人少く候はねばいとよし。内裏の御使日々に参る。御前の櫻、色はまさらで、日などにあたりて、萎みわるうなるだにわびしきに、雨の夜降りたる翌朝、いみじうむとくなり。いと疾く起きて、「泣きて別れん顔に、心おとりこそすれ」といふを聞かせ給ひて、「けに雨のけはひしつるぞかし、いかならん」と驚かせ給ふに、殿の御方より侍の者ども、下種など来て、數多花のもとに唯よりによりて、引き倒し取りて、「密に往きて、まだ暗からんに取れとこそ仰せられつ

いは云々
—後撰、山
守はいはど
いはなん高
砂の尾上の
櫻折りてか
ざさん

うしろめた
さに—氣に
掛る爲め
に、不安心
にて

れ、明け過ぎにけり、不便なるわざかな、疾くく」と倒し取るに、いとをかしくて、いはどいはなんと、兼澄が事を思ひたるにやとも、よき人ならばいはまほしけれど、「かの花盗む人は誰ぞ、あしかめり」といへば、笑ひて、いとど逃けて引きもていぬ。なほ殿の御心はをかしようおはすかし。莖どもにぬれまろがれつきて、いかに見るかひなからましと見て入りぬ。掃殿寮まわりて御格子まわり、主殿の女官御きよめまわりはてて、起きさせ給へるに、花のなければ、「あなあさまし。かの花はいづちいにける」と仰せらる。「あかつき盗人ありといふなりつるは、なほ枝などを少し折るにやとこそ聞きつれがしつるぞ。見つや」と仰せらる。「さも侍らず。いまだ暗くて、よくも見侍らざりつるを、しろみたるものの侍れば、花を折るにやと、うしろめたさに申し侍りつる」と申す。「さりとともかくはいかでか取らん。殿の隠させ給へるなめり」とて笑はせ給へば、「いで、よも侍らじ。春風の爲て侍りなん」と啓するを、「かくいはんとて隠すなりけり。ぬすみにはあらで、ふりにこそふるなりつれ」と仰せらるよも、珍しき事ならねど、いみじうめ

我よりさきに—新拾遺、鶯のなぐ音を聞けば山深み我より先に春は知りけり今は山田も—貫之集、山田さへ今は作るを散る花のかことは風におほせざらん

でたき。殿おはしませば、寐くたれの朝顔も、時ならずや御覽せんと引き入らる。おはしますまよに、「かの花うせにけるは、いかにかくは盗ませしぞ、いぎたなかりける女房たちかな。知らざりけるよ」と驚かせ給へば、「されど我よりさきにとこそ思ひて侍るめりつれ」と忍びやかにいふを、いと疾く聞きつけさせ給ひて、「さ思ひつる事ぞ、世に他人いでて見つけじ、宰相とそこの程ならんと推し量りつ」とて、いみじう笑はせ給ふ。「さりけなるものを、少納言は春風におほせける」と宮の御前にうちゑませ給へる、めでたし。「虚言をおほせ侍るなり。今は山田も作るらん」とうち誦せさせ給へるも、いとなまめきをかし。「さてもねたく見つけられにけるかな。さばかり誠めつるものを、人の所に、かよるしれもののあるこそ」との給はず。「春風はそらにいとをかしうも言ふかな」と誦せさせ給ふ。「たゞことには、うるさく思ひよりて侍りつかし。今朝のさまいかに侍らまし」とて笑はせ給ふ。小若君「されどそれはいと疾く見て、雨にぬれたりなど、おもてぶせなりといひ侍りつ」と申し給へばいみじうねたからせ給ふもをかし。さ

にの義

花のこころ云々—白氏文集、二月東來草折花必開云々又その前に、思君秋夜長、一夜魂升云々

かうか—これだけか
得選—采女の中より選出せられし厨子所の女房

て八日九日の程にまかづるを、「今少し近うなして」など仰せらるれど、出でぬ。いみじう常よりものどかに照りたる晝つかた、「花のこころ開けたりや、いかどいふ」との給はせられたれば、「秋はまだしく侍れど、よにこの度なんのほる心地し侍る」など聞えさせつ。出させ給ひし夜、車の次第もなく、まづくとのり騒ぐがにくければ、さるべき人三人と、「猶この車に乗るさまのいとさわがしく、祭のかへさなどのやうに、倒れぬべく惑ふいと見ぐるし。たゞさはれ、乗るべき車なくてえ参らずば、おのづから聞しめしつけて賜はせてん」など笑ひ合ひて立てる前より、押し凝りて、惑ひ乗り果てて出でて、「かうか」といふに、「まだこゝに」と答ふれば、宮司寄り来て、「誰々かおはする」と問ひ聞きて、「いと怪しかりけることかな。今は皆乗りぬらんとこそ思ひつれ。こはなどてかくは後れさせ給へる。今は得選を乗せんとしつるに。めづらかなるや」など驚きて寄せさすれば、「さばまづ、その御志ありつらん人を乗せ給ひて、次にも」といふ聲聞きつけて「けしからず腹きたなくおはしけり」などいへば、乗りぬ。その次には、誠にみづしが車

左京—原本
右京に作る

さいはて—
最終
ほと—
殆ど
笑ふ—
旁註本笑ひ
笑ひに作る
右衛門—清
少と同車の
女房ならん

にあれば、火もいと暗きを、笑ひて、二條の宮に参りつきたり。御輿は疾く入らせ給ひて、皆しつらひ居させ給ひけり。「こゝに呼べ」と仰せられければ、左京、小左近などいふ若き人々、参る人ごとに見れど、なかりけり。おるゝに随ひ、四人づつ御前に参り集ひて侍ふに、「いかなるぞ」と仰せられけるも知らず、ある限おりはててぞ、辛うじて見つけられて、「かばかり仰せらるゝには、などかくおそく」とて率ゐて参るに、見れば、いつの間、かうは年ごろの住居のさまに、おはしましつきたるにかとをかし。「いかなれば、かう何かと尋ねばかりは見えざりつるぞ」と仰せらるゝに、とかくも申さねば、諸共に乗りたる人、「いとわりなし。さいはての車に侍らん人は、いかでか疾くは参り侍らん。これもほとゝえ乗るまじく侍りつるを、みづしがいとほしがりて、ゆづり侍りつるなり。暗う侍りつる事こそ、わびしう侍りつれ」と笑ふく啓するに、「行事するものいとあやしきなり。又などは心知らざらん者こそつゝまめ、右衛門などはいへかしなど仰せらる。「されどいかでか走りさきだち侍らん」などいふも、かたへの人、く

おり侍る云
云—私共の
降りてある
が待遠しく
苦しければ
他の人々先
に乗車せし
ならん、清
少申譯之言
也
給ふべかな
る—原本給
へるなりに
作る

しと聞くらんと聞ゆ。「さまあしうて、かく乗りたらんもかしこかるべき事かは。定めたらんさまの、やんごとなからんこそよからめ」とものしげに思し召したり。「おり侍るほどの待遠に、苦しきによりてにや」とぞ申しなほす。御經のことに、明日渡らせおはしまさんとて、今宵参りたり。南院の北面にさしのぞきたれば、たかつきどもに火をともして、二人三人四人、さるべきどち、屏風引き隔てつるもあり、几帳中にへだてたるもあり。又さらでも集り居て、衣ども閉ぢ重ね、裳の腰さし、假粧するさまは、更にもいはず、髪などいふものは、明日より後はありがたけにぞ見ゆる。「寅の時になん渡らせ給ふべかなる。などか今まで参り給はざりつる。扇もたせて、尋ね聞ゆる人ありつ」など告ぐ。「さて、實に寅の時か」とさうぞき立ちてあるに、明け過ぎ、日もさし出でぬ。西の對の唐廂になん、さし寄せて乗るべきとて、あるかぎり渡殿へ行く程に、まだうひくしきほどなる今参どもは、いとつゝましけなるに、西の對に殿すませ給へば、宮にもそこにおはしまして、まづ女房車に乗せさせ給ふを御覽

書立順序
書

さ見る一人
も亦左様に
物見車とは
見るならん

すとて、御簾の中に、宮、淑景舎、三四の君、殿のうへ、その御弟三所、立ち並みておはします。車の左右に、大納言、三位中將二所して、簾うちあけ、下簾ひきあけて乗せ給ふ。皆うち群れてだにあらば、隠れ所やあらん。四人づつ書立に随ひて、それくと呼び立てて、乗せられ奉り、歩み行く心地、いみじう實にあさましう、顯證なりとも世の常なり。御簾のうちに、そこらの御目どもの中に、宮の御前の見ぐるしと御覽せんは、更にわびしき事かぎりなし。身より汗のあゆれば、繕ひ立てたる髪などもあがりやすらんと覺ゆ。辛うじて過ぎたれば、車のもとに、いみじう恥しけに、清けなる御さまどもして、うち笑みて見給ふも現ならず。されど倒れず、そこまでは往き著きぬること、かしこき顔もなきかと覺ゆれど、皆乗りはてぬれば、引き出でて、二條の大路に榻立てて、物見車のやうにて立ち並べたる、いとをかし。人もさ見るらんかしと、心ときめきせらる。四位五位六位など、いみじう多う出で入り、車のもとに來て、つくろひ物いひなどす。まづ院の御むかへに、殿を始め奉りて、殿上と地下と皆参りぬ。それ渡らせ給ひて

尼の車一原
本尼車に作
る
袈裟衣一原
本けさぎぬ
に作る
かとり一鎌、
堅織（カマ
オリ）の約、
生絹なり
いと久し一
原本此一句
なし
いと心こと
なり一原本
此一句なし

後、宮は出させ給ふべしとあれば、いと心もとなしと思ふほどに、日さしあがりてぞおはします。御車ごめに十五、四つは尼の車、一の御車は唐の車なり。それに續きて尼の車、後口より水精の珠數、薄墨の袈裟衣などいみじくて、簾はあけず。下簾も薄色の裾少し濃き。次にたどの女房の十、櫻の唐衣、薄色の裳、紅をおしわたし、かたりの表著ども、いみじうなまめかし。日はいとうららかなれど、空は淺緑に霞み渡るに、女房の装束の匂ひあひて、いみじき織物のいろくの唐衣などよりも、なまめかしう、をかしき事限なし。關白殿、その御次の殿ばら、おはする限もてかしづき奉らせ給ふ、いみじうめでたし。これら見奉り騒ぐ、この車どもの二十立ち並べたるも、又をかしと見ゆらんかし。いつしか出でさせ給はどなど、待ち聞えさするに、いと久し。いかならんと心もとなしと思ふに、辛うじて、采女八人馬に乗せて引き出づめり。青末濃の裳、裙帶、領巾などの風に吹きやられたる、いとをかし。豊前といふ采女は、典藥頭重正が知る人なり。葡萄染の織物の指貫を著たれば、いと心ことなり。「重正は色許されにけり」こ山の

頭の毛など云々一めでたさに慄然として毛髪も立つと人の言ふも事實也

屏幔一和名抄に、小帳曰斗俗云斗帳一云屏幔形如覆斗也

井の大納言は笑ひ給ひて、皆乗り續きて立てるに、今ぞ御輿出でませ給ふ。めでたしと見え奉りつる御有様に、これは比ぶべからざりけり。朝日はなぐとさしあがる程に、木の葉のいと花やかに輝きて、御輿の帷子の色艶などさへぞいみじき。御綱はりて出でさせ給ふ。御輿の帷子のうちゆるぎたるほど、實に頭の毛など、人のいふは更に虚言ならず。さて後に髪あしからん人もかちつべし。あさましう、いつくしう、猶いかでかよる御前に馴れ仕うまつるらんと、わが身もかしこうぞ覺ゆる。御輿過ぎさせ給ふほど、車の榻ども、人給にかきおろしたりつる。また牛どもかけて、御輿の後につぎきたる心地の、めでたう興あるありさま、いふかたなし。おはしましつきたれば、大門のもとに高麗唐土の樂して、獅子狛犬をどり舞ひ、笙の音、鼓の聲に物もおほえず。こはいづくの佛の御國などに來にけるにかあらんと、空に響きのほるやうにおほゆ。内に入りぬれば、いろくの錦のあけばりに、御簾いと青くてかけ渡し、屏幔など引きたるほど、なべてたどにこの世とおほえず。御棧敷にさし寄せたれば、又この殿ばら立ち給ひて、「疾くお

乗りつる所だに云々一さきに乗車したる所すら恥しくありたるにまして此所はあかるくあらはなる所なるに云々むれたかなどに云々一以下中宮の御詞を大納言の取次ぎて清少に言ふ也、思ひぐまなきは思ふ甲斐なしの義

りよ」との給ふ。乗りつる所だにありつるを、今少しあかう顯證なるに、大納言殿、いとものくしく清けにて、御下襲のしりいと長く所せけにて、簾うちあけて、「はや」とのたまふ。つくろひそへたる髪も、唐衣の中にてふくだみ、あやしうなりたらん。色の黒さ赤さへ見わかれぬべき程なるが、いとわびしければ、ふとも得降りず。「まづ後なるこそは」などいふほど、それも同じこころにや、「退かせ給へ、かたじけなし」などいふ。「恥ぢ給ふかな」と笑ひて、立ちかへり、辛うじておりぬれば、寄りおはして、「むねたかなどに見せて、隠しておろせと、宮の仰せらるれば來たるに、思ひぐまなき」とて、引きおろして率て参り給ふ。さ聞えさせ給ひつらんと思ふもかたじけなし。参りたれば、初おりける人どもの、物の見えぬべき端に、八人ばかり出で居にけり。一尺と二尺ばかりの高さの長押のうへにおはします。こゝに立ち隠して、「率て参りたり」と申し給へば、「いづら」とて几帳のこなたに出でさせ給へり。まだ唐の御衣裳奉りながらおはしますぞいみじき。紅の御衣よろしからんや、中に唐綾の柳の御衣、葡萄染の五重の御衣に、赤

地摺―白き
地にはなだ
色の小紋等
を摺りし物
なども―な
ど申上ぐる
も

釵子―婦人
儀式の時前
髪に挿す具

色の唐の御衣、地摺の唐の羅に、象眼重ねたる御裳など奉りたり。織物の色、更になべ
て似るべきやうなし。「我をばいかど見る」と仰せらる。「いみじうなん候ひつる」なども
言に出でてはよのつねにのみこそ。「久しうやありつる。それは殿の大夫の、院の御供に
きて、人に見えぬる。おなじ下襲ながら、宮の御供にあらん、わろしと人思ひなんとて、
殊に下襲ぬはせ給ひけるほどに、遅きなりけり。いとすき給へり」などとうち笑はせ給
へる。いとあきらかに晴れたる所は、今少しけざやかにめでたう、御額あけさせ給へる
釵子に、御分目の御髪の聊よりて、著く見えさせ給ふなどさへぞ、聞えんかたなき。三尺
の御几帳一雙をさしちがへて、こなたの隔にはして、その後には、疊一枚を、長さまに
縁をして、長押の上に敷きて、中納言の君といふは、殿の御伯父の兵衛督忠君と聞えけ
るが御女、宰相の君とは、富小路の左大臣の御孫、それ二人ぞうへに居て見え給ふ。御
覽じわたして、「宰相はあなたに居て、うへ人どもの居たる所、往きて見よ」と仰せらる
るに、心得て、「こよに三人いとよく見侍りぬべし」と申せば、「さば」とて召し上げさせ

うまさへ―
馬副童、一
本うまさへ
に作る

ふきがたり
―濱臣の説
に、吹き語
り即ち吹聴
の義

いかゞは―
此語の下に
辭し申すべ
きと補ふ

繪に云々―
關白道隆の
詞
いらい―以
來、原本い

給へば、しもに居たる人々、「殿上許さるゝ内舎人なめりと笑はせんと思へるか」とい
へば、「うまさへのほどぞ」などいへば、そこに入り居て見るは、いとおもだたし。かよる
事などをみづからいふは、ふきがたりにもあり、また君の御ためにも軽々しう、かばか
りの人をさへ思しけんなど、おのづから物しり、世の中もどきなどする人は、あいなく
畏き御事にかよりて、かたじけなけれど、あな辱き事などは、又いかどは、誠に身の
程過ぎたる事もありぬべし。院の御棧敷、所々の棧敷ども見渡したる、めでたし。殿は
まづ院の御棧敷に参り給ひて、暫時ありてこよに参り給へり。大納言二所、三位中將は
陣近う参りけるまよにて、調度を負ひて、いとつきくしうをかしうておはす。殿上人
四位五位、こちたうち連れて、御供に侍ひ並み居たり。入らせ給ひて見奉らせ給ふに、
女房あるかぎり、裳、唐衣、御匣殿まで著給へり。殿のうへは、裳のへに小袿をぞ著給
へる。「繪に書きたるやうなる御さまもかな。今いらい今日はと申し給ひそ。三四の君
の御裳ぬがせ給へ。この中の主君には、御前こそおはしませ。御棧敷の前に陣をすゑさ

らへに作る
非也
調め—調べ
に同じ、調
べ製するを
云ふ
僧都の君—
隆圓
僧綱—僧
正、僧都、律
師をいふ
導師まゐり

せ給へるは、おほろけのことか」とてうち泣かせ給ふ。實にと、見る人も涙ぐまじきに、赤色櫻の五重の唐衣を着たるを御覽じて、「法服ひとくだり足らざりつるを、俄にまとひしつるに、これをこそかり申すべかりけれ。さらばもし又、さやうの物を切り調めたるに」との給はするに、又笑ひぬ。大納言殿少し退き居給へるが、聞き給ひて、「清僧都のにやあらん」との給ふ。一言としてをかしからぬ事ぞなきや。僧都の君、赤色の羅の御衣、紫の袈裟、いと薄き色の御衣ども、指貫著たまひて、菩薩の御様にて、女房にまじりありき給ふもいとをかし。「僧綱の中に、威儀具足してもおはしませで、見ぐるしう女房の中に」など笑ふ。父の大納言殿、御前より松君牽て奉る。葡萄染の織物の直衣、濃き綾のうちたる、紅梅の織物など著給へり。例の四位五位いと多かり。御棧敷に女房の中に入れ奉る。何事のあやまりにか、泣きのよしり給ふさへいとほえくし。事始りて、一切経を、蓮の花のあかきに、一花つつに入れて、僧俗、上達部、殿上人、地下六位、何くれまでもて渡る、いみじうたふとし。大行道導師まゐり、回向しばし待ちて舞などす

—讀經の音
頭取りをな
す
などす—
本なんとす
千賀の鹽竈
—續後撰、
陸奥の千賀
の鹽竈近な
がらからき
は人に逢は
ぬなりけり

る、日ぐらし見るに、目もたゆく苦しう。うちの御使に、五位の藏人まゐりたり。御棧敷の前に胡床立てて居たるなど、實にぞ猶めでたき。夜さりつかた、式部丞則理まゐりたり。「やがて夜さり入らせ給ふべし。御供に侍へと、宣旨侍りつ」とて歸りも参らず。宮は「なほ歸りて後に」との給はすれども、また藏人の辨まゐりて、殿にも御消息あれば、唯「仰のまよ」とて、入らせ給ひなす。院の御棧敷より、千賀の鹽竈などやうの御消息、をかき物など持て参り通ひたるなどもめでたし。事はてて院還らせ給ふ。院司上達部など、このたびはかたへぞ仕う奉り給ひける。宮は内裏へ入らせ給ひぬるも知らず、女房の従者どもは、「二條の宮にぞおはしませさん」とて、そこに皆往き居て、待てどく見えぬ程に、夜いたう更けぬ。内裏には宿直物持て來らんと待つに、きよく見えず。あざやかなる衣の、身にもつかぬを著て、寒きまよに、にくみ腹立てどかひなし。翌朝きたるを、「いかにかく心なきぞ」などいへば、となふる如も言はれたり。又の日雨降りたるを、殿は「これになん、わが宿世は見え侍りぬる。いかど御覽する」と聞えさせ給ふ。御

おちる一本おごりもに作る

心おちる理なり。

たふときもの

九條錫杖。念佛の回向。

歌は

杉たてる門。神樂歌もをかし。今様はながくてくせづきたる。風俗よくうたひたる。

指貫は

紫の濃き。萌黄。夏は二藍。いと暑き頃。夏蟲の色したるもすどしけなり

狩衣は

香染のうすき。白きふくさの赤色。松の葉いろしたる。青葉。さくら。やなぎ。又あをき。ふぢ。男は何色のきぬも。

ひとへは

白き。ひの装束の紅のひとへ。裨などかりそめに著たるはよし。されどなほ色きばみた

くせ一曲節
夏蟲の色
裏なき生絹
にて所謂蟬
の羽衣(桃
華葉)
白きふくさ
の一萬歳本
にはの字
無く、ふく
さにて句
松の葉いろ
したる一萬

歳本にはい
ろしたるの
五字なし

る單など著たるは、いと心づきなし。練色のきぬも著たれど、なほ單は白うてぞ、男も女もよろづの事まさりてこそ。

わろきものは

あて一上品
物語こそ一
一本こそを
さへに作る
なほす一春
註によれば
いと口惜し

詞の文字あやくつかひたるこそあれ。たゞ文字一つに、あやしくも、あてにも、いやしくもなるは、いかなるにかあらん。さるはかう思ふ人、萬の事に勝れてもえあらじかし。いづれを善き悪しきとは知るにかあらん。さりとも人を知らじ、唯さうち覺ゆるもいふめり。難義の事をいひて、「その事させんとす」といはんといふを、と文字をうしなひて、唯「いはんする」「里へ出でんする」などいへば、やがていとわろし。まして文を書きては、いふべきにもあらず。物語こそあしう書きなすれば、いひがひなく、作者さへいとほしけれ。「なほす」「定本のまよ」など書きつけたる。いと口惜し。「秘點つくるまに」などいふ人もありき。「もとむ」といふ事を「見ん」と皆いふめり。いと怪しき事を、男などは、わざとつくるはで、殊更にいふはあしからず。わが詞にもてつけていふが、心

に係る、然らば括弧を取去るべき也

祕點一説批點

おとりする事なり。

下襲は

冬は躑躅、搔練襲、蘇枋襲、夏は二藍、白襲

扇の骨は

青色はあかき、むらさきはみどり。

檜扇は

無紋。から繪

神は

この國の云云一男山入幡の祭神は應神天皇、神功皇后、玉依姬三柱なればなり

松尾。八幡、この國の帝にておはしましけんこそいとめでたけれ。行幸などに、なぎの花の御輿に奉るなど、いとめでたし。大原野。賀茂は更なり。稻荷。春日いとめでたく覺えさせ給ふ。佐保殿などいふ名さへをかき。平野はいたづらなる屋ありしを、「こよは何する所ぞ」と問ひしかば、「神輿宿」といひしもめでたし。嚴籬に葛などの多くかより

なぎの花の御輿一蕙花葦、鳳葦の次也

て、紅葉のいろくありし、秋にはあへすと、貫之が歌おもひ出でられて、つくぐと久しうたよれたりし。水分神いとをかき。

崎は

唐崎。いかど崎。三保が崎。

屋は

丸屋。四阿屋。

貫之が歌一千早振神の嚴籬に這ふ葛も秋にはあへず色づきにけり

時奏するいみじうをかき。いみじう寒きに、夜中ばかりなどに、「こほくとこほめき、杵すり来て、弦うちなどして、「何家の某、時丑三つ、子四つ」など、あてはかなる聲にいひて、時の杵さす音などいみじうをかき。子九つ、丑八つなどこそ、さとびたる人はいへ。すべて何もく、四つのみぞ杵はさしける。

四つのみぞ云々一日を二時間づつ十二支に配し其各を

日のうらくとある晝つかた、いたう夜ふけて、子の時など思ひ参らするほどに、男ども召したるこそ、いみじうをかきけれ。夜中ばかりに、また御笛の聞えたる、いみじう

一二三四の
 四剋に分つ
 都合四十八
 剋、而して
 子四つ丑四
 つの如く四
 つ時に限り
 て時の机を
 さすと也
 名を姓にて
 一紫式部な
 どの如く呼
 名を姓とせ
 るを云ふ
 おもと一原
 本おといに
 作る

めでたし。
 成信なりのみの中將は、入道兵部卿にふだうひやうぶきやうの宮の御子のみこにて、かたちいとをかしけに、心ばへもいとをかし
 うおはす。伊豫守いよのかみ兼輔かねすけがむすめの忘れられて、伊豫へ親のくだりしほど、いかに哀あはれなりけ
 んとこそ覺えしか。あかつきに往くとて、今宵こよひおはしまして、有明ありあけの月に歸り給ひけん直ただ
 衣しすがたなどこそ。そのかみ常に居て、ものがたりし、人のうへなど、わろきは「わろし」
 などの給ひしに。物忌ものいみなどくすしうするものの、名を姓なづにて持たる人のあるが、ことび
 との子になりて、平たいらなどいへど、唯もとの姓しやうを、若きひとく言種ことぐさにて笑ふ。ありさま
 も異なることなし。兵部ひやうぶとて、をかしき方かたなどもかたきが、さすがに人などにさしまじ
 り心などのあるは、御前ごまへわたりに「見苦し」など仰せらるれど、腹はらぎたなく知り告ぐる
 人もなし。一條の院いんつくられたる一間ひつまのところには、つらき人をば更に寄せず。東の御
 門かどにつと向ひて、をかしき小廂こひさしに、式部のおもと諸共に、夜も晝もあれば、うへも常に
 物御覽ものごらんじに出でさせ給ふ。「今宵こよひは皆内に寐ひん」とて南の廂ひさしに二人ふたり臥しぬる後に、いみじ

物いふ一兵
 部のいふな
 り
 とはなどて
 云々一以下
 清少の評論
 と見るべ
 し、春註に
 はよべも昨
 日の夜も云
 云より以下
 を兵部が詞
 のあやしき
 子細なこ
 わる也とい
 へり

う叩く人のあるに、「うるさし」などいひ合せて、寐たるやうにてあれば、猶いみじうかし
 かましう呼ぶを、「あれおこせ、虚寐そらねならん」と仰せられければ、この兵部ひやうぶ来て起せど、寐
 たるさまなれば、「更に起き給はざりけり」といひに往きたるが、やがて居つきて物いふ
 なり。しばしかとおもふに、夜いたう更けぬ。權中將ごんちゆうじやうにこそあなれ。「こは何事をかう
 はいふ」とてたゞ密みそかに笑ふも、いかでか知らん。あつつきまでいひ明して歸りぬ。「この
 君いとゆゑしかりけり。更におはせんに物いはじ。何事をさ言ひあかすぞ」など笑ふ
 に、遣戸やりどをあけて女は入りぬ。翌朝例つぎあしたの廂ひさしに物いふを聞けば、「雨のいみじう降る日きた
 る人なん、いとあはれなる。日ごろおほつかなうつらき事ありとも、さて濡れて來らば、憂うれ
 き事も皆忘れぬべし」とはなどていふにかあらんを。昨夜よるも昨日きのうの夜も、それがあなた
 の夜も、すべてこのごろは、うちしきり見ゆる人の、今宵こよひもいみじからん雨にさはらで來
 らんは、一夜ひとよも隔てじと思ふなめりと、あはれなるべし。さて日ごろも見えず、おほ
 つかなくて過すさん人の、かゝる折まがひにしも來んをば、更にまた志あるにはえせじとこそ思

もとよりの
よすが一以
前より夫婦
の契りを交
はしたる女

こそ覺ゆれ
一本、ぞ
覺ゆる

こまの物語
今傳ら
ず

へ。人の心々なればにやあらん、物見しり、思ひ知りたる女の、心ありと見ゆるなどをばか
たらひて、數多あまたいく所もあり、もとよりのよすがなどもあれば、繁しほうしも来ぬを、猶
さるいみじかりし折に來りし事など、人にも語りつがせ、身をほめられんと思ふ人のし
わざにや。それも無下むげに志なからんには、何しにかは、さも作事つくろひしても見えんとも思は
ん。されど雨の降る時は、唯むつかしう、今朝けさまではれなくしかりつる空とも覺えずに
くくて、いみじき廊ほそのめでたき所ともおほえず。ましていとさらぬ家などは、疾く降り
止みねかしたこそ覺ゆれ。月のあかきに來らん人はしも、十日二十日一月、もしは一年
にても、まして七八年ななせになりても、思ひ出でたらんは、いみじうをかした覺えて、え逢ふ
まじうわりなきところ、人目つよむべきやうありとも、かならず立ちながらも、ものい
ひて返し、又とまるべからんをば留めとどめなどしつべし。月のあかき見るばかり、遠く物思
ひやられ、過ぎにし事、憂うれかりしも、嬉うれしかりしも、をかした覺えしも、只今のやうに覺
ゆる折やはある。こまの物語は、何ばかりをかしき事もなく、詞ことばもふるめき、見物多みぶつた

交野少將云
云一落窪物
語に、左近
の少將落窪
の君に通ひ
殊に雨夜厚
き志を見え
て同時に思
なかけし交
野少將を凌
げること見
ゆ
緑衫一六位
の袍の色
をかしかり
し一本い

からねど、月に昔を思ひ出でて、むしばみたる蝙蝠かばりとり出でて、もと見し駒こまにといひて立
てる、いとあはれなり。雨は心もとなきものと思ひしみたればにや、片時降るもいとに
くくぞある。やんごとなき事、おもしろかるべき事、尊くめでたかるべき事も、雨だに
降ればいふかひなく口惜くちしきに、何かその濡れてかこちたらんがめでたからん。實ひに交
野少將のせうしやうもどきたる落窪おちくぼ少將せうしやうなどはをかし。それも昨夜一昨日よべの夜も、ありしかばこそ
をかしかれ。足洗ひたるぞ、にくくきたなかりけん。さらでは何か、風などの吹く、荒あ
荒しき夜きたるは、たのもしくをかしうもありなん。雪こそいとめでたけれ。忘れめや
などひとりごちて、忍びたることは更なり。いとさあらぬ所も、直衣なほしなどは更にもいは
ず、狩衣かりぎぬ、袍うへ、藏人くらうじの青色などの、いとひややかに濡れたらんは、いみじうをかしかる
べし。緑衫ろくしんなりとも、雪にだに濡れなばにくかるまじ。昔の藏人くらうじは、夜など人の許など
に、たど青色を著て、雨にぬれても、しほりなどしけるとか。今は晝だに著きざりめり。た
だ緑衫ろくしんをのみこそ、うちかづきためれ。衛府ゑふなどの著たるは、ましていとをかしかり

みじかりし
あらず別
義ならず、
手紙の詞

今はこの
下に、文を
もやらし若
しくは契絶
えなんなど
補ふ

水ます雨の
古今、眞
菰刈る淀の
河水雨ふれ
ば常より殊
にまさる我
が戀
むすべし

しものを、かく聞きて、雨にありかぬ人やあらんすらん。月のいとあかき夜、紅の紙のいみじう赤きに、唯「あらず」とも書きたるを、廂にさし入れたるを、月にあてて見しこそをかしかりしか。雨降らん折はさはありなんや。

常に文おこする人の、「何かは今はいふかひなし。今は」などいひて、又の日音もせねば、さすがにあけたてば、文の見えぬこそさうくしけれと思ひて、「さてもきはくしかりける心かな」などいひて暮しつ。又の日、雨いたう降る晝まで音もせねば、「無下に思ひ絶えにけり」などいひて、端のかたに居たる夕暮に、笠さしたる童の持てきたるを、常よりも疾くあけて見れば、「水ます雨の」とある、いと多くよみ出しつる歌どもよりはをかし。ただ朝はさしもあらず、さえつる空の、いと暗うかき曇りて、雪のかきくらし降るに、いと心ほそく、見出すほどもなく、白く積りて、猶いみじう降るに、隨身だちて細やかに美しき男の、傘さして、側の方なる家の戸より入りて、文をさし入れたるこそをかしかれ。いと白き檀紙、白き色紙のむすべたる、うへにひきわたしける墨の、ふと氷りに

すばれ、一本むすびに
作る
くだりせば
に一行間狭く

織盛光一春
註に、妖星
のたまり國
大臣などの
居所の祈禱
などに行ふ
云々

ければ、すそ薄になりたるを開けたれば、いと細く巻きて、結びたる巻目は、こまなくとくほみたるに、墨のいと黒う薄く、くだりせばに、裏表書きみだりたるを、うち返し久しう見るこそ、何事ならんと、よそにて見やりたるもをかしかれ。まいてうちほとゑむ所はいとゆかしけれど、遠う居たるは、黒き文字などばかりぞ、さなめりと覺ゆるかし。額髪ながやかに、おもやうよき人の、暗きほどに文を得て、火ともす程も心もとなきにや、火桶の火を挟みあけて、たどくしけに見居たるこそをかしかれ。

きらくしきもの

大將の御さきおひたる。孔雀經の御讀經。御修法は五大尊。藏人式部丞。白馬の日、大路ねりたる。御齋會、左右衛門佐摺衣やりたる。季の御讀經。織盛光の御修法。神のいたく鳴るをりに、雷鳴の陣こそいみじうおそろしけれ。左右大將、中少將などの、御格子のつらに侍ひ給ふ、いとをかしかなり。はてぬるをり、大將の仰せて、のぼりおりとの給ふらん。坤元錄の御屏風こそ、をかしう覺ゆる名なれ。漢書の御屏風は、雄々しくぞ

月次一年中
行事の繪也

聞えたる。月次の御屏風もをかし。

方違などして夜ふかくかへる、寒きこといとわりなく、願なども皆おちぬべきを、辛うじて來つきて、火桶引き寄せたるに、火の大きにて、つゆ黒みたる所なくめでたきを、こまかなる灰の中よりおこし出でたるこそ、いみじう嬉しけれ。物などいひて、火の消ゆるらんも知らず居たるに、こと人の來て、炭入れておこすこそいとくけれ。されどめぐりに置きて、中に火をあらせたるはよし。皆火を外さまにかき遣りて、炭を重ね置きたるいたどきに、火ども置きたるがいとむつかし。

香爐峯の雪
遺愛寺鐘
欽枕聽香
爐峯雪撥
簾看、白樂
天香爐峰ト
新ト山居草

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まるらせて、炭櫃に火起して、物語などして集り侍ふに、「少納言よ、香爐峯の雪はいかならん」と仰せられければ、御格子あけさせ、御簾高く巻き上げたれば、笑はせたまふ。人々も「皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人には、さるべきなめり」といふ。陰陽師の許なる童こそ、いみじく物は知りたれ。祓など爲に出でたれば、祭文など讀む

堂初成偶題
東壁五首之内

事、人はなほこそ聞け。そと立ちはしりて、白き水いかけさせよともいはぬに、爲ありくさまの、例知り、いさよか主に物いはせぬこそ羨しけれ。さらん人もがな、つかはんところ覺ゆれ。

三月ばかり物忌しにとて、かりそめなる人の家にいきたれば、木どもなどはかくしからぬ中に、柳といひて、例のやうになまめかしくはあらで、葉廣う見えてにくけなるを、「あらぬものなめり」といへば、「かよるもあり」などいふに、

さかしらに柳のまゆのひろごりて春のおもてをふする宿かた、いとと徒然まさりて、只今も参りぬべき心地する程にしも、仰事あれば、いとうれしくて見る。淺緑の紙に、宰相の君いとをかしく書き給へり。

いかにしてすぎにしかたを過しけん暮しわづらふ昨日けふ哉となん。わたくしには、「今日しも千年の心地するを、曉だに疾く」とあり。この君のの

春のおもて
をふす一春
の面目を失
はしむ、柳
の葉の廣ご
りにくげな
るを誹れる
也
くらしわづ
らふ一千載
集には、く

らしわぶて
ふとあり、
后宮の御歌
なり

少將にや云
云一深草の
少將百夜通
へといひし
女の許へ九
十九夜通ひ
今一夜待ち
あへて死し
たる故事を
取りて、今
宵の内もえ
堪へずして
死にもすべ
しと云へる
也

給はんだにをかしかるべきを、まして仰事たたまへのさまには、おろかならぬ心地すれど、啓せ
ん事とはおほえぬこそ。

雲のうへにくらしかねけるはるの日を所がらともながめつる哉

私には、「今宵こよの程も、少將にやなり侍らんずらん」とて、曉に参りたれば、「昨日きのの返し、
暮しかねけるこそいとにくし。いみじうそしりき」と仰せらるよ、いとわびしう誠にさ
ることも。

清水しみづに籠りたる頃、茅蝸ひぐしのいみじう鳴くをあはれと聞くに、わざと御使みつかしての給はせた
りし。唐の紙の赤みたるに、

山ちかき入相いらあひの鐘のこゑごとに戀ふることろのかずは知るらん

ものを、こよなのながるやと書かせ給へる。紙などのなめけならぬも取り忘れたるたび
にて、紫なる蓮はぢの花びらに書きてまゐらす。

十二月二十四日、宮の御佛名ごぶつなの初夜そよの御導師みだうし聞きて出づる人は、夜半よなかも過ぎぬらんか

かれなど云
云一銀など
云々、白雪
に殘月の映
じて暄々た
る様也

凍々として
一期詠、八

し。里へも出で、もしは忍びたる所へも、夜のほど出づるにもあれ、合ひ乗りたる道の
程こそをかしかれ。日ごろ降りつる雪の、今朝はやみて、風などのいたう吹きつれば、垂
氷のいみじうしだり、土などこそむらく、黒きなれ、屋のうへは唯おしなべて白きに、あ
やしき賤しづの屋もおもがくして、有明ありあけの月のくまなきに、いみじうをかし。かねなどおし
へぎたるやうなるに、水晶すゐしやうの莖くきなどはまほしきやうにて、長く短く、殊更ことごとかけ渡した
ると見えて、いふにもあまりてめでたき垂氷たるひに、下簾したすだねも懸けぬ車の簾を、いと高く上げ
たるは、奥までさし入りたる月に、薄色、紅梅、しろきなど、七つ八つばかり著たるう
へに、濃き衣のいとあざやかなる艶つやなど、月に映はえて、をかしう見ゆる傍に、葡萄染ぶどうぞめの
豎紋かたもんの指貫さしぬき、白き衣どもあまた、山吹、紅など著こほして、直衣なほしのいと白き引きときた
れば、ぬぎ垂れられて、いみじうこほれ出でたり。指貫さしぬきの片つかたは、軾こしきの外みせにふみ出
されたるなど、道に人の逢ひたらば、をかしと見つべし。月影のはしたなさに、後うしろさまへ
すべり入りたるを、引き寄せせあらはになされて笑ふもをかし。凍々として氷鋪こほりしけりといふ

月十五夜、
秦旬之二千
餘里凍々氷
鋪
内外のはし
一本、内、
殿原に作る

詩を、かへすく誦じておはするは、いみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、往く所の近くなるもくちをし。

宮仕する人々の出で集りて、君々の御事めで聞え、宮の内外のはしの事ども、互に語り合せたるを、おのが君々、その家あるじにて聞くこそをかしけれ。

家廣く清けにて、親族は更なり、唯うちかたらひなどする人には、宮づかへ人、片つ方にすゑてこそあらまほしけれ。さるべき折は、一所に集りて物語し、人の詠みたる歌、何

くれと語りあはせ、人の文など持てくる、もろともに見、返事かき、また睦しうくる人

くる人もあ
るは訪ね
來る人など
有る場合に
は

もあるは、清けにうちしつらひて入れ、雨など降りてえ歸らぬも、をかしうもてなし、參らん折はその事見入れて、思はんさまにして出し立てなどせばや。よき人のおはします御有様など、いとゆかしきぞ、けしからぬ心にやあらん。

見ならひするもの

欠伸。兒ども。なまけしからぬえせもの。

うちとくまじきもの

うちたる一
擣ちて光澤
を出せる布

あしと人にいはるよ人。さるはよしと知られたるよりは、うらなくぞ見ゆる。船の路。日のうらよかなるに、海の面のいみじうのどかに、淺緑のうちたるを引き渡したるやうに見えて、聊恐しき氣色もなき若き女の、粕ばかり著たる、侍の者の若やかなる諸共に、櫓といふもの押して、歌をいみじうたひたる、いとをかしう、やんごとなき人にも見せ奉らまほしう思ひいくに、風いたう吹き、海のおもてのたど荒れにあしうなるに、物もおほえず、泊るべき所に漕ぎつくるほど、船に浪のかけたるさまなどは、さばかり和かりつる海とも見えすかし。思へば船に乗りてありく人ばかり、ゆよしきものこそなけれ。よろしき深さにてだに、さまはかなき物に乗りて、漕ぎ往くべき物にぞあらぬや。ましてそこひも知らず、千尋などもあらんに、物いと積み入れたれば、水際はたと一尺ばかりだになきに、下種どもの、聊恐しとも思ひたらず、走りありき、つゆ荒くもせば沈みやせんと思ふに、大なる松の木などの、二三尺ばかりにてまるなるを、五つ六つほ

さまはかな
き一本さ
るはかなき

早緒一又早
糸とも云
ふ、櫓に著
くる繩
すきかけ一
一本すかけ
に作る、簾
掛けなり

遊艇一はし
け也、つけ
ては名附
て
あとのしら
浪一沙彌滿
誓、世の中
を何にたと
へん朝ぼら
け漕ぎいに

うほうと投げ入れなどするこそいみじけれ。蓬庫といふ物にぞおはす。されど奥なるは
いさよかたのもし。端に立てる者どもこそ、目くると心地すね。早緒つけて、のどかに
すけたる物の弱けさよ。絶えなば何にかはならん、ふと落ち入りなんを、それだにいみ
じう太くなどもあらず。わが乗りたるはきよけに、帽額のすきかけ、妻戸格子あけなど
して、されどひとしう重けになどもあらねば、たゞ家の小きにてあり。他船見やるこそ
いみじけれ。遠きはまことに笹の葉を作りて、うち散したるやうにぞいと能く似たる。泊
りたる所にて、船ごとに火ともしたる、をかしう見ゆ。遊艇とつけて、いみじう小きに
乗りて漕ぎありく早朝など、いとあはれなり、あとのしら浪は、誠にこそ消えてもゆけ。よ
ろしき人は、乗りてありくまじき事とこそ猶おほゆれ。陸路も又いとおそろし。されど
それは、いかにもく地につきたれば、いとたのもしと思ふに、蟹のかづきしたるは憂き
わざなり。腰につきたる物絶えなば、いかゞせんとなん。男だにせば、さてもありぬべ
きを、女はおほろけの心ならじ。男は乗りて、歌などうちうたひて、この栲繩を海にう

し船の跡の
白浪、萬葉
には朝開き
漕ぎいにし
船のあとな
きがごとと
見ゆ

盆一今も行
はるゝ于關
盆の供養

薪こる一釋
迦法華經を

けありく、いと危く、うしろべたくはあらぬにや、蟹ものほらんとては、その繩をなん引
く。取り惑ひ繰り入るよさまぞ、理なるや。船のはたを抑へて、放ちたる息などこそ、ま
ことに唯見る人だにしほたるよに、落し入れて漂ひありく男は、目もあやにあさまし。更
に人の思ひかくべきわざにもあらぬことにこそあめれ。
右衛門尉なる者の、えせ親をもたりて、人の見るにおもてぶせなど、見ぐるしう思ひけ
るが、伊豫國よりのほるとて、海に落し入れてけるを、人の心うがり、あさましがりけ
るほどに、七月十五日、盆を奉るとていそぐを見給ひて、道命阿闍梨、
わたつ海に親をおし入れてこの主のほんする見るぞあはれなりける
とよみ給ひけるこそ、いとほしけれ。
又小野殿の母うへこそは、普門寺といふ所に八講しけるを聞きて、又の日小野殿に人々
集りて、あそびし、文つくりけるに、
薪こることはきのふにつきにしを今日はをのえこよにくたさん

求めんとて拾新設の食仙人に仕ふ(提婆品)いよ／＼見まく／＼老いぬればさらぬ別の有りといへばいよいよ見まくほしき君哉(伊勢物語)

と詠み給ひけんこそめでたけれ。こよもとは打聞うちききになりぬるなめり。また業平なりひらが母の宮の、いよく見まくとの給へる、いみじうあはれにをかし。引きあけて見たりけんこそ思ひやられるれ。をかしと思ひし歌などを、草紙くさじに書きておきたるに、下種げすのうち歌ひたるこそ心憂こころうけれ。よみにもよむかし。よろしき男を、下種げす女むすめなどの譽めて、「いみじうなつかしうこそおはすれ」などいへば、やがて思ひおとされぬべし。そしらるゝはなかくよし。下種げすにほめらるゝは女だにわろし。また譽むるまよにいひそこなひつるものをば。大納言殿おんなくんまゐり給ひて、文かみの事など奏し給ふに、例の夜いたう更けぬれば、御前おんまへなる人、一二人ひとりにたりづつうせて、御屏風みびやうぶき几帳きぢやうの後うしろなどに、みな隠れふしぬれば、唯一人になりて、ねぶたきを念ねんじてさぶらふに、丑四うしつと奏するなり。「明け侍りぬなり」とひとりごつに、大納言殿、「今更におほとのごもりおはしますよ」とて、寢ねべきものにも思おもしたらぬを、う

又人の云々
一他に人の
あらば我言
も紛れもす
べけれど我
一人なれば
紛れん様も
なしと也

聲明王の云
云一朗詠、
鷄人曉唱聲
驚明王之
眠

遊子なほ云
云一朗詠、

たて何しにさ申しつらんと思へども、又人のあらばこそはまぎれもせめ。うへの御前おんまへの柱に寄りかゝりて、少し眠らせ給へるを、「かれ見奉り給へ、今は明けぬるに、かくおほとのごもるべき事かは」と申させ給ふ。「實けに」など宮の御前おんまへにも笑ひ申させ給ふも知らせ給はぬほどに、長女ながむすめが童わらわの、鶏けいを捕へて持ちて、明日里へ往かんといひて隠し置きたりけるが、いかどしけん、犬の見つけて追ひければ、廊ろうの先に逃げ往きて、恐しう泣きのよしるに、みな人起きなどしぬなり。うへもうち驚かせおはしまして、「いかにありつるぞ」と尋させ給ふに、大納言殿の、聲明王せうめいおうの眠ねむりを驚すといふ詩を、高ううち出し給へる、めでたうをかしきに、一人ねぶたかりつる目も大おほになりぬ。「いみじき折の事かな」と宮も興きようせさせ給ふ。なほかゝる事こそめでたけれ。又の日は、夜の御殿おんみやに入らせ給ひぬ。夜半よなかばかりに、廊ろうに出でて人呼べば、「おるゝか、われ送らん」との給へば、裳唐衣もからぎは屏風びやうぶにうち懸けていくに、月のいみじう明あくて、直衣なほしのいと白う見ゆるに、指貫さしぬきの半なかふみくよまれて、袖をひかへて、「たふるな」といひて率ひらておはするまよに、「遊子いしなほ残のこり

佳人盡飾
於晨粧魏
宮鐘動遊子
猶行於殘
月函谷鷄
鳴
男ある一或
男といふに
同じ

よどの一夜
殿に遊野を
掛く

の月に行けば」と誦じ給へる。又いみじうめでたし。「かやうの事めで惑ふ」とて笑ひ給へど、いかでか、猶いとをかしきものをば。僧都の君の御乳母のまよと、御匣殿の御局に居たれば、男ある板敷のもと近く寄り来て、「辛いめを見候ひつる。誰にかはうれへ申し候はんとてなん」と泣きぬばかりの氣色にていふ。「何事ぞ」と問へば、「あからさまに物へまかりたりし間に、きたなく侍る所の焼けはべりにしかば、口ごろは寄居蟲のやうに、人の家に尻をさし入れてなん侍ふ。既寮の御秣積みて侍りける家よりなん、出でまうで来て侍るなり。たゞ垣を隔てて侍れば、よどのに寝て侍りける童もほとく焼け侍りぬべくなん、いさよか物もとうで侍らず」などいひ居る。御匣殿も聞き給ひて、いみじう笑ひ給ふ。

みまくさをもやすばかりの春のひによどのさへなど残らざるらん

と書きて、「これを取らせ給へ」とて投げ遣れば、笑ひのよしりて、「このおはする人の、家の焼けたりとていとほしがりて給ふめる」とて取らせられたれば、「何の御短策にか侍らん、物

いくらばかりにか」といへば、「まづよめかし」といふ。「いかでか、片目もあき仕うまつらでは」といへば、「人にも見せよ、只今召せば、頼にてうへへ参るぞ。さばかりめでたき物を得ては、何をか思ふ」とて皆笑ひ惑ひてのほりぬれば、「人にや見せつらん。里にいきで、いかに腹立たん」など、御前に参りて、まよの啓すれば、また笑ひさわぐ。御前にも、「などかく物ぐるほしからん」と笑はせ給ふ。

男は女親なくなりて、親ひとりある、いみじく思へども、わづらはしき北の方の出で来て後は、内にも入れられず、装束などの事は、乳母、また故上の人どもなどしてせさす。西東の對のほどに、客人にもいとをかしう、屏風障子の繪も見所ありてすまひたり。殿上のまじらひのほど、口惜しからず、人々も思ひたり。うへにも御氣色よくて、常に召しつゝ、御あそびなどのかたきには、思しめしたるに、なほ常に物なげかしう、世のなかにあはぬ心地して、すきなくしき心ぞ、かたはなるまであるべき。上達部のまたなきに、もてかしづかれたる妹一人あるばかりにぞ、思ふ事をもちかたらひ、慰め所なり

故上亡母

すきなくし
き云々不
平の餘好色

の心に偏せり
とにや

いぶき―春
註、伊吹は
美濃近江の
堺なるには
あらず、下
野國なりと
能因か坤元
儀に出でた
るよし袖中
抄に見ゆ

ける。「定澄僧都に袿なし、すいせい君に袖なし」といひけん人もこそをかしかれ。
「まことや、下野にくだる」といひける人に、

おもひだにかからぬ山のさせも草たれかいぶきの里は告けしぞ

ある女房の、遠江守の子なる人をかたらひてあるが、おなじ宮人をかたらふと聞きて恨みければ、「親などもかけて誓はせ給ふ。いみじき虚言なり、夢にだに見ずとなんいふ。いかどいふべき」といふと聞きて、

誓へきみ違つあふみのかみかけてむけに濱名のはし見ざりきや

「便なき所にて人に物をいひけるに、胸のいみじうはしりける、などかくはある」といひける答に、

逢坂はむねのみつねにはしり井のみつくる人やあらんと思へば

女のうはぎは

薄色。葡萄染。萌黄。さくら。紅梅。すべて薄色の類。

唐衣は

あかいろ。ふぢ。夏はふたある。秋は枯野。

裳は

大海。しびら。

汗衫は

春は躑躅、櫻。夏は青朽葉、朽葉。

織物は

むらさき。しろき。萌黄に柏葉織りたる。紅梅もよけれども、なほ見ざめこよなし。

紋は

あふひ。かたばみ。

夏うすもの、片つ方のゆだけ著たる人こそにくけれど、數多かさね著たれば、ひかれて著にくし。綿など厚きは、胸などもきれて、いと見ぐるし。まぜて著るべき物にはあら

しびら―春
註に、褶裳
とて裳の一
やうと見え
たり

かたばみ―
一本この下
に、あられ
ちとあり

片つかた一
原本片ばか
まに作る

す。なほ昔より、さまよく著たるこそよけれ。左右のゆだけなるはよし。それもなほ女房の装束にては、所せかゝめり。男の數多かさぬるも、片つかた重くぞあらんかし。濟らなる装束の、織物、うすものなど、今は皆さこそあゝめれ。今様に又さまよき人の著給はん、いと便なきものぞかし。かたちよき君達の、彈正にておはする、いと見ぐるし。宮の中將などの口惜しかりしかな。

やまひは

そこばかと
なく一何と
なく、別段
これといふ
事もなく

胸。物怪。脚氣。唯そこばかとなく物食はぬ。十八九ばかりの人の、髪いと麗しくて、たけばかりすそふさやかなるが、いとよく肥えて、いみじう色しろう。顔あいぎやうづき、よしと見ゆるが、齒をいみじく病みまどひて、額髪もしとどに泣きぬらし、髪の亂れかゝるも知らず。面赤くて抑へ居たるこそをかしけれ。八月ばかり、白き單衣、なよらかなる袴よきほどにて、紫苑の衣の、いとあざやかなるを引きかけて、胸いみじう病めば、友だちの女房たちなどかはるぐゝ來つゝ、「いといとほしきわざかな、例もかくや惱み給ふ」

人知れぬ中
一忍び男

見来て一見
え來りて、
見舞に來る
なり

など、事なしびに問ふ人もあり。心かけたる人は、誠にいみじと思ひ歎き、人知れぬ中などは、まして人目思ひて、寄るにも近くもえ寄らず、思ひ歎きたるこそをかしけれ。いと麗しく長き髪を引きゆひて、物つくとして起きあがりたる氣色も、いと心苦しくらうたけなり。うへにも聞し召して、御讀經の僧の聲よき給はせれば、訪人どももあまた見来て、經聞きなどするもかくれなきに、目をくばりつゝ讀み居たるこそ、罪や得らんとおほゆれ。

こころづきなきもの

物へのき、寺へも詣づる日の雨。使ふ人の我をばおほさず、「某こそ只今の人」などいふをほの聞きたる。人よりはなほ少しにくしと思ふ人の、推量事うちし、すどろなる物恨し、我かしこけなる。心あしき人の養ひたる子、さるはそれが罪にもあらねど、かゝる人にしもと覺ゆる故にやあらん。「數多あるが中に、この君をば思ひおとし給ひてや、にくまれ給ふよ」などあらゝかにいふ。兒は思ひも知らぬにやあらん、もとめて泣き惑

數多ある云
云一其子の
乳母の詞

なかくなる事
る一却りて
悪しき

さてなん—
それまでの
事なり
猶ぞある—
やはりよろ
しからず

ふ、心づきなきなめり。おとなになりても、思ひ後見もて騒ぐほどに、なかくなる事こそおほかめれ。わびしくにくき人に思ふ人の、はしたなくいへど、添ひつきてねんごろがる。いさよか心あしなどいへば、常よりも近く臥して、物くはせ、いとほしがり、その事となく思ひたるに、まつはれ追従し、とりもちて惑ふ。宮仕人の許に來などする男の、そこにて物くふこそいとわろけれ。くはする人もいとにくし。思はん人の、「まづ」など志ありていはんを、思みたるやうに口をふたぎて、顔を持てのくべきにもあらねば、くひ居るにこそあらめ。いみじう酔ひなどして、わりなく夜更けて泊りたりとも更にゆづけだにくはせじ。心もなかりけりとて來ずばさてなん。さにて、北面よりし出してはいかゞせん。それだに猶ぞある。初瀬に詣でて局に居たるに、あやしき下種ども、後さしまぜつよ、居竝みたるけしきこそ、ないがしろなれ。いみじき心を起して詣でたるに、川の音などの恐しきに、樽階をのほり困じて、いつしか佛の御顔を拜み奉らんと、局に急ぎ入りたるに、糞蟲のやうなるものの、あやしき衣著たるが、いとにくき

たのもし人の
の師—萬事
を頼む宿坊

序のまゝに
—其順序通
り

猫の土に云
云—春註
に、衍文な
るべし、一
説品悪しき
たとへ、又
下の物食ふ
に掛る副詞

立居額づきたるは、押し倒しつべき心地こそすれ。いとやんごとなき人の局ばかりこそ、前はらひあれ、よろしき人は、制しわづらひぬかし。たのもし人の師を呼びていはすれば、「足下ども少し去れ」などいふ程こそあれ、歩み出でぬれば、おなじやうになりぬ。

いひにくきもの

人の消息、仰事などの多かるを、序のまゝに、初より奥までいといひにくし。返事また申しにくし。恥しき人の物おこせたるかへりごと。おとなになりたる子の、思はずなること聞きつけたる、前にてはいといひにくし。

四位五位は冬、六位は夏。宿直すがたなども、品こそ男も女もあらまほしきことなめれ。家の君にてあるにも、誰かはよしあしを定むる。それだに物見知りたる使人ゆきて、おのづからいふべかめり。ましてまじらひする人はいとこよなし。猫の土におりたるやうにて。工匠の物くふこそいと怪しけれ。新殿を建てて、東の對だちたる屋を作るとて、工

あはせ、おもの一菜、飯もたいない、勿體なにて品なしの意こと人云々
 春註に下の人の字術といふ、抄に、こと人と物いひ、まぎらばす人に作る
 有明の月の拾遺、長の有明の

匠ども居竝みて物くふを、東面に出で居て見れば、まづ持てくるや遅きと、汁物取て皆飲みて、土器はついすゑつよ、次にあはせを皆くひつれば、おものは不用なめり、と見るほどに、やがてこそ失せにしか。二三人居たりし者、皆させしかば、工匠のさるなめりと思ふなり。あなまたいな事どもや。物語をもせよ、昔物語もせよ、さかしらに答うちして、こと人どものいひまぎらばす人いと憎し。

ある所に、中の君とかやいひける人の許に、君達にはあらねども、その心いたくすきたる者にいはれ、心ばせなどある人の、九月ばかりに往きて、有明の月のいみじう照りておもしろきに、名残思ひ出でられんと、言の葉を盡していへるに、今はいぬらんと遠く見送るほどに、えもいはず艶なる程なり。出づるやうに見せて立ち歸り、立部あいたる陰のかたに添ひ立ちて、猶ゆきやらぬさまもいひ知らせんと思ふに、「有明の月のありつとも」とうちいひて、さしのぞきたるかみの頭にも寄りこず、五寸ばかりさがりて、火

月の有りつとも君し來まさば我戀ひめやも

頓の事なりと云々一急用なりとも再び車借らんとは言ひ入れじと也わが従者一やはり業遠の従者

事なしびに云々一春

ともしたるやうなる月の光、催されて驚かざる心地しければ、やをら立ち出でにけりところかたりしか。

女房のまるりまかでするには、車を借る折もあるに、こよろよそひしたる顔にうちいひて貸したるに、牛飼童の、例の牛よりもまにうちいひて、いたう走り打つも、あなうたてと覺ゆかし。男どもなどの、物むづかしけなる氣色にて、「いかで夜更けぬさきに、追ひて歸りなん」といふは、なほ主の心おしはかられて、頓の事なりと、又いひ觸れんとも覺えず。業遠朝臣の車のみや、夜中あかつきわかず人の乗るに、聊さる事なかりけん、よくぞ教へ習はせたりしか。道に逢ひたりける女車の、深き所におとし入れて、え引き上げて、牛飼のはらだちければ、わが従者してうたせさへしければ、まして心のまよに、誠めおきたるに見えたり。

すきくしくして獨住する人の、夜はいづらにありつらん、曉に歸りて、やがて起きたる、まだねぶたけなる氣色なれど、硯とり寄せ、墨こまやかに押し磨りて、事なしびに任せ

註、いふ事もなきに任せてざつと書く

まひろげ―前註、一一九頁参照

録―古人の語録

てなどはあらず、心とどめて書く。まひろけ姿をかしよう見ゆ。白き衣どものうへに、山吹紅などをぞ著たる。白き單衣のいたく萎みたるを、うちまもりつゝ書き立てて、前なる人にも取らせず、わざとたちて、小舎人童のつきくしきを、身近く呼び寄せて、うちさよめきて、往ぬる後も久しく詠めて、經のさるべき所々など、忍びやかに口ずさびに爲居たり。奥のかたに、御手水、粥などしてそよのかせば、歩み入りて、文机に押しかよりて文をぞ見る。おもしろかりける所々は、うち誦じたるもいとをかし。手洗ひて、直衣ばかりうち著て、録をぞそらに讀む。實にいとたふとき程に、近き所なるべし、ありつる使うちけしきばめば、ふと讀みさして、返事に心入るとこそいとほしけれ。清けなるわかき人の、直衣も袍も狩衣も、いとよくて、きぬがちに、袖口あつく見えたるが、馬に乗りて往くまよに、供なるをのこ、たて文を、目をそらにて取りたるこそをかしけれ。

前の木だち高う庭廣き家の、東南の格子どもあけ渡したれば、涼しけに透きて見ゆる

いたうなやむ人にや一本いたうなやめばに作る

集ひまもらへ―一本つとまもらへ兄―一説姉

ひきつくるひ―一本この下を、な

に、母屋に四尺の几帳立てて、前に圓座をおきて、三十餘ばかりの僧の、いとにくけならぬか、薄墨の衣、羅の袈裟など、いとあざやかにうちさうぞきて、香染の扇うちつかひ、千手陀羅尼讀み居たり。物怪にいたうなやむ人にや、うつすべき人とて、おほきやかなる童の、髪など麗しき、生絹の單、あざやかなる袴長く著なして、ゐざり出でて、横ざまに立てたる三尺の几帳の前に居たれば、外ざまにひねり向きて、いとほそ、にはやかなる獨鈷を取らせて、をよと目うち塞ぎて讀む陀羅尼も、いとたふとし。顯證の女房あまた居て、集ひまもらへたり。久しくあらでふるひ出でぬれば、もとの心失ひて、行ふまよに隨ひ給へる護法も、けにたふとし。兄の袿きたる、細冠者どもなどの、後に居て團扇するもあり。皆たふとがりて集りたるも、例の心ならば、いかに恥しと惑はん。みづからは苦しからぬ事と知りながら、いみじうわび歎きたるさまの心苦しさを、附人の知人などは、らうたく覺えて、几帳のもと近く居て、衣ひきつくるひなどする程に、よろしとて、御湯など北面に取り次くほどをも、わかき人々は心もとなし。盤も引きさけ

どす、か
る程に作る
まかり申し
て—いとま
ごひをして
ほうちほう
たう—ほう
ちはほそち
の誤にて熟
瓜、ほうた
うは餅饅
(ボウダウ)
などの説あ
れど、一本
まゐらせん
まで十二字
無きをよし
とすべし

ながらいそいでくるや。單など清けに、薄色の裳など萎えかよりてはあらず、いと清けなり。申の時にぞ、いみじうことわりいはせなどして許しつ。「几帳の内にとこそ思ひつれ、あさましうも出でにけるかな。いかなる事ありつらん」と恥しがりて、髪を振りかけてすべり入りぬれば、しばしとどめて、加持少しして、「いかに、さわやかになり給へりや」とてうち笑みたるも恥しけなり。「しばし侍ふべきを、時のほどにもなり侍りぬべければ」とまかり申して出づるを、「しばし、ほうちはうたう參らせん」などとどむるを、いみじう急げば、所につけたる上臈とおほしき人、簾のもとにるざり出でて、「いと嬉しく立ちよらせ給へりつるしるしに、いと堪へがたく思ひ給へられつるを、只今おこたるやうに侍れば、かへすぐ悦び聞えさする。明日も御暇の隙には、物せさせ給へ」などいひつゝ、「いとしうねき御物怪に侍るめるを、たゆませ給はざらんなんよく侍るべき。よろしく物せさせ給ふなるをなん、悦び申し侍る」と、詞すくなにて出づるは、いと尊きに、佛のあらはれ給へるとこそ覺ゆれ。

したよかに
—一本しら
かみに

清けなる童の髪ながき。また大やかなるが、髻生ひたれど、思はずに髪うるはしき又したよかに、むくつけけなるなど多くて、いとなけにて、こよかしこに、やんごとなきおほえあるこそ、法師もあらまほしきわざなめれ。親などいかに嬉しからんとこそ、おしはからるれ。

見ぐるしきもの

のけくび—
つき襟

衣の背縫かたよせて著たる人。又のけくびしたる人。下簾穢けなる上達部の御車。例ならぬ人の前に子を牽ていきたる。袴著たる童の足駄はきたる、それは今様のものなり。つほ装束したる者の、急ぎて歩みたる。法師、陰陽師の、紙冠して祓したる。また色黒う、瘦せ、にくけなる女のかづらしたる。髻がちにやせくなる男と晝寢したる、何の見るかひに臥したるにかあらん。夜などはかたちも見えず。又おしなべてさる事となりたれば、我にくけなりとて、起き居るべきにもあらずかし。翌朝疾く起き往ぬる、めやすし。夏晝寐して起きたる、いとよき人こそ今少しをかしけれ。えせかたちはつやめき

ほその云々
—生絹はす
き通りて臍
まで見ゆれ
ばと戯れい
ふ也

きようかく
したり云々
—一本よう
かくしたり
と思ひしを
心よりほか
にこそもり
出でにけれ
に作る
こよや—
本こじや

寐はれて、ようせずば、頬ゆがみもしつべし。互に見かはしたらん程の、いけるかひな
さよ。色黒き人の、生絹單著たる、いと見ぐるしかし。のしひとへも同じくすきたれど、
それはかたはにも見えす。ほその通りたればにやあらん。

ものくらうなりて、文字もかゝれずなりたり。筆も使ひはてて、これを書きはてばや。こ
の草紙は、目に見え、心に思ふ事を、人やは見んずると思ひて、徒然なる里居のほどに、書
き集めたるを、あいなく、人のため便なきいひ過しなどしつべき所々もあれば、きよう
かくしたりと思ふを、涙せきあへずこそなりにけれ。宮の御前に、内大臣の奉り給へり
けるを、「これに何を書かまし。うへの御前には、史記といふ文を書かせ給へる」などの
給はせしを、「枕にこそはし侍らめ」と申しよかば、「さば得よ」とて賜はせたりしを、あや
しきを、こよや何やと、つきせずおほかる紙の数を、書きつくさんとせしに、いと物お
ほえぬことぞおほかるや。大かたこれは世の中にをかしき事を、人のめでたしなど思ふ
べき事、なほ選り出でて、歌なども、木、草、鳥、蟲をもいひ出したらばこそ、思ふ

人なみく
なる云々—
人なみく
の評を聞く
べき物なら
ず、耳を聞
くは目を見
ると同一の
語法

ほどよりはわろし、心見えなりともそしられめ。たゞ心ひとつに、おのづから思ふこと
を、たはぶれに書きつけたれば、物に立ちまじり、人なみくなるべき耳をも聞くべき
ものかと思ひしに、はづかしきなども、見る人はの給ふなれば、いとあやしくぞあ
るや。實にそれもことわり、人の憎むをもよしといひ、響むるをもあしといふは、心の
程こそおしはからるれ。たゞ人に見えけんぞねたきや。

39
12
78
39
468
294
1872
4212
936

137592

枕草紙終

方丈記

うたかたー
泡沫

破れてー
本やけてに
作る

行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。玉敷の都の中に、棟を並べ甕を争へる、尊き卑しき人の住居は、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。或は去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれにおなじ。處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、僅に一人二人なり。朝に死し、夕に生るよならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去る。又知らず、假の宿、誰が爲に心をなやまし、何によりてか目を悦ばしむる。その主人と住家と、無常を争ひ去るさま、いはゞ朝顔の露に異ならず。或は露おちて花残

れり。残るといへども朝日に枯れぬ。或は花は萎みて露なほ消えず。消えずといへどもゆふべを待つことなし。

いぬる一
本いにしに
作る

たつみ、い
ぬる一東
南、西北

死にぬ一
本死しぬ、
又死ぬに作
る

およそ物の心を知りしより以來、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、やと度々になりぬ。いぬる安元三年四月二十八日かよ。風烈しく吹きて静ならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより火出で来りて、いぬるに至る。はてには朱雀門、大極殿、大學寮、民部省まで移りて、一夜が程に、塵灰となりき。火元は樋口富小路とかや、病人を宿せる假屋より出で来けるとなむ。吹き迷ふ風に、とかく移り行くほどに、扇をひろけたるが如く、未廣になりぬ。遠き家は煙にむせび、近き邊はひたすら煙を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映じて、あまねく紅なるなかに、風に堪へず吹き切られたる煙、飛ぶがごとくにして、一二町を越えつゝ移り行く。その中の人、現心ならんや。或は煙にむせびてたふれ伏し、或は煙にまぐれて忽に死にぬ。あるはまた、僅に身一つ辛くして遁れたれども、資財を取り出づるに及ばず、七珍萬寶さ

辻風一廻風
旋風

業風一劫風
也、佛説に
世界破滅の
時三災とて
火災水災と
共に起る風
災

ながら灰燼となりき。その費いくそばくぞ。このたび公卿の家十六焼けたり。ましてその外は数を知らず。すべて都のうち三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛の類邊際を知らず。人の營みな愚なるなかに、さしも危き京中の家をつくるとて、寶を費し心をなやますことは、勝れてあぢきなくぞ侍るべき。

また治承四年卯月二十九日の頃、中御門京極のほどより、大なる辻風おこりて、六條わたりまで、いかめしく吹きけること侍りき。三四町をかけて吹きまくるに、その中にこもれる家ども、大なるも小きも、一つとして破れざるはなし。さながら平にたふれたるもあり、桁柱ばかり残れるもあり。又門の上を吹き放ちて、四五町がほどに置き、又垣を吹き拂ひて、隣と一つになせり。いはんや家の内の寶、數を盡して空にあがり、檜皮葺板の類、冬の木葉の風に亂るゝがごとし。塵を煙の如くに吹き立てたれば、すべて目も見えず。おびたどしくなり動む音に、物いふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かくこそはとぞ覺えける。家の損亡せるのみならず、これを取り繕ふ間に、身を害ひて、か

さとしー
祥、前兆

ことなる故
—特別の譯

時を失ひ云
云—羽振り
悪くなり世
間に用ひら
れずして

たはづけるもの、數を知らず。この風未申の方に移り行きて、多くの人の歎をなせり。辻風は常に吹くものなれど、かよることやはある。たゞごとにあらず、さるべき物のさとしかなとぞ、疑ひ侍りし。

又おなじ年の六月の頃、俄に都遷り侍りき。いと思の外なりし事なり。おほかたこの京のはじめを聞けば、嵯峨の天皇の御時、都と定りにけるより後、既に數百歳を経たり。ことなる故なくて、たやすく改まるべくもあらねば、これを世の人たやすからず愁へあへるさま、ことわりにも過ぎたり。されどとかくいふかひなくて、御門より始め奉りて、大臣、公卿、ことごとく攝津國難波の京に遷り給ひぬ。世に仕ふる程の人、誰かひとり故郷に残り居らん。官位におもひをかけ、主君の蔭をたのむ程の人は、一日なりとも疾く移らんとはけみあへり。時を失ひ世にあまされて、期する所なき者は、愁へながらとまり居たり。軒を争ひし人の住居、日を経つと荒れ行く。家はこぼたれて淀川に浮び、地は目の前に島となる。人の心皆あらたまりて、唯馬鞍をのみ重くす、牛車を用とする人

條里—拾芥
抄に、條起
於南—里起
西行ニ於
東—三十六
町爲—二里—
六里爲—條

木丸殿—新
古今、天智
天皇御製、
朝倉や木の
丸殿に我が
居れば名の
りをしつゝ
行くは誰が
子ぞ
しるく—果
して其通り

なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の庄園をば好まず。

その時、おのづから事の便ありて、津の國今の京に到れり。所のありさまを見るに、その地ほどせばくて、條里をわるに足らず。北は山にそひて高く、南は海に近くて下れり。波の音常にかまびすしくて、鹽風殊にはけしく、内裏は山の中なれば、かの木丸殿もかくやと、なか／＼様かはりて、優なるかたも侍りき。日々にこほちて、川もせきあへず運びくだす家は、いづくに作れるにかあらん、なほ空しき地は多く、作れる家は少なし。故郷は既に荒れて、新都はいまだ成らず。ありとしある人、皆浮雲のおもひをなせり。もとよりこの處に居たるものは、地を失ひて愁へ、今うつり住む人は、土木の煩あることを嘆く。道の邊を見れば、車に乗るべきは馬に乗り、衣冠布衣なるべきは直垂を著たり。都のてぶり忽に改りて、たゞ鄙びたる武士に異ならず。これは世の亂るゝ瑞相とか聞きおけるもしるく、日を経つと世の中うき立ちて、人の心も治らず、民の愁遂に空しからざりければ、同年の冬、なほこの京に歸り給ひにき。されど毀ちわたせりし家ども

茅を葺き一
史記韓に、
子曰幾之
有天下也
堂高三尺
采椽不刊
茅茨不剪
云々

ぞめき一さ
わざ

さのみやは
云々一さう
さう品格を
保ちても居
られず

は、いかになりにけるにか、悉くもとのやうにも作らず。ほのかに傳へ聞くに、いにしへのかしこき御代には、憐をもて國を治め給ふ。すなはち御殿に茅を葺きて、軒をだに整へず。煙の乏しきを見給ふ時は、かぎりある貢物をさへゆるされき。これ民を恵み、世をたすけ給ふによりてなり。今の世の中のありさま、昔になぞらへて知りぬべし。又養和のころかとよ。久しくなりてたしかにも覺えず。二年が間、世の中飢渴して、あさましきこと侍りき。あるは春夏日でり、あるは秋冬大風大水など、よからぬ事どもうち續きて、五穀悉く實らず。空しく春耕し、夏植うる營のみありて、秋かり冬收むるぞめきはなし。これによりて、國々の民、あるは地を捨てて境を出で、あるは家をわすれて山に住む。さまざまの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、更にそのしるしなし。京の習、何わざにつけても、みなもとは田舎をこそ頼めるに、絶えてのほる者なければ、さのみやは操も作りあへん。念じわびつと、寶物かたはしより捨つるが如くすれども、更に目みたつる人もなし。たましく易ふる者は、金を軽くし、粟を重く

まさるやう
に云々一飢
餓は益々ま
さりて祈禱
のしるしは
無し
少水の魚一
文珠出曜經
に、是日已
過命則衰滅
如少水魚一
斯有何樂一

す。乞食道の邊に多く、愁へ悲しぶ聲耳にみたり。

さきの年かくの如く、辛くして暮れぬ。明くる年は、立ちなほるべきかと思ふに、あまさは疫病うちそひて、まさるやうに跡方なし。世の人皆飢死にければ、日を経つときあまり行くさま、少水の魚のたとへに叶へり。はてには笠うち著、足ひきつよみ、よろしき姿したるもの、ひたすら家ごとに乞ひありく。かくわびしれたるものども、歩くかと思ればすなはちたふれ死ぬ。築地のつら、路頭に飢死ぬる類は數も知らず。取り捨つるわざもなければ、臭き香、世界にみちくして、變り行くかたちありさま、目もあてられぬこと多かり。況や河原などには、馬車の行きちがふ道だにもなし。

賤、山がつも、力盡きて、薪にさへ乏しくなりゆけば、頼むかたなき人は、みづから家を毀ちて、市に出でて之を賣るに、一人が持ち出でたる價、なほ一日が命をさよふるにだに及ばずとぞ。怪しき事は、かよる薪の中に、丹つき、白銀黄金の箔など、所々につきて見ゆる木のわれあひまじれり。これを尋ねれば、すべなき者の、古寺にいたりて佛

思一本志
に作り、下
なる志の字
なし

阿字—毘盧
舍那經に出
づ、眞言祕
密中の祕密

を盗み、堂の物の具を破り取りて、わりくだけるなりけり。濁悪の世にしも生れ逢ひて、かよる心うきわざをなん見侍りし。

又あはれなること侍りき。さり難き女男など持ちたるものは、その思まさりて志深きは必先だちて死しぬ。その故は、我が身をば次になして、男にもあれ女にもあれ、いたはしく思ふかたに、たましく乞ひ得たる物を、まつ譲るによりてなり。されば父子あるものは、定れる事にて、親ぞ先だちて死にける。また母が命つきて臥せるをも知らずして、いとけなき子の、その乳房に吸ひつきつゝ、臥せるなどもありけり。

仁和寺に、隆曉法印といふ人、かくしつづ數しらす死ぬることを悲みて、聖を數多かたらひつゝ、その死首の見ゆるごとに、額に阿字を書きて、縁を結ばしむるわざをなんせられける。その人數を知らんとて、四五兩月がほど數へたりければ、京の中、一條より南、九條より北、京極より西、朱雀より東、道のほとりにある頭、すべて四萬二千三百餘なんありける。況やその前後に死ぬるもの多く、河原、白河、西の京、もろくの邊

長承云々—
崇徳帝の長
承三年諸國
洪水京師火
災ありし事
舊記に見ゆ

跡なしごと
—遊戯、跡
もら残すと
りとめなき
事の義

地などを加へていはど、際限もあるべからず。いかにいはんや諸國七道をや。近くは崇徳院の御位るとき、長承のころかとよ。かよる例はありけると聞けど、その世のありさまは知らず。まのあたりいとめづらかに、かなしかりしことなり。

また元暦二年のころ、大地震ふること侍りき。そのさま世の常ならず。山崩れて川を埋み、海かたぶきて陸をひたせり。土さけて水湧きあがり、巖われて谷にまろび入り。渚こぐ船は浪にたどよひ、道行く駒は足の立處をまどはせり。況や都の邊には、在々所々、堂舎塔廟、一として全からず。或はくづれ、或はたふれたる間、塵灰立ち上りて、盛なる煙のごとし。地の震ひ家のやぶるゝ音、雷に異ならず。家の中に居れば、忽にうちひしけなんとす。走り出づれば、また地われ裂く。羽なければ空へもあがるべからず。龍ならねば雲にのほらんこと難し。おそれの中におそるべかりけるは、たゞ地震なりけりとぞ覺え侍りし。その中にある武士のひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、築地のおほひの下に小家を作り、はかなげなる跡なしごとをして遊び侍りしが、俄に崩れ埋め

ふる―地震にて大地のゆれる

四大種―義楚六帖に、四大地水火風也亦名三大種以三形相大能生萬物也
齊衡―文徳天皇の御宇

られて、あとかたなく平にうちひさがれて、二つの目など、一寸ばかりうち出されたるを、父母かへて、聲もをします悲しみあひて侍りしこそ、あはれにかなしく見侍りしか。子のかなしみには、猛きものも恥を忘れけりと覺えて、いとほしく理かなとぞ見侍りし。かくおびたどしくふることは、しばしにて止みにしが、その餘波しばく絶えず。世の常に驚くほどの地震、二三十度ふらぬ日はなし。十日二十日過ぎにしかば、やうやう間遠になりて、或は四五度、二三度、もしくは一日まぜ、二三日に一度など、大かたそのなごり三月ばかりや侍りけん。四大種の中に、水火風は常に害をなせど、大地に至りては殊なる變をなさず。

むかし齊衡のころかとよ。大地震ふりて、東大寺の佛の御首落ちなどして、いみじきことも侍りけれど、なほこのたびには如かずとぞ。すなはち人皆あぢきなき事を述べて、いさゝか心の濁もうすらぐかと見し程に、月日かさなり、年越えしかば、後は、言の葉にかけていひ出づる人だになし。すべて世のありにくきこと、わが身とすみかとの、はか

すぼき―みすぼらしき

玉ゆらも―しぼらくも

なくあだなる様かくのごとし。いはんや所により、身のほどに隨ひて、心をなやますこと、あけて數ふべからず。もしおのづから身かなはずして、權門のかたはらに居る者は、深く悦ぶ事はあれども、大にたのしむにあたはず。歎ある時も、聲をあけて泣くことなし。進退やすからず、立居につけて恐れをのよく、たとへば雀の鷹の巢に近づけるがごとし、もし貧しくして、富める家の隣に居るものは、朝夕すほき姿を恥ぢて詔ひつゝ、出で入る妻子僮僕の羨めるさまを見るにも、富める家のないがしろなるけしきを聞くにも、心念々にうごきて、時としてやすからず。もし狭き地に居れば、近く炎上する時、その害を遁るゝことなし。もし邊地にあれば、往反わづらひ多く、盜賊の難はなれがたし。いきほひある者は貪欲深く、ひとり身なる者は人に輕しめらる。寶あればおそれ多く、貧しければ歎切なり。頼めば身他の奴となり、人をはごくめば心恩愛につかはる。世にしがへば身くるし、またしたがはねば狂へるに似たり。いづれの所をしめ、いかなるわざをしてか、暫しもこの身をやどし、玉ゆらも心をなぐさむべき。

しのぶかた
がた―住む
に堪へざる
をいふ、金
葉集、周防
内侍、住み
侘びて我さ
へ軒の忍ぶ
草しのぶか
たがた繁き
宿かな
白波―盗人
をいふ、水
難と盗難と
を兼ねいふ
なり
雲に云々―
一本雲に臥
していつか
へりの春秋

我が身、父方の祖母の家を傳へて、久しく彼の所に住む。その後縁かけ、身おとろへて、しのぶかたぐしけかりしかば、遂に跡とむることを得ずして、三十餘にして、更に我が心と一の庵をむすぶ。これをありし住居になすらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりをかまへて、はかしくは屋をつくるに及ばず、わづかに築地をつけりといへども、門たつるにたづきなし。竹を柱として、車やどりとせり。雪ふり風吹くごとに、危からずしもあらず。所は河原近ければ、水の難深く、白波の恐もさわがし。すべてあらぬ世を念じ過しつと、心をなやませることは、三十餘年なり。その間をりくのたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち五十の春をむかへて、家をいで世をそむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとどめん。空しく大原山の雲に、いくそばくの春秋をかへぬる。
こゝに六十の露消えがたに及び、更に末葉のやどりを結べることあり。いはゞ狩人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶のまゆを營むがごとし。これを中ごろのすみかになすらふ

に作る
狩人―一本
旅人に作る
世の常にも
似す―一本
世の常な
す
用途―費用
関伽棚―関
伽は水の梵
語、佛に供
ふる水等を
載せ置く棚
ほどろ―老
穂なり
つかなみ―
葉筵

れば、また百分が一にだも及ばず。とかくいふ程に、齢は年々にかたぶき、住家はをりをりにせばし。その家のありさま世の常にも似ず、廣さは僅に方丈、高さは七尺が内なり。所をおもひ定めざるが故に、地をしめて造らず。土居を組み、うちおほひを葺きて、つぎめごとにかけてがねをかけたなり。もし心になはぬことあらば、やすく外に移さんがためなり。その改め造る時、いくばくのわづらひかある。積むところわづかに二兩なり。車の力をむくゆる外は、更に他の用途いらす。
いま日野山の奥に跡をかくして後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に関伽棚を作り、中には西の垣に添へて阿彌陀の畫像を安置しまつり、落日をうけて眉間のひかりとす。かの帳のとびらに、普賢ならびに不動の像をかけたなり、北の障子の上にはちひさき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌、管絃、往生要集、こときの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶、おのく一張をたつ。いはゆるをり箏、つぎ琵琶これなり。東にそへて、わらびのほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の

方丈記

西の垣は竹の垣なり
阿彌陀の畫像を安置しまつり
三〇九

正木のかづら一薛荔なり、古今神樂歌に、深山には霞ふるらし外山なる正木のかづら色づきにけり

跡の白波一

垣に窓をあけて、こゝに文机を出せり。枕の方にすびつあり。これを柴折りくぶる便とす。庵の北に少地をしめ、あばらなる地垣を圍ひて園とす。すなはちもろくの藥草をうるたり。假の庵のありさまかくのごとし。その處のさまをいはず、南に篋あり、岩を疊みて水をためたり。林軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡をうづめり。谷しけけれど、西は晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして西のかたに匂ふ。夏は時鳥をきく。かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋はひぐらしの聲耳にみたり。うつせみの世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。つもり消ゆるさま、罪障に譬へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば口業ををさめつべし。かならず禁戒をまもるとしもなければども、境界なければ、何につけてか破らん。もし跡の白波に身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船をな

拾遺集沙彌滿誓、世の中を何にとへん朝ぼらけ漕ぎ行く船の跡の白波

源都督一琵琶の名手桂大納言經信ぬかご一客餘子、むかご也

ほぐみ一穂掛に同じく穂を組合せ門又は倉の戸に掛けて神に奉る物

がめて、満沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならず夕には、潯陽の江をおもひやりて、源都督のながれをならふ。もしあまりの興あれば、しばく松のひどきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悦ばしめんとにもあらず、ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居る所なり。かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。もしつれづれなる時は、これを友としてあそびありく。かれは十六歳、われは六十、その齡ことの外なれど、心を慰むることはこれ同じ。或はつばなを抜き、いはなしを探る。またぬかごをもち、芹をつむ。あるはすそわの田井にいたりて、落穂を拾ひてほぐみをつくる。もし日うららかなれば、嶺に攀ち上りて、遙に故郷の空をのぞみ、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。あゆみ煩なく、こゝろざし遠くいたる時は、これより峰つゞき、炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間にまうで、石山ををがむ。もしはまた粟津の原を分けて、蟬丸の翁が

山鳥の云々
 一玉葉、行
 基菩薩、山
 鳥のほろほ
 ろと鳴く聲
 きけば父か
 とぞ思ふ母
 かとぞ思ふ
 かせぎ一鹿
 白地一かり
 そめ、つひ
 一寸
 今までに一
 一本今すで
 に

跡をとぶらひ、田上川をわたりて、猿丸太夫が墓をたづね、歸るさには、をりにつけつ
 つ、櫻をかり、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛に奉り、かつは家
 づとにす。もし夜静なれば、窓の月に古人を忍び、猿の聲に袖をうるほす。叢の螢は遠
 く真木の島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろく
 と鳴くを聞きても、父か母かと疑ひ、峰のかせぎの近く馴れたるにつけても、世にとほ
 ざかる程を知る。あるは埋火をかきおこして、老の寢覺の友とす。おそろしき山ならね
 ど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景氣、折につけてつくることなし。いはんや
 深く思ひ、深く知れらん人のためには、これにしも限るべからず
 おほかた此の所に住みはじめし時は、白地とおもひしかど、今までに五年を経たり。假
 の庵もやよふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔むせり。おのづから事の便に
 都を聞けば、この山にこもり居て後、やんごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。ま
 してその數ならぬたぐひ、盡してこれを知るべからず。たびくの災上にはほろびたる

がうな一寄
 居蟲(ヤド
 カリ)

すなほなる
 一本すぐ
 なる

家、またいくそばくぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくしておそれなし。ほど狭しといへど
 も、夜臥す床あり、晝居る座あり。一身をやどすに不足なし。がうなは小さき貝をこの
 む。これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る。すなはち人を恐るゝが故な
 り。我またかくのごとし。身を知り世を知れば、願はず、まじらはす。たゞ静なるを
 望とし、愁なきを樂とす。すべて世の人の住家をつくるならひ、かならずしも身のた
 めにはせず、或は妻子眷屬のためにつくり、或は親昵朋友のためにつくる。あるは主君
 師匠、および財寶馬牛のためにさへ是をつくる。我今身のためにむすべり。人のために
 つくらず。ゆる如何となれば、今の世のならひ、この身のありさま、ともなふべき人も
 なく、たのむべき奴もなし。たとひ廣くつくれりとも、誰をかやどし、誰をかすゑん。
 それ人の友たる者は、富めるを貴み、ねんごろなるを先とす。かならずしも、情あると、す
 なほなるとをば愛せず。たゞ絲竹花月を友とせんにはしかず。人の奴たるものは、賞罰
 の甚しきを願み、恩の厚きを重くす。更にはごくみあはれぶといへども、やすく閑なる

たゆからず
しもあらね
ど一たるく
ないでもな
いが、たゆ
くは支體に
云へるダル
キ也(雅言
集覽)

藤の衣—藤
の皮、葛な
どにて織れ
る賤者の粗
服
—比較する
たくらぶる

をば願はず。たゞわが身を奴とするには如かず、もしなすべきことあれば、すなはちおのづから身をつかふ。たゆからずしもあらねど、人をしたがへ、人をかへりみるよりはやすし。もし歩くべきことあれば、みづから歩む。苦しといへども、馬鞍牛車と心をなやますには似ず。今一身を分ちて、二の用をなす、手のやつこ、足の乗物、よくわが心にかなへり。心また身のくるしみを知れば、苦しむ時はやすめつ、まめなる時はつかふ。つかふとてたびく過ぎず、ものうしとて心を動かすことなし。いかに況や、常にありき、常に動くは、これ養生なるべし。何ぞいたづらにやすみ居らん。人を惱すはまた罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。

衣食のたぐひまたおなじ。藤の衣、麻のふすま、得るに隨ひて肌をかくし、野邊の茅花、峯の木の實、わづかに命をつぐばかりなり。人にまじはらざれば、姿を恥づる悔もなし。糧乏しければ、おろそかなれども、なほ味をあまくす。すべてかやうのこと、楽しく富める人に對していふにあらず、たゞわが身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。

まだし—未
だし、不足

三界—祖庭
事苑に、三
界謂—欲界
色界無色
界又謂—之
三有—

知らず—原
本いかでか
知らん

餘算—餘命
三途—火
途、刀途、血
途

り。おほかた世を遁れ、身を捨てしより、恨もなく恐もなし。命は天運にまかせて、をします、いとはず。身をば浮雲になすらへて、たのます、まだしとせず。一期のたのみは、うたよねの枕の上にはきはまり、生涯の望は、をりくの美景にのこれり。

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば、牛馬七珍もよしくなく、宮殿樓閣ものぞみなし。今さびしき住居、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でては、乞食となれることをはづといへども、かへりてこよに居る時は、他の俗塵に著することをあはれぶ。もし人このいへることを疑はど、魚鳥の分野を見よ。魚は水にあかず。魚にあらざればその心知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざればその心をしらす。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰かさたらん。

そもく一期の月影傾きて、餘算山の端に近し。忽に三途の闇にむかはん時、何のわざをかかこたんとする。佛の人ををしへ給ふおもむきは、ことにふれて執心なかれとなり。いま草の庵を愛するも科とす。閑寂に著するも障なるべし。いかゞ用なき樂をの

浄名居士一
維摩詰な
り、毘耶梨
城中方丈の
室に入り假
に病臥して
來訪者に説
法せる人
周梨槃特一
楞嚴經に見
ゆ、釋迦弟
子中の愚人

べて、空しくあたら時を過さん。しづかなる曉、この理を思ひつゞけて、みづから心に問ひていはく、世を遁れて山林にまじはるは、心をさめて道を行はんがためなり。然るを汝が姿は聖に似て、心は濁にしめり、住家はすなはち浄名居士の跡をけがせりといへども、たもつ所はわづかに周梨槃特が行にだにも及ばず。もしこれ貧賤の報のみづからなやますか、はた又妄心のいたりて狂はせるか。そのとき心さらに答ふることなし。ただ傍に舌根をやとひて、不請の念佛兩三度を申してやみぬ。時に建曆の二年、三月の晦日ごろ、桑門蓮胤、外山の庵にしてこれをしるす。

月かけは入る山の端もつらかりきたえぬひかりは見るよしもがな

方丈記終

徒然草

そこばかり
なく一漫然
と

竹の園生一
皇族
舍人一朝廷
より賜はる
従者、隨身
はふれにた
れど一おち
ぶれたるも
いみじ一え
らい、立派

つれづれなるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつり行くよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。

いでや、この世に生れては、願はしかるべき事こそ多かめれ。帝の御位はいともかしこし。

竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御ありさまはさ

らなり、たゞうども、舍人などたまはる際はゆよしと見ゆ。その子孫までは、はふれにたれどなほなまめかし。それより下つかたは、ほどにつけつゝ、時に逢ひ、したり顔な

るも、みづからはいみじと思ふらめど、いと口をし。法師ばかり羨しからぬものはあら

じ。人には木の端のやうに思はるよよと、清少納言が書けるも、けにさるゝとぞかし。勢

猛にのよしりたるにつけて、いみじとは見えす。増賀聖のいひけんやうに、名聞ぐるし

かけすけお
さるる一對
時し得ずし
て他に壓せ
らるる義、
甚だ見劣り
するをいふ
いたましう
するものか
ら一酒を勸
められて痛
痛しく困る
様にはする
ものゝ

く、佛の御教にたがふらんとぞ覺ゆる。ひたぶるの世すて人は、なかくあらまほしき
方もありなん。人はかたちあり様の勝れたらんこそ、あらまほしかるべけれ。ものうち
言ひたる聞きにくからず、愛敬ありて、詞多からぬこそ、飽かずむかはまほしけれ。め
でたしと見る人の、心おどせらるる本性見えんこそ、口をしかるべけれ。人品容貌こ
そ生れつきたらめ。心はなどか、賢きより賢きにも、うつさば移らざらん。かたち心ざ
まよき人も、才なくなりぬれば、人品くだり、顔にくさけなる人にも立ちまじりて、か
けすけおさるるこそ、本意なきわざなれ。ありたきことは、まことしき文の道、作文、和
歌、管絃の道、また有職に公事のかた、人の鑑ならんこそいみじかるべけれ。手など
拙からずはしりがき、聲をかくして拍子とり、いたましうするものから、下戸ならぬこ
そ男はよけれ。
いにしへの聖の御代のまつりごとをも忘れ、民のうれへ、國のそこなはるるをも知らず、
よろづにきよらを盡していみじと思ひ、所せきさましたる人こそ、うたて思ふところなく

九條殿一右
大臣師輔
禁中の事ど
も云々一禁
秘抄をいふ
さうくし
く一さびし
く物たらぬ
あふさきさ
さ一往くさ
來るさ、何
かにつけて
ふつゝかに
一きまぐれ
に、深き覺
悟もなく

見ゆれ。衣冠より馬車にいたるまで、あるに隨ひてもちひよ。美麗をもとむることなか
れとぞ、九條殿の遺誠にもはべる。順徳院の禁中の事ども書かせ給へるにも、おほやけ
の奉物はおろそかなるをもてよしとすとこそ侍れ。
よろづにいみじくとも、色このまざらん男は、いとさうくしく、玉の唇の當なき心地
ぞすべき。露霜にしほたれて、所さだめす惑ひありき、親のいさめ、世のそしりをつ
むに、心のいとまなく、あふさきさきに思ひ亂れ、さるは獨寝がちに、まどろむ夜なき
こそをかしけれ。さりとして一向たはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれんこ
そ、あらまほしかるべきわざなれ。
後の世のこと心にわすれず、佛の道うとからぬ、心にくし不幸にうれへに沈める人の、か
しらおろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待
つこともなく明し暮したる、さるかたにあらまほし。顯基中納言のいひけん、配所の月
罪なくて見んこと、さもおほえぬべし。

前の中書王
—兼明親王
九條の太政
大臣—藤原
伊通
花園の左大
臣—源有仁
染殿の大臣
—藤原良房
世繼の翁の
物語—大鏡
をいふ

我が身のやんごとなからんにも、まして數ならざらんにも、子といふもの無くてありな
ん。前の中書王、九條の太政大臣、花園の左大臣、皆族絶えん事を願ひ給へり。染殿の
大臣も、子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるはわろき事なりとぞ、世繼の翁の
物語にはいへる。聖徳太子の御墓をかねて築かせ給ひける時も、ことをきれ、かしこを
たて。子孫あらせじと思ふなりと侍りけるとかや。

あだし野の露消ゆる時なく、烏部山の烟立ちさらでのみ住みはつるならひならば、いか
に物のあはれもなからん。世は定なきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり
久しきはなし。かけろふのゆふべを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つれづ
と一年をくらす程だにも、こよなうのどけしや。飽かずをしとおもはど、千年を過すと
も、一夜の夢の心地こそせめ。住みはてぬ世に、醜きすがたを待ちえて何かはせん。命長
ければ恥おほし。長くとも四十にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。そのほ
ど過ぎぬれば、かたちを愧づる心もなく、人にいでまじらはんことを思ひ、夕の日に子孫

あらまし—
豫想し

えならぬ—
何ともいへ
れぬ

心ときめき
す—心動く

いもれず—
安眠もせず

六塵—色、
聲、香、味、
觸、法

を愛し、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を食る心のみ深く、物のあ
はれも知らずなり行くなんあさましき。

世の人の心惑すこと色欲には如かず。人の心は愚なるものかな。にほひなどとは假のも
のなるに、しばらく衣裳に薰物すと知りながら、えならぬ匂には、かならず心ときめき
するものなり。久米の仙人の、物洗ふ女のはぎの白きを見て、通を失ひけんは、まことに
手足膚などのきよらに、肥え膏つきたらんは、外の色ならねばさもあらんかし。

女は髪のためだからんこそ、人のめだつべかんめれ。人のほど、心ばへなどは、物うち
いひたるけはひにこそ、物ごしにも知らるれ。事に觸れてうちあるさまにも、人の心を
まどはし、すべて女のちとけたるいもねず身ををしとも思ひたらず堪ふべくもあら

ぬ業にもよく堪へ忍ぶは、たゞ色を思ふがゆるるなり。まことに愛著の道、その根深く源
遠し。六塵の樂欲おほしといへども、皆厭離しつべし。その中に、たゞかの惑のひとつ
止めがたきのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚なるも、かはる所なしとぞ見ゆる。さ

女の髮筋云
云一 大威徳
陀羅尼經に
乃至以ニ女
人髮一爲レ作
ニ綱維一香象
能繫況丈夫
輩云々

むかし覺え
て一古風に
て

やは一反語

後徳大寺の
大臣一藤原
實定

れば女の髮筋をよれる綱には、大象もよくつなぐれ、女のはける足駄にて作れる筈に
は、秋の鹿かならず寄るとぞいひ傳へ侍る。自ら戒めて、恐るゝく慎むべきはこの惑な
り。
家居のつきぐしくあらまほしきこそ、假のやどりとは思へど、興あるものなれ。よき
人ののどかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一際しみぐしく見ゆるぞか
し。今めかしくきらよかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさま
に、簀子透垣のたよりをかしく、うちある調度も、むかし覺えてやすらかなるこそ、心
にくしと見ゆれ。多くの工匠の心を盡して磨きたて、唐の日本の、めづらしくえならぬ
調度ども並べおき、前裁の草木まで、心のまよならず作りなせるは、見る目も苦しく、い
とわびし。さてもやはながらへ住むべき、また時の間の烟ともなりなんとぞ、うち見る
よりも思はるよ。大かたは、家居にこそ事ざまは推しはからるれ。後徳大寺の大臣の、寢
殿に驚るさせじとて繩を張られたりけるを、西行が見て、「鶯の居たらん何かは苦しかる

綾小路の宮
一龜山天皇
の皇子性惠
法親王

栗栖野一山
城國醍醐の
邊

たわぶに一
撓む程に、
實の多くな
りたる形容
うらなく一

べき。この殿の御心さばかりにこそ」とて、その後は参らざりけると聞きはべるに、綾小
路の宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩をひかれたりしかば、かのためし思ひ出で
られ侍りしに、「まことや、鳥のむれるて池の蛙をとりければ、御覽じかなしませ給ひて
なん」と人の語りしこそ、さてはいみじくこそとおほえしか。徳大寺にも、いかなるゆ
ゑか侍りけん。

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ること侍りしに、遙なる
苔の細道をふみわけて、心ほそく住みなしたる庵あり。木の葉にうづもるよ笈の雫なら
では、つゆおとなふものなし。関枷棚に菊紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人の
あればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、大な
る柑子の木の、枝もたわぶになりたるが、まはりを厳しく圍ひたりしこそ、少しことさ
めて、この木なからましかばと覺えしか。
おなじ心ならん人と、しめやかに物がたりして、をかしき事も世のはかなき事も、うら

心おきなく
さやは思ふ
—さうは思
はず
大かたの云
云—挿入句

南華の篇—
莊子
をかし—お
もしろし、
興あり

なくいひ慰まんこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらんと向ひ居たらんは、ひとりある心地やせん。互にいはんほどの事をば、けにと聞くかひあるものから、いさよか違ふ所もあらん人こそ、「我はさやは思ふ」など争ひにくみ、「さるからさぞ」ともうち語らばど、つれづれ慰まめと思へど、けには少しかこつかたも、我とひとしからざらん人は、大かたのよしなしごといはん程こそあらめ、まめやかな心の友には、遙にへだたる所のありぬべきぞわびしきや。

ひとり燈火のもとに文をひろけて、見ぬ世の人を友とすることこそ、こよなう慰むわざなれ。文は文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇、この國の博士どもの書けるものも、いにしへのは、あはれなることおほかり。

和歌こそなほをかききものなれ。あやしの賤山がつのしわざも、いひ出づればおもしろく、おそろしき猪も、臥猪の床といへばやさしくなりぬ。この頃の歌は、一ふしをかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、言葉の外にお

絲による云
云—絲によ
る物ならな
くに別路の
心細くもお
もほゆる哉
源氏物語云
云—總角の
巻に貫之の
歌を引くと
て物ならな
くに物をと
はなしにと
改む
のこる松云
云—冬の來
て山もあら
はに木の葉
ふり残る松
さへ峰にさ
びしき

はれにけしき覺ゆるはなし。貫之が、絲による物ならなくといへるは、古今集の中のうたくづとかやいひ傳へたれど、今の世の人の詠みぬべきことがらとは見えす。その世の歌には、すがたことば、この類のみ多し。この歌にかぎりて、かくいひ立てられたるも知りがたし。源氏物語には、ものとはなしにとぞ書ける。新古今には、のこる松さへ峰にさびしきといへる歌をぞいふなるは、誠に少しくだけたるすがたにもや見ゆらん。されどこの歌も、衆議判の時よろしきよし沙汰ありて、後にもことさらに感じおほせ下されけるよし、家長が日記には書けり。歌の道のみいにしへに變らぬなどいふ事もあれど、いさや、今もよみあへる、おなじことば歌枕も、むかしの人のよめるは更におなじものにあらず。やすくすなほにして、すがたも清けに、あはれも深くみゆ。梁塵秘抄の野曲のことばこそ、またあはれなる事はおほかめれ。むかしの人は、いかにいひ捨てたる言種も、皆いみじく聞ゆるにや。ON
いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ、めさむる心地すれ。そのわたり、こよかしこ

梁塵秘抄
神樂、催馬
樂の歌謡を
集めし書

和琴一あづ
まこと、六
絃也

なりひさご
一瓢、和名
抄に、奈利

見ありき、るなかびたる所、山里などは、いと目馴れぬことのみぞ多かる。都へたよりもとめて文やる。「その事かの事、便宜にわするな」などいひやるこそをかしけれ。さやうの所にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。持てる調度まで、よきはよく、能ある人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺社など忍びてこもりたるもをかし。神樂こそなまめかしくおもしろけれ。大かた物の音には笛箏、つねに聞きたきは琵琶和琴。

山寺にかきこもりて、佛につかうまつるこそ、つれづれもなく、心の濁もきよまる心地すれ。人はおのれをつとまやかにして、驕を退けて財をもたず、世を貪らざらんぞいみじかるべき。昔よりかしこき人の富めるは稀なり。唐土に許由といひつる人は、更に身に随へるたくはへもなく、水をも手してさよけて飲みけるを見て、なりひさごといふものを、人の得させたりければ、ある時木の枝にかけたりければ、風に吹かれて鳴りけるを、か

比佐占、斟
水器也、本
文の話は高
士傳に出づ
これらの人
一唐土の古
人に對し當
時の邦人を
指していへ
るにや

花橋は云々
一花橋は昔
を追懷せし
むとの名を
負ふものな
れど
灌佛一四月
八日に行は
るゝ佛生會

しがましとて捨てつ。また手にむすびてぞ水も飲みける。いかばかり心の中すどしかりけん。孫晨は冬月に衾なくて、薬一束ありけるを、夕にはこれに臥し、朝にはをさめけり。もろこしの人は、これをいみじと思へばこそ、しるしとめて世にも傳へけめ。これらの人はかたりも傳ふべからず。折節のうつり變るこそ、ものごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今一きは心もうきたつものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日かけに、垣根の草萌え出づるころより、やよ春深くかすみわたりて、花もやうく、氣色だつほどこそあれ、をりしも雨風うちつどきて、心あわたしく散りすぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづに唯心のみぞなやます。花橋は名にこそおへれ、なほ梅のほひにぞ、いにしへの事も立ちかへり戀しう思ひいでらるよ。山吹のきよけに、藤のおほつかなき様したる、すべて思ひすて難きことおほし。灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すどしけに繁りゆくほどこそ、世の

祭—賀茂の御形（ミア）の祭、四月、中の酉の日

おほしき事—思ふ事

かいやり—書き破り

荷前の使—年の終に幣

あはれも人の戀しさもまされと、人のおほせられしこそ、實にさるものなれ。五月、菖蒲ふくころ、早苗とるころ、水鶏のたよくなど、心細からぬかは。六月の頃あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕祭ることなまめかしけれ。やうく夜寒になるほど、雁なきて來るころ、萩の下葉色づくほど、早稲田刈りほすなど、とり集めたることは秋のみぞおほかる。また野分の朝こそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語、枕草紙などに事ふりにたれど、おなじ事また今更にいはいにもあらず。おほしき事はぬは腹ふくるよわざなれば、筆にまかせつよ、あぢきなすすさびにて、かいやり捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。さて冬枯の景色こそ、秋にはをさく劣るまじけれ。汀の草に紅葉のちりとどまりて、霜いと白うおける朝、遣水より烟のたつこそをかしけれ。年の暮れはてよ、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、またなくあはれなる。すさまじき物にして見る人もなき月の、寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心ほそきものなれ。御佛名、荷前の使たつなどぞ、あはれにや

帛を十陵八墓に奉る使
追儼—鬼やらひ、十二月晦日

ほだしもたらぬ—妻子などの絆を持たざる

んごとなき。公事どもしけく、春のいそぎにとり重ねて、催し行はるよさまぞいみじきや。追儼より四方拜につゞくこそおもしろけれ。晦日の夜いたう暗きに、松どもともして、夜半すぐるまで、人の門たよき走りありきて、何事にかあらん、ことごとくしくのよしりて、足を空にまどふが、曉がたより、さすがに音なくなりぬること、年のなごりも心ほそけれ。亡人のくる夜とて魂まつるわざは、このごろ都にはなきを、東の方には猶することにてありしこそ、あはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、ひきかへ珍しき心地ぞする。大路のさま、松たてわたして、花やかにうれしけなるこそ、またあはれなれ。
某とかやいひし世すて人の、この世のほだしもたらぬ身に、たゞ空のなごりのみぞ惜しきといひしこそ、まことにさも覺えぬべけれ。
よるづの事は月見るにこそ慰むものなれ。ある人の「月ばかりおもしろきものは有らじ」といひしに、またひとり、「露こそあはれなれ」と争ひしこそをかしけれ。折にふれば何

沅湘日夜云
 云一唐の戴
 叔倫が湘南
 即事と題す
 る詩の句
 嵇康一竹林
 七賢の一人
 文選四十三
 嵇康與山
 濤絶交書
 に、游山
 澤觀魚鳥
 心甚樂之
 人數だて一
 節會御神樂
 などに天子
 の行幸せさ
 せ給ふ時主
 殿寮二人立
 明を執りて

かはあはれならざらん。月花はさらなり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に砕けて清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。沅湘日夜東に流れ去る、愁人の爲にとどまること少時もせず、といへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も、山澤にあそびて魚鳥を見れば心樂ふといへり。人遠く水草きよき所にさまよひありきたるばかり、心慰むことはあらず。

何事も古き世のみぞ慕はしき。今やうは無下に卑しくこそなり行くめれ。かの木の道の匠の作れる美しき器物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。文の詞などぞ、昔の反古どもはいみじき。たゞいふ詞も、口惜しうこそなりもて行くなれ。いにしへは、車もたけよ、火掲げよとこそいひしを、今やうの人は、もてあけよ、かきあけよといふ。主殿寮の人數だてといふべきを、たちあかししろくせよといひ、最勝講の御聽聞所なるをば、御講の廬とこそいふべきを、かうろといふ、口をしとぞ、古き人の仰せられし。

衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有様こそ、世づかすめでたきものな

供奉せるを
 いふ
 陣一陣の
 座、禁中の
 節會に諸卿
 の列坐する
 所

夜のまうけ
 一灯の用意

飛鳥川云々
 一世の中ば

れ。露臺、朝餉、何殿、何門などは、いみじとも聞ゆべし、あやしの所にもありぬべき小部、小板敷、高遣戸なども、めでたくこそ聞ゆれ。陣に夜のまうけせよといふこそいみじけれ。夜の御殿のをば、搔燈疾うよなどいふ、まためでたし。上卿の陣にて事行へるさまはさらなり、諸司の下人どもの、したり顔になれたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、こよかしこに睡り居たるこそをかしけれ。内侍所の御鈴の音は、めでたく優なるものなりとぞ、徳大寺の太政大臣は仰せられける。

齋宮の野宮におはします有様こそ、やさしくおもしろき事のかぎりとは覺えしか。經佛など忌みて、中子、染紙などいふなるもをかし。すべて神の社こそ、捨てがたくなまめかしき物なれや。ものふりたる森の景色もたどならぬに、玉垣しわたして、柳に木綿かけたるなど、いみじからぬかは。殊にをかしきは、伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松尾、梅宮。

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時うつり事さり、樂び悲びゆきかひて、花やかな

何か常なる
飛鳥川昨日
の淵を今日
は瀬となる
御堂殿一關
白藤原道長
あせ果てん
一荒れはて
ん

思ひおきて
ん一思ひ掟
てん、思ひ
定めん

りしあたりも、人すまぬ野らとなり、變らぬ住家は人あらたまりぬ。桃李物いはねば、誰と共にか昔をかたらん。まして見ぬ古のやんごとなかりけん跡のみぞいとほかなき。京極殿、法成寺など見るこそ、志とどまり、事變じにける様はあはれなれ。御堂殿の作り磨かせ給ひて、庄園おほく寄せられ、我御族のみ、御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までとおほしおきし時、いかならん世にも、かばかりあせ果てんとはおほしてんや。大門金堂など近くまでありしかど、正和のころ南門は焼けぬ。金堂はその後たふれ伏したるまよにて、取りたつるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたとて残りたる。丈六の佛九體、いと尊くて並びおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法花堂などもいまだ侍るめり。これも亦いつまでかあらん。かばかりの名残だになき所々は、おのづから礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば萬に見ざらん世までを思ひおきてんこそ、はかなかるべけれ。風も吹きあへずうつろふ人の心の花に、馴れにし年月をおもへば、あはれと聞きし言の

白き絲云々
一淮南子に
出づ、絲は
墨子、衛は
楊子
むかし見し
の歌一藤原
公實の詠
とものみや
つこ一伴御
奴、主殿寮
の下部伴氏
の者
諒闇一天子
の喪中
倚廬一諒闇
の時の假御
所

葉ごと忘れぬものから、我世の外になり行くならひこそ、亡人の別よりも勝りて悲しきものなれ。されば白き絲の染まん事をかなしび、道の衢のわかれん事を歎く人もありけんかし。堀河院の百首の歌の中に、
むかし見し妹が垣根はあれにけり茅花まじりのすみれのみして
さびしきけしき、さること侍りけん。
御國ゆづりの節會おこなはれて、劔、璽、内侍所わたし奉らるゝほどこそ、かぎりなう心ほそけれ。新院のおりるさせ給ひての春、よませ給ひけるとかや。
殿もりのとものみやつこよそにしてはらはぬ庭に花ぞちりしく
今の世のことしけきにまぎれて、院にはまるる人もなきぞ寂しけなる。かよるをりにぞ人の心もあらはれぬべき。
諒闇の年ばかりあはれなる事はあらじ、倚廬の御所のさまなど、板敷をさけ、葦の御簾をかけて、布の帽額あらくしく、御調度ども疎に、みな人の装束、太刀、平緒まで、異

具足—道具

このごろあ
る人—なき
人に對して
現に世に生
存せる人を
いふ
中陰—死後
の七七四十
九日間
あがれぬ—
別れぬ
あなかしこ
—必ず畏れ
慎むべし
去るもの云

様なるぞゆゑしき。

静におもへば、よろづ過ぎにしかたの戀しさのみぞせん方なき。人しづまりて後、永き夜のすさびに、何となき具足とりしたよめ、残しおかじとおもふ反古などやりすつる中に、なき人の手ならひ、繪かきすさびたる見出でたるこそ、たゞその折の心地すれ。このごろある人の文だに、久しくなりて、いかなるをり、いつの年なりけんと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなくてかはらず久しき、いとかなし。人のなきあとばかり悲しきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、便あしく狭き所にあまたあひ居て、後のわざども營みあへる、心あわたし。日數のはやく過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。はての日はいと情なう、互にいふ事もなく、我かしこけに物ひきしたよめ、ちりぐくに行きあがれぬ。もとの住家にかへりてぞ、更に悲しきことは多かるべき。しかぐの事はあなかしこ、跡のため思むなる事ぞなどいへるこそ、かばかりの中に何かはと、人の心はなほうたて覺ゆれ。年月経てもつゆ忘るよにはあらねど、去

云—文選廿
九古詩に、
去者日已疎
來者日已親
出郭門—直
視但見—丘
與墳古墓
犁爲—田松
柏摧爲—薪
云々

ひがくし
—僻々し、
無風流なり

るものは日々に疎しといへる事なれば、さはいへど、その際ばかりは覺えぬにや。よしなし事いひてうちも笑ひぬ。骸はけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつ見れば、ほどなく卒都婆も苦むし、木の葉ふり埋みて、夕の嵐夜の月のみぞ、こととふよすがなりける。思ひ出でて忍ぶ人あらんほどこそあらめ。そも又ほどなくうせて、聞き傳ふるばかりの末々は、あはれとやは思ふ。さるは跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、はては嵐にむせびし松も、千年を待たで薪にくだかれ、ふるき墳はすかれて田となりぬ。その形だになくなりぬるぞ悲しき。

雪のおもしろう降りたりし朝、人の許いふべき事ありて、文をやるとて、雪のことは何ともいはずりし返事に、「この雪いかど見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひがくしからん人の仰せらるる事聞き入るべきかは。かへすぐく口惜しき御心なり」といひたりしこそ、をかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりの事も忘れがたし。

今少し云々
一客の出で
たる妻戸を
更に今少し
廣く押し開
きて

えふ一葉の
字ならん、
大全に圖あ
り△この内
部の細線即
ちえふ也

九月二十日の頃、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで月見ありくこと侍りしに、おほし出づる所ありて、案内せさせて入りたまひぬ。荒れたる庭の露しけきに、わざとならぬ匂しめやかにうち薫りて、忍びたるけはひ、いと物あはれなり。よきほどにて出で給ひぬれど、猶ことさまの優に覺えて、物のかくれよりしばし見居たるに、妻戸を今少しおしあけて、月見るけしきなり。やがてかけ籠らましかば、口惜しからまし。あとまで見る人ありとは如何で知らん。かやうの事は、たゞ朝夕の心づかひによるべし。その人程なくうせにけると聞き侍りし。N。

今の内裏つくりいだされて、有職の人々に見せられけるに、いづくも難なしとて、すでに遷幸の日近くなりけるに、立輝門院御らんじて、「閑院殿の櫛形の穴は、まろく縁もなくてぞありし」と仰せられける、いみじかりけり。これはえふの入りて、木にて縁をしたりければ、あやまりにて直されにけり。甲香は、ほらがひの様なるが、小さくて、口のほどの細長にして出でたる貝の蓋なり。武藏の國金澤といふ浦にありしを、所の者は

仕丁一下僕

まどし一文
段抄には我
身を守るに
は貧しと也
といへり、
感ひ苦むの
義とも解し
得ん

金は云々一
莊子天地

へなたりと申し侍るとぞいひし。

手のわろき人の、憚らず文かきちらすはよし。見ぐるしとて人に書かするはうるさし。久しくおとづれぬ頃、いかばかり恨むらんと、我おこたり思ひ知られて、言葉なき心地するに、女のかたより、「仕丁やある一人」などいひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよきと、人の申し侍りし、さもあるべきことなり。

朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時に、我に心をおき、ひきつくるへるさまに見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人もありぬべけれど、猶けにくしくよき人かなとぞ覺ゆる。疎き人のうちとけたる事などいひたる、またよしと思ひつきぬべし。

名利につかはれて、しづかなる暇なく、一生を苦むるこそ愚なれ。財おほければ身を守るにまどし。害を買ひ煩を招くなかだちなり。身の後には金をして北斗を支ふとも、人のためにぞ煩はるべき。愚なる人の目を喜ばしむるたのしび、またあぢきなし。大なる車、肥えたる馬、金玉のかざりも、心あらん人はうたて愚なりとぞ見るべき。金は山に

篇、藏_二金_一於山、藏_二珠_一於淵、不_レ利_二貨_一財、不_レ近_二貴_一富_二云々

可_レ不可_レは一條_一可_レは善、不可_レは惡、一條は唯_一一つの義、莊子齊物論より出

すて、玉は淵になぐべし。利に惑ふはすぐれて愚なる人なり。うづもれぬ名をながき世に残さんこそあらまほしかるべけれ。位高くやんごとなきをしも、勝れたる人とやはいふべき。愚に拙き人も、家に生れ時にあへば、高位にのほり、おごりを極むるもあり。いみじかりし賢人聖人、みづから卑しき位にをり、時に遇はずして止みぬる、またおほし。偏に高き官位をのぞむも、次におろかなり。智恵と心とこそ、世に勝れたる譽も残さまほしきを、つらく思へば、譽を愛するは人の聞_二を喜_一ぶなり。譽むる人、毀る人、共に世にとどまらず、傳へ聞かん人またノ速_一に去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られんことを願はん。譽はまた毀のもとなり。身の後の名残りて更に益なし。これを願ふも次に愚なり。たどし強ひて智をもとめ、賢をねがふ人のためにいはど、智恵いでては偽あり。才能は煩惱の増長せるなり。傳へて聞き、學びて知るは、まことの智にあらず。いかなるをか智といふべき。可_レ不可_レは一條なり、いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく徳もなく、功もなく名もなし。誰か知り誰か傳へん。これ徳をかくし愚を守るにあら

法然上人_一源空、美作の人建曆二年寂す、其唱へし所は淨土專念の宗也

ず。もとより賢愚得失のさかひに居らざればなり。まよひの心もちて名利の要を求むるに、かくのごとし。萬事はみな非なり。いふにたらず、願ふにたらず。ある人法然上人に、「念佛の時睡におかされて、行を怠り侍ること、いかゞして此さはりをやめ侍らん」と申しければ、「目の覺めたらんほど念佛したまへ」と答へられたりける。いとたふとかりけり。また「往生は、一定とおもへば一定、不定とおもへば不定なり」といはれけり。これもたふとし。また「疑ひながらも念佛すれば往生す」ともいはれけり。これも亦たふとし。

因幡の國に、何の入道とかやいふものゝ女、かたちよしと聞きて、人數多いひわたりけれども、この女たゞ栗をのみ食ひて、更に米のたぐひを食はざりければ、「かゝる異様のもの、人に見ゆべきにあらず」とて親ゆるさざりけり。

五月五日賀茂の競馬を見侍りしに、車の前に雜人たちへだてて見えざりしかば、おのゝおりにて埒の際によりたれど、ことに人おほく立ちこみて、分け入りぬべきやうもなし。か

ついでに—
跪きぬて
あざみて—
さげすみ笑
ひて
しれもの—
愚痴なる者
人木石云々
—文選鮑照
の詩に、人
非ニ木石ニ豈
無感
唐橋中將—
源雅清
教相—眞言
宗にて經論
聖教の學を

かる折に、むかひなる榜あふちの木に法師の登りて、木の股についで物見るあり。取りつきながら、いたう眠りて、墮たちぬべき時に目を覺すこと度々たひくなり。これを見る人嘲あざりあざみて、「世のしれものかな。かく危あやふき枝の上にて安やすき心ありて眠るらんよ」といふに、わが心にふと思ひしまよに、「われらが生死しやうじの到來たうらい只今にもやあらん。これを忘れて物見て日を暮す、愚なることは尙なほまさりたるものを」といひたれば、前なる人ども、「まことにさこそ候ひけれ。尤もつも愚たろかに候ふ」といひて、みな後を見かへりて、「こゝへいらせ給へ」とて、所をさりて呼び入れ侍りにき。かほどのことわり、誰たれかは思ひよらざらんなれども、をりからの思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人木石ぼくせきにあらねば、時にとりて物に感ずることなきにあらず。

唐橋中將からしちゆうじやうといふ人の子に、行雅僧都ぎやうがそうづとて、教相けうさうの人の師する僧ありけり。氣けのあがる病ありて、年のやうくたくるほどに、鼻の中なすふたがりて、息も出でがたかりければ、さまざまにつくろひけれど、煩わづらはしくなりて、目眉めまゆ額ひたいなども腫れまどひて、うち覆ひけ

教相とし、
行を爲すを
事相とす
二の舞の面
—安摩舞の
次に舞ふ伶
人の面、色
赤くして恐
し
心にくく云
云ト奥ゆか
しく閑雅な
る様子にて
ゆゑづきた
る—由緒あ
りげなる
さくやかな
る—小さき

れば、物も見えず、二の舞の面のやうに見えけるが、たゞ恐しく鬼の顔になりて、目は頂いたゞきの方かたにつき、額ひたいのほど鼻なになりなんどして、後のちは坊ぼくのうちの人も見えす籠り居て、年久しくありて、猶なほ煩わづらはしくなりて死にけり。かよる病もある事にこそありけれ。

春の暮くれつかた、のどやかに艶つやなる空そらに、賤せんしからぬ家の、奥おくふかく木立こだちものふりて、庭に散りしをれたる花見過みすぎしがたきを、さし入りて見れば、南面みなみの格子かうし皆下たろして、さびしけなるに、東にむきて妻戸つまどのよきほどに開きたる、御簾みすのやぶれより見れば、かたち清けなる男おのこの、年とし二十ばかりにて、うちとけたれど、心にくくのどやかなる様さまして、机の上に書をくりひろげて見居たり。いかなる人なりけん、たづね聞かまほし。

あやしの竹のあみ戸のうちより、いと若わかき男おのこの、月かけに色合いろあひさだかならねど、つややかなる狩衣かりぎぬに濃こき指貫さしぬき、いとゆるづきたるさまにて、さよやかなる童わらわ一人を具ぐして、遙はるかなる田の中の細道を、稻葉いなばの露つゆにそほちつと分け行くほど、笛をえならず吹きすさびた

空薫物の匂
―何處とも
なく薫り來
るたきもの
の匂

せうと―兄

る、あはれと聞き知るべき人もあらずと思ふに、行かんかた知らまほしくて、見送りつ
つ行けば、笛を吹きやみて、山の際に總門のあるうちに入りぬ。榻にたてたる車の見ゆ
るも、常よりは目とまる心地して、下人に問へば、「しかぐの宮のおはします頃にて、御
佛事などさぶらふにや」といふ。御堂の方に法師ども参りたり。夜寒の風にさそはれく
る空薫物の匂も身にしむ心地す。寢殿より御堂の廊にかよふ女房の追風用意など、人目
なき山里ともいはず心づかひしたり。一心のまよにしけれれる秋の野らは、おきあまる露に
うづもれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは、雲のゆき
きも早き心地して、月の晴れ曇ること定めがたし。
公世の二位のせうとに、良覺僧正と聞えしは、極めて腹あしき人なりけり。坊の傍に
大なる榎ありければ、人「榎の僧正」とぞいひける。この名しかるべからずとて、かの
木を切られにけり。その根のありければ、「切柅の僧正」といひけり。いよく腹立ちて、
切柅を掘りすてたりければ、その跡大なる堀にてありければ、「堀池の僧正」とぞいひけ

る。

柳原の邊に、強盜法印と號する僧ありけり。度々強盜にあひたる故に、この名をつけに
けるとぞ。

ある人清水へまゐりけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら嚏々といひも
て行きたれば、「尼御前何事をかくはのたまふぞ」と問ひけれども、答もせず、猶いび止ま
ざりけるを、度々とはれて、うち腹だちて、「やよ、はなひたる時かく呪はねば死ぬるな
りと申せば、養ひ君の、比叡の山に見にておはしますが、たゞ今もはなひ給はんと思へ
ば、かく申すぞかし」といひけり。あり難き志なりけんかし。

光親卿、院の最勝講奉行してさぶらひけるを、御前へ召されて、供御をいだされて食せ
られけり。物食ひ散らしたるついがさねを、御簾の中へさし入れてまかり出でにけり。女
房「あなきたな。誰に取れとてか」など申しあはれければ、「有職のふるまひ、やんごと
なき事なり」と、かへすく感ぜさせ給ひけるとぞ。

やうはなひ
たる云々―
抄にやうや
うとして此
故を答へた
る也とあれ
ど單に返答
の發語と見
るべから
ん、はなひ
たるは嚏し
たるの意
ついがさね
―衝重、白
木づくりの
三方也

過ぎにし一
世を過し來
れる
まめやか一
忠實
禪林の十因
一禪林は東
山永觀堂の
寺號、永觀
律師の往生
十因をいふ

老きたりて始めて道を行せんと待つことなかれ。ふるき墳おほくはこれ少年の人なり。はからざるに病をうけて、忽ちにこの世を去らんとする時にこそ、はじめて過ぎぬる方のあやまれる事は知らるなれ。あやまりといふは他の事にあらず、速にすべき事をゆるし、ゆるくすべきことを急ぎて過ぎにしことのくやしきなり。その時悔ゆともかひんや。人はたゞ無常の身にせまりぬる事を心にひしとかけて、つかのまも定まじきなり。さらばなどか此世の濁もうすく、佛道を勤むる心もまめやかならざらん。ありける聖は、人のきたりて自他の要事をいふとき、答へていはく、「今火急の事ありて、既に朝夕にせまれり」とて耳をふたぎ念佛して、終に往生を遂げたりと、禪林の十因にはべり。心戒といひける聖は、あまりにこの世のかりそめなることを思ひて、靜についてける事だになく、常はうづくまりてのみぞありける。

應長のころ、伊勢の國より、女の鬼になりたるを率て上りたりといふ事ありて、そのころ二十日ばかり、日ごとに京白川の人鬼見にとて出でまどふ。「昨日は西園寺に参りたり

はやく跡なき
き一もとよ
り無根
しるし一前
兆
まかせ一引
き入れ
あし一料足
の義、錢を
いふ

し、今日は院へまるるべし。たゞ今はそこく「などいひあへり。まさしく見たりと
いふ人もなく、虚言といふ人もなし。上下たゞ鬼の事のみいひやまず。そのころ東山よ
り、安居院の邊へまかり侍りしに、四條よりかみざまの人、みな北をさして走る。「一條
室町に鬼あり」とのよしあり。今出川の邊より見やれば、院の御棧敷のあたり、更
に通り得べうもあらず立ちこみたり。はやく跡なき事にはあらず、めりとして、人をやり
て見するに、大方あへるものなし。暮るよまでかく立ちさわぎて、はては鬨諍おこりて、
あさましき事どもありけり。そのころおしなべて、二日三日人のわづらふこと侍りしを
ぞ、「かの鬼の虚言は、このしるしを示すなりけり」といふ人も侍りし。

龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、大井の土民におほせて、水車を作ら
せられけり。多くのあしをたまひて、數日に營み出してかけたりけるに、大方めぐらざ
りければ、とかく直しけれども、終に廻らで、徒に立てりけり。さて宇治の里人を召し
てこしらへさせられければ、やすらかに結びて参らせたりけるが、思ふやうにめぐり

て、水を汲み入ると事めでたかりけり。よろづにその道を知れるものは、やんごとなきものなり。

極樂寺、高良一石清水の麓にある末寺末社

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心憂くおほえて、ある時思ひたちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて傍の人に逢ひて、「年ごろ思ひつる事はたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも参りたる人ごとに山へのほりしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へまゐるこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」とぞいひける。すこしの事にも先達はあらまほしきことなり。

ゆかし一見たし、凡て追究的興味の禁じ難き状態をいふ

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残とて おのく遊ぶことありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、満座興に入ること限なし。しばし奏でて後、抜かんとするに、大かた抜かれず。酒宴ことさめて、いかどはせんと思

くどもり聲鼎の中にくぐりみて聲は響けども言語の外に聞えざるをいふ

かけうげー 掛け穿たれ

ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うち割らんとすれど、たやすく割れず、響きて堪へがたかりければ、叶はずべき様なくて、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手をひき杖をつかせて、京なる醫師のがり率て行きけるに、道すがら人の怪み見ることに限なし。醫師のもとにさし入りて、むかひ居たりけんありさま、さこそ異様なりけめ。物をいふも、くどもり聲に響きて聞えず。かゝる事は書にも見えず、傳へたる教もなしといへば、また仁和寺へかへりて、親しきもの、老いたる母など、枕上により居て泣き悲めども、聞くらんとも覺えず。かかるほどに、或者のいふやうは、「たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなにか生きざらん。力をたてよ引き給へ」とて、薬の蒂をまはりにさし入れて、かねを隔てよ、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻かけうけながら抜けにけり。からき命まうけて、久しく病み居たりけり。

御室にいみじき兒のありけるを、いかで誘ひ出して遊ばんとたくむ法師どもありて、能

ありつる—
 例の、前に
 埋め置きし
 所をいふ
 いらなく—
 勿體らし
 く、仰々し
 く
 あいなき—
 愛なき、原
 本あひなき
 に作る

あるあそび法師どもな。どかたらひて、風流の破籠やうのもの、ねんごろにいとなみ出
 でて、箱風情のものに認め入れて、雙の岡の便よき所にうづみおきて、紅葉ちらしかけ
 な。思ひよらぬさまにして、御所へ参りて、兒をそよのかし出でにけり。うれしく
 思ひて、こよかしこ遊びめぐりて、ありつる苔の筵になみりて、「いたうこそ困じにた
 れ。あはれ紅葉を焼かん人もがな。しるしあらん僧たち、いのり試みられよ」などいひ
 しろひて、埋みつる木のもとに向きて、數珠おしすり、印ことぐしく結びいでな。ど
 して、いらなくふるまひて、木の葉をかきのけたれど、つやくものも見えず。所の違
 ひたるにやとて、掘らぬ所もなく山をあされども無かりけり。埋みけるを人の見おき
 て、御所へ参りたる間に盗めるなりけり。法師ども言の葉なくて、聞きにくといさかひ
 腹だちて歸りにけり。あまりに興あらんとすることは、必ずあいなきものなり。
 家のつくりやうは夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる、暑き頃わろき住居は
 堪へがたきことなり。深き水は涼しげなし、淺くて流れたる、遙に涼し。こまかなるもの

あかし—あ
 かるし
 次さまの人
 —身分のよ
 からぬ人
 あからさま
 —荷且
 らうがはし
 —亂りがは
 し、騒々し

を見るに、遣戸は葺の間よりもあかし。天井の-highは、冬寒く、燈くらし。造作は用な
 き所をつくりたる、見るもおもしろく、よろづの用にも立ちてよしとぞ、人のさだめあ
 ひ侍りし。
 久しく隔たりて逢ひたる人の、わが方にありつること、かすくに残なく語りつどくる
 こそあいなけれ。へだてなく馴れぬる人も、程へて見るは恥かしからぬかは。次さまの
 人は、あからさまに立ち出でて、興ありつる事とて、息もつぎあへず語り興するぞか
 し。よき人の物がたりするは、人あまたあれど一人に向きていふを、自ら人も聴くにこ
 そあれ。よからぬ人は、誰ともなくあまたの中に出でて、見る事のやうに語りなせ
 ば、皆同じく笑ひのよしる、いとらうがはし。をかしき事をいひてもいたく興せぬと、興
 なき事をいひてもよく笑ふにぞ、品の程はかられぬべき。人の見さまのよしあし、才あ
 る人はその事な。ど定めあへるに、おのが身にひきかけていひ出でたる、いとわびし。
 人のかたり出でたる歌物語の、歌のわろきこそ本意なけれ。すこしその道知らん人は、い

かたはらい
たく笑止
にて

いさましか
らん何ぞ
心勇む事あ
らんや

うつはもの
—器量

なじかは捨
てし何し
に世を捨て
たるぞ、一
説捨てじと
濁り讀み、
なじかはを
いかでかと
解す

みじと思ひては語らじ。すべていとも知らぬ道の物がたりしたる、かたはらいたく聞きにくし。

「道心あらば住む所にしもよらじ、家にあり人に交るとも、後世を願はんには難かるべきかは」といふは、更に後世知らぬ人なり。けにはこの世をはかなみ、必ず生死を出でんと思はんには、何の興ありてか。朝夕君につかへ、家を願ふいと名みのいさましからん。心は縁にひかれて移るものなれば、静ならでは道は行じがたし。そのうつはもの昔の人に及ばず、山林に入りても、飢をたすけ、嵐を防ぐよすがなくては、あらぬわざなれば、おのづから世を貪るに似たることも、便にふればなどか無からん。さればとて、「背けるかひなし。さばかりならば、なじかは捨てし」などいはんは無下のことなり。さすがにたび道に入りて、世をいとはん人、たとひ望ありとも、勢ある人の貪欲多きに似るべからず。紙の袈麻の衣、一鉢のまうけ、藜のあつもの、いくばくか人のつひえをなさん。もとむる所はやすく、その心早く足りぬべし。形にはづる所もあれば、さはいへど悪には

菩提—誦譯
名義集に、
肇師云道之
極者稱曰
菩提云々
後代諸師皆
譯爲道

設けて—こ
の下になど
思ひ又と補
ふ
年ごろも云
云一年來も
斯くてあれ
ばこそあり
しものをそ
の事の果
んを待たん
に幾程の事
もあらじ

うとく、善には近づくことのみぞ多き。人と生れたらんしには、いかにもして世を遁れん事こそあらまほしけれ。偏に貪ることをつとめて、菩提に赴かざらんは、よろづの畜類にかはる所あるまじくや。

大事を思ひたゝん人は、さがたき心にかゝらんことの本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。しばしこの事はてよ、おなじくば彼の事沙汰しおきて、しかくの事人の嘲やあらん、行末難なくしたよめ設けて、年ごろもあればこそあれ、その事待たんほどあらじ、物さわがしからぬやうにな。と思はんには、えさらぬ事のみいとどかさなりて、事の盡くるかぎりもなく、思ひたつ日もあるべからず。おほやう人を見るに、すこし心ある際は、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。近き火などに逃ぐる人は、しばしとやいふ。身を助けんとすれば、恥をも顧みず、財をも捨て遁れ去るぞかし。命は人を待つものかは。無常の來ることは、水火の攻むるよりも速に遁れがたきものを、その時老いたる親、いとさなき子、君の恩、人の情、捨てがたしとて捨てざらんや。

眞乘院一仁
和寺内の坊
三萬疋一永
錢一貫を百
匹といふ三
百貫は則ち
三萬疋也め
し一食ふ
しろうるり
一眞頼の説
に、るりは
りの延音、
しろうりを
態と解し難
く云へるに
てこの僧色
白く面長に
て白瓜に似
たりしなら
ん云々

眞乘院に、盛親僧都とてやんごとなき智者ありけり。芋頭といふものを好みて多く食ひけり。談義の座にても、大なる鉢にうづたかく盛りて、膝もとにおきつゝ、食ひながら書をも讀みけり。煩ふことあるには、七日二七日など療治とて籠り居て、思ふやうによき芋頭をえらびて、ことに多く食ひて、萬の病をいやしけり。人に食はすることなし、ただ一人のみぞ食ひける。極めて貧しかりけるに、師匠死にざまに錢二百貫と坊ひとつを譲りたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋を芋頭のあしと定めて、京なる人にあづけおきて、十貫づつ取りよせて、芋頭を乏しからずめしけるほどに、また他用にも用ふる事なくて、そのあし皆になりにけり。「三百貫のものを貧しき身にまうけて、かはからひける、誠にありがたき道心者なり」とぞ人申しける。この僧都ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。「とは何ものぞ」と人の問ひければ、「さるものを我も知らず。もしあらましかば、この僧の顔に似てん」とぞいひける。この僧都、みめよく、力つよく、大食にて、能書、學匠、辯説人にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中に

宗の法燈一
宗は眞言、
法燈は棟梁
の意

ときひじ一
時非時、時
は正午の食
非時は午後
の食をいふ

飯一蒸籠
(セイロウ)

も重く思はれたりけれども、世を軽く思ひたる曲者にて、よろづ自由にして、大かた人に随ふといふことなし。出仕して饗膳などにつく時も、皆人の前すゑわたすを待たず、我前にすゑぬれば、やがてひとりうち食ひて、歸りたければ、ひとりついたちて行きけり。ときひじも人にひとしく定めて食はず、我食ひたき時、夜中にも曉にも食ひて、ねぶたければ晝もかけ籠りて、いかなる大事あれども、人のいふこと聞き入れず。目覺めぬれば、幾夜もいねず、心をすまして嘯き歩きなど、世の常ならぬさまなれども、人にいとはれず、よろづ許されけり。徳のいたれりけるにや。

御産のとき飯おとすことは、定れることにはあらず。御衣胞滞る時のまじなひなり。滞らせ給はねばこの事なし。下さまより事おこりて、させる本説なし。大原の里の飯をめすなり。ふるき寶藏の繪に、賤しき人の子産みたる所に、飯おとしたるを書きたり。延政門院いときなくおはしましける時、院へまるる人に、御ことづてとて申させ給ひける御歌、

たつもふじ
云々—ふた
つもじは
こ、牛の角
もじはい、
すぐなもじ
はし、ゆが
みもじはく
武者—警護
の武士
ほどにつけ
て極むる—
其家々の分
に應じて最
高の
岡本關白殿
—家平

ふたつもじ牛の角もじすぐなもじゆがみもじとぞ君はおほゆる
こひしく思ひまゐらせ給ふとなり。
後七日の阿闍梨、武者を集むる事、いつとかや盗人に逢ひにけるより、宿直人とてかく
ことぐしくなりけり。一とせの相は、この修中の有様にこそ見ゆなれば、兵を用ひ
んこと穩ならぬ事なり。
車の五緒はかならず人によらず、ほどにつけて極むる官位に至りぬれば乗るものなり
とぞ、ある人おほせられし。
このごろの冠は昔よりは遙に高くなりたるなりとぞ、ある人おほせられし。古代の冠桶
を持ちたる人は、端をつぎて今は用ふるなり。
岡本關白殿、さかりなる紅梅の枝に、鳥一雙をそへて、この枝につけて参らすべきよし、
御鷹飼下毛野武勝に仰せられたりけるに、「花に鳥つくるすべ知り候はず、一枝に二つつ
くることも存じ候はず」と申しければ、膳部に尋ねられ、人々に問はせ給ひて、また武勝

火うち羽—
鳥の羽先の
火打形の羽
雨覆の毛—
雉の尾のつ
けぎはの毛
君がために
—わがたの
む君がため
にと折る花
は時しもわ
かぬものに
ぞありける

に、「さらばおのれが思はんやうにつけて参らせよ」と仰せられたりければ、花もなき梅
の枝に、一つをつけて参らせけり。武勝が申し侍りしは、「柴の枝、梅の枝、つほみたる
と散りたるにつく。五葉などにもつく。枝の長さ七尺、あるひは六尺、かへし刀五分に
切る、枝のなかばに鳥をつく。つくる枝ふまする枝あり。黒葛藤のわらぬにて二所つく
べし。藤のさきは、火うち羽のたけに比べて切りて、牛の角のやうに撓むべし。初雪の
あした、枝を肩にかけて、中門よりふるまひてまゐる。大砌の石を傳ひて、雪に跡をつ
けず。雨覆の毛を少しかながり散らして、二棟の御所の高欄によせかく。祿をいださる
れば、肩にかけて拜して退く。初雪といへども、查のはなの隠れぬほどの雪にはまゐら
ず。雨覆の毛を散らすことは、鷹は弱腰を取ることもなれば、御鷹の取りたるよしなるべ
し」と申しき。花に鳥つけずとは、いかなる故にかありけん。長月ばかりに、梅のつく
り枝に雉をつけて、君がためにと折る花は時しもわかぬといへること、伊勢物語に見え
たり。作花はくるしからぬにや。

賀茂の岩本橋本は業平實方なり。人の常にいひまがへ侍れば、一とせ参りたりしに、老いたる宮司の過ぎしを、呼びとどめて尋ね侍りしに、「實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本やなほ水の近ければと覚えはべる。吉水和尙、

月をめで花をながめしいにしへのやさしき人はこゝにあり原

と詠みたまひけるは、岩本の社とこそ承りおき侍れど、おのれらよりは、なかく御存知などもこそさぶらはめ」と、いと恭しくいひたりしこそいみじく覚えしか。今出川の院の近衛とて、集どもにあまた入りたる人は、若かりける時、常に百首の歌を詠みて、かの二つの社の御前に、水にて書きて手向けられけり。誠にやんごとなき譽ありて、人の口にある歌おほし。作文詩序などいみじく書く人なり。

筑紫に、なにがしの押領使などいふやうなる者のありけるが、土大根をよろづにいみじき薬とて、朝ごとに二つづつ焼きて食ひけること、年久しくなりぬ。ある時館のうちに人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ來りてかこみ攻めけるに、館の内にはもの二人

吉水和尙
慈鎮和尙
東山吉水に
居たればい
ふ、嘉祿元
年滅、嘉禎
三年慈鎮と
諡せらる

出でて 命を惜しまず戦ひて、皆追ひかへしてけり。いと不思議におほえて、「日頃ここにものし給ふとも見ぬ人々の、かく戦ひしたまふは、いかなる人ぞ」と問ひければ、「年來たのみて、あさなくめしつる土大根らに候」といひて失せにけり。深く信をいたしぬれば、かゝる徳もありけるにこそ。

書寫の上人は、法華讀誦の功つもりて 六根淨にかなへる人なりけり。旅の假屋に立ち入られけるに、豆の殻を焚きて豆を煮ける音の、つぶくとなるを聞き給ひければ、「疎からぬおのれらしも、うらめしく我をば煮て 辛き目を見するものかな」といひけり。焚かるゝ豆がらののはらくと鳴る音は、「わが心よりする事かは。焼かるゝはいかばかり堪へがたけれども 力なきことなり。かくな恨み給ひそ」とぞ聞えける。

元應の清暑堂の御遊に、立上はうせにし頃、菊亭の大臣、牧馬を弾じたまひけるに、座につきてまづ柱をさぐられたりければ、ひとつ落ちにけり。御ふところに續飯をもち給ひたるにて付けられにければ、神供の参るほどに、よく干て事故なかりけり。いかなる

書寫の上人
性空上人、書寫山に居住せるよりいふ
玄上、牧馬
一共に琵琶
の名器
菊亭の大臣
一左大臣兼
季
いかなる意
趣云々一斯

く柱の落ちし理由をいふ也、もとのやうには前に述べたるが如く、の意、衣被は古貴女の面を蔽ひかくす爲に頭に被りし衣、茲は之を被れる見物の女房也作善願文に佛像供養經典書寫の事など書き列ねるをいふ

意趣がありけん、物見ける衣被のよりて放ちて、もとのやうに置きたりけるとぞ。名を聞くより、やがて面影はおしはからるゝ心地するを、見るときは、又かねて思ひつるまよの顔したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、この頃の人の家のそこ程にてぞありけんと思え、人も今見る人の中に思ひよそへらるゝは、誰もかく覺ゆるにや。またいかなる折ぞ、たゞ今人のいふことも、目に見ゆるものも、わが心のうちも、かゝる事のいつぞやありしがと覺えて、いつとは思ひいでねども、まさしくありし心地のするは我ばかりかく思ふにや。

賤しけなるもの。居たるあたりに調度のおほき、硯に筆のおほき、持佛堂に佛のおほき、前に石草木のおほき、家のうちに子孫のおほき、人にあひて詞のおほき、願文に作善おほく書き載せたる。おほくて見苦しからぬは、文車の文、塵塚のちり。

世にかたり傳ふること、まことは愛なきにや、多くは皆虚言なり。あるにも過ぎて人はものをいひなすに、まして年月すぎ、さかひも隔りぬれば、いひたきまよに語りなし

かついふ片端より

おほめき明かに覺えぬ様をなすをいふ

権者神佛などの衆生濟度の爲めかりに人と出て現せるをいふ

丁、筆にも書きとどめぬれば、やがて定りぬ。道々のものゝ上手のいみじき事など、かたくななる人の、その道知らぬは、そとに神の如くにいへども、道知れる人はさらに信も起さず。音にきくと見る時とは、何事もかはるものなり。かつ顯るゝも願みず、口に任せていひちらすは、やがて浮きたる事と聞ゆ。又我も誠しからずは思ひながら、人のいひしまよに、鼻のほどおごめて言ふは、その人の虚言にはあらず。けにくしく所々うちおほめき、能く知らぬよしして、さりながら、つまぐ合せてかたる虚言は、恐しきことなり。わがため面目あるやうに言はれぬる虚言は、人いたくあらがはず。皆人の興する虚言は、一人さもなかりし物をといはんも詮なくて、聞き居たるほどに、證人にさへなされて、いとど定りぬべし。とにもかくにも虚言おほき世なり。たゞ常にある珍しからぬ事のまよに心えたらん、よろづ違ふべからず。下さまの人のものがたりは、耳驚くことのみあり。よき人はあやしき事を語らず、かくはいへど、佛神の奇特、権者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗の虚言を懇に信じたるもをこがまし

先途一冥
途、死して
行く先
つれづれわ
ぶる一徒然
を厭ふ

く、よもあらじなどいふも詮なければ、大方はまことしくあひしらひて、偏に信ぜず、また疑ひあざけるべからず。
蟻の如くにあつまりて、東西にいそぎ南北にわしる、貴きあり、賤しきあり、老いたるあり、若きあり、行く所あり、歸る家あり、夕にいねて朝に起く、いとたむ所何事ぞや生を貪り利を求めてやむ時なし。身を養ひて何事をか待つ、斯するところたゞ老と死とにあり。その來ること速にして、念々の間にととまらず。これを待つ間何の樂かあらん。惑へるものはこれを恐れず。名利に溺れて、先途の近きことを顧みねばなり。愚なる人はまたこれをかなしふ。常住ならんことを思ひて、變化の理を知らねばなり。
つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。まぎるゝ方なく、たゞ一人あるのみこそよけれ。世に隨へば、心外の塵にうばはれて惑ひ易く、人に交れば、言葉よそのきよに隨ひて、さながら心にあらず。人に戯れ、物にあらそひ、一度はうらみ、一度はよろこぶ。そのこと定れることなし。分別妄に起りて、得失やむ時なし。まどひの上に酔へり、酔の

ほれて一醉
中夢裡の如
く茫然とし
摩訶止觀一
十卷、天台
大師の著に
して妙法蓮
華經觀心の
義を演べた
るもの
いろふ一取
り扱ふ、關
知する

中に夢をなす。走りていそがはしく、ほれて忘れたること、人皆かくのごとし。いまだまことの道を知らずとも、縁を離れて身をしづかにし、事に與らずして心を安くせんこそ、暫く樂ぶともいひつべけれ。生活、人事、伎能、學問等の諸縁をやめよとこそ、摩訶止觀にもはべれ。
世のおほえ花やかなるあたりに、嘆も喜もありて、人おほく往きとぶらふ中に、聖法師のまじりて、いひ入れたゝすみたるこそ、さらずとも見ゆれ。さるべき故ありとも、法師は人にうとくてありなん。
世の中に、そのころ人のもてあつかひぐさに言ひあへること、いろふべきにはあらぬ人の、能く案内知りて、人にもかたり聞かせ、問ひ聞きたるこそうけられね。殊にかたほとりなる聖法師などぞ、世の人の上はわが如く尋ね聞き、如何でかばかりは知りけんと思ゆるまでぞ言ひ散らすめる。
今やうの事どもの珍しきを、いひ廣めもてなすこそ、またうけられね。世に事ふりたる

今さらの人
—今あらた
に交際する
人
こゝもとに
—此許、つ
ひ口先にな
どの義にも
いへどこゝ
は其人々の
間にの義な
らん
されば云々
—されば其
人の話には
京恥しく奥
ゆかしき方
らあれど
おろかなる
おのが道—

まで知らぬ人は心にくし。今さらの人などのある時、こゝもとに言ひつけたる言種、物の名など心えたるどち、かたはし言ひかはし、目見あはせ笑ひなどして、心しらぬ人にこゝろえず思はすること、世なれずよからぬ人の必ずあることなり。
何事も入りたよぬさましたるぞよき。よき人は知りたる事とて、さのみ知りかほにやはいふ。片田舎よりさしいでたる人こそ、萬の道に心えたるよしのさしいらへはすれ。されば世に恥しき方もあれど、自らもいみじと思へる氣色かたくななり。よく辨へたる道には、かならず口おもく、問はぬかぎりは言はぬこそいみじけれ。
人ごとに、我身にうとき事をのみぞ好める。法師はつはものの道をたて、夷は弓ひくすべ知らず、佛法知りたる氣色し、連歌し、管絃を嗜みあへり。されどおろかなる己が道よりは、なほ人に思ひあなづられぬべし。法師のみにもあらず、上達部、殿上人、上さままで、おしなべて武を好む人おほかり。百たび戦ひて百たび勝つとも、いまだ武勇の名を定めがたし。その故は運に乗じて敵をくだく時、勇者にあらずといふ人なし。兵盡

巧ならざる
自己の専門
の道

頓阿—二條
爲世の門弟
にて慶運淨
辨兼好と相
並びて和歌
の四天王と
稱せらる

き矢きはまりて、遂に敵に降らず、死を安くして後、はじめて名を顯すべき道なり。生けらんほどは武に誇るべからず。人倫に遠く禽獸に近きふるまひ、その家にあらずば、好みて益なきことなり。
屏風障子などの繪も文字も、かたくななる筆様して書きたるが、見にくきよりも、宿の主人のつたなく覺ゆるなり。大かた持てる調度にても、心おとりせらるゝ事はありぬべし。さのみよき物を持つべしともあらず、損せざらんためとて、品なく見にくきさまにしなし、珍しからんとて、用なき事どもしそへ、わづらはしく好みなせるをいふなり。古めかしきやうにて、いたくことくしからず、費もなくて、物がらのよきがよきなり。
「羅の表紙は疾く損するがわびしき」と人のいひしに、頓阿が、「羅は上下はづれ、螺鈿の軸は、貝落ちて後こそいみじけれ」と申し侍りしこそ、心まさりて覺えしか。一部とある草紙などのおなじ様にもあらぬを、醜しといへど、弘融僧都が「物を必ず一具に整

一の上―左大臣
 亢龍の悔―易の象に亢之爲言也知進而不
 知退知存而不
 知亡知得而不
 知喪云云
 法顯三藏―晉朝の高僧、三藏とは經律論の三を修得せる人の稱

へんとするは拙き者のする事なり。不具なるこそよけれ」といひしも、いみじく覺えしなり。すべて何もみな事整りたるはあしきことなり。爲殘したるを、さてうちおきたるは、面白く生きのぶるわざなり。内裏造らるゝにも、必ず造りはてぬ所を殘す事なりとある人申し侍りしなり。先賢の作れる内外の文にも、章段の闕けたる事のみこそ侍れ。竹林院入道左大臣殿、太政大臣にあがりたまはんに、何の滯かおはせんなれども、「珍しけなし。一の上にてやみなん」とて、出家し給ひにけり。洞院左大臣殿この事を甘心し給ひて、相國の望おはせざりけり。亢龍の悔ありとかやいふ事侍るなり。月満ちては缺け、物盛にしては衰ふ。萬の事さきのつまりたるは、破に近き道なり。
 法顯三藏の天竺に渡りて、故郷の扇を見ては悲び、病に臥しては漢の食を願ひ給ひける事を聞きて、「さばかりの人の無下にこそ、心弱き氣色を人の國にて見え給ひけれ」と人のいひしに、弘融僧都「優に情ありける三藏かな」といひたりしこそ、法師の様にもあらす。心にくゝ覺えしか。

べからず―うつる、辭すの下なるは推量、學ぶの下なるは命令
 風月の才―詩歌の才
 法師―一説に寺を焼かれたれば火憂(ホウシ)といふ秀句といへり

人の心すなほならねば、偽なきにしもあらず、されどおのづから正直の人などかなからん。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。いたりて愚なる人は、たまたま賢なる人を見てこれを憎む。「大なる利を得んがために少しきの利を受けず、いはり飾りて名を立てんとす」と誇る。おのれが心に違へるによりて、この嘲をなすにて知りぬ。この人は下愚の性うつるべからず、偽りて小利をも辭すべからず。假にも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば、すなはち狂人なり。悪人のまねとて人を殺さば、悪人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。偽りても賢をまなばんを賢といふべし。
 惟繼中納言は、風月の才に富める人なり。一生精進にて、讀經うちして、寺法師の圓伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺やかれし時、坊主にあひて、「御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺はなければ、今よりは法師とこそ申さめ」といはれけり。いみじき秀句なりけり。

一度せさせ
よ一杯飲
ませよ
具して逢ひ
たるに引
き連れ來れ
るに逢ひた
るに

下部に酒のますることは心すべきことなり。宇治に住みける男、京に具覺坊とてなまめきたる遁世の僧を、小舅なりければ、常に申しむつびけり。ある時迎に馬を遣したりければ、「はるかなる程なり、口つきの男にまづ一度せさせよ」とて酒を出したれば、さしうけさしうけよと飲みぬ。太刀うち佩きてかひくしけなれば、たのもしく覺えて、召し具して行くほどに、木幡のほとりにて、奈良法師の兵士あまた具して逢ひたるに、この男立ちむかひて、「日暮れにたる山中にあやしきぞ。とまり候へ」といひて太刀をひき抜きければ、人もみな太刀ぬき矢はけなどしけるを、具覺坊手をすりて、「現心なく酔ひたるものに候ふ。枉けて許し給はらん」といひければ、おのく嘲りて過ぎぬ。この男具覺坊にあひて、「御坊は口惜しき事したまひつるものかな。おのれ酔ひたること侍らず。高名つかまつらんとするを、抜ける太刀空しくなし給ひつること」と怒りて、ひたぎりに斬り落しつ。さて「山賊あり」とのよしりければ、里人おこりて出であへば、「われこそ山賊よ」といひて走りかよりつゝ斬り廻りけるを、あまたして手負せうち伏せてしばり

によび呻
吟して

うける事
浮きたる
事、虚事

四條大納言
藤原公任

これら此
邊

あやまたず
果して

けり。馬は血つきて宇治大路の家に走り入たり。あさましくて、男ども數多はしらかしたれば、具覺坊は梶原にによび伏したるを、求め出でてかきもて來つ。からき命生きたれど、腰きり損ぜられて、かたはになりにけり。あるもの小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、ある人「御相傳うけることには侍らじなれども、四條大納言えらばれたるものを、道風書かんこと、時代や違ひ侍らん。覺束なくこそ」といひければ、「さ候へばこそ世にありがたきものには侍りけれ」とていよく秘藏しけり。

「奥山にねこまたと云ふものありて、人を食ふなる」と人のいひけるに、「山ならねども、こむらにも猫の經あがりて、ねこまたになりて、人となることはあるものを」といふものありけるを、なに阿彌陀佛とかや連歌しける法師の、行願寺のほとりにありけるが聞きて、一人ありかん身は心すべきことにこそと思ひける頃しも、ある所にて夜ふくるまで連歌して、たゞ一人かへりけるに、小川の端にて、音に聞きしねこまたあやまたず足

赤舌日一晴
明の籃篋内
傳によるに
赤舌赤口共
に羅刹神に
當る日にて
赤口は大歳
東門番神、
赤舌は大歳
西門番神な
り、兼好は
此書を見ざ
りしならん

のもとへふと寄り来て、やがてかきつくまよに、頸のほどを食はんとす。肝心もうせて、防がんとするに力もなく、足も立たず、小川へころび入りて、助けよやねこまた、よやよや」と叫べば、家々より松どもともして、走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。こはいかにとて、川の中より抱き起したれば、連歌の賭物とりて、扇小箱など懐に持ちたりけるも水に入りぬ。希有にして助かりたるさまにて、はふく家に入りにつけり。飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。大納言法印のめしつかひし乙鶴丸、やすら殿といふものを知りて、常にゆき通ひしに、ある時いでて歸り来るを、法印「いづくへ行きつるぞ」と問ひしかば、「やすら殿のがりまかりて候ふ」といふ。「そのやすら殿は、男か法師か」とまた問はれて、袖かき合せて、「いかゞ候ふらん。頭をば見候はず」と答へ申しき。などか頭ばかりの見えざりけん。赤舌日といふ事 陰陽道には沙汰なきことなり。昔の人これを忌まず。このごろ何者のいひ出でて忌みはじめけるにか。この日あること末通らずといひて、その日いひたりし

幻化—まぼ
ろしの如く
變化する
義、楞嚴經
疏に、假託
虚偽—妄設
レ情名稱レ幻
無而忽有
畢竟無レ體
稱レ之曰レ化
もろ矢—
手にて矢二
筋持つこと

こと、爲たりしこと叶はず、得たりしものは失ひ、企てたりしこと成らずといふ、愚なり。吉日を選びてなしたるわざの末通らぬを數へて見んも、また等しかるべし。その故は、無常變易のさかひ、ありと見るものも存せず、始あることも終なし。志は遂げず、望は絶えず。人の心不定なり、ものみな幻化なり。何事かしばらくも住する。この理を知らざるなり。吉日に悪をなすに必ず凶なり、悪日に善を行ふにかならず吉なりといへり。吉凶は人によりて日によらず。ある人弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて的にむかふ。師のいはく、「初心の人ふたつの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて初の矢になほざりの心あり、毎度たゞ得失なく、この一箭に定むべしと思へ」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろそかにせんと思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらんことを思ひ、朝には夕あらんことを思ひて、重ねて懇に修せんことを期せり。いはんや一刹那のうちにおいて、懈怠の

いたつがはしくわづらはしく、面倒なる思をして

心あることを知らんや。何ぞたと今の一念において直たぢにすることの甚だ難かたき。
「牛を賣るものあり、買ふ人、明日その價をやりて牛を取らんといふ。夜の間に牛死しぬ。買はんとする人に利あり、賣らんとする人に損あり」とかたる人あり。これを聞きて傍かたへなもの曰く、「牛の主ぬしまことに損ありといへども、また大なる利あり。その故は、生しやうあるもの死の近きことを知らざるに、牛すでにしかなり。人またおなじ。はからざるに牛は死し、計らざるに主は存せり。一日の命萬金いちにちのちまんきんよりもおもし。牛の價鵝毛あたひがきうよりも輕かろし。萬金を得て一錢を失はん人、損ありといふべからず」といふに、皆人嘲みなひとあざけりて、「その理は牛の主ぬしに限るべからず」といふ。またいはく、「されば人死しをにくまば、生せいを愛すべし。存命めいのよろこび日々たのに樂しまざらんや。愚なる人この樂を忘れて、いたつがはしく外の樂をもとめ、この財たからを忘れて、危あやふく他の財たからを貪ねばるには、志滿こころみつることなし。いける間生あひだをたのしまずして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人みな生をたのしまざるは、死をおそれざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るゝなり。も

常磐井の相國—太政大臣實氏

はなたれ—免職せられ

くりかた—栗形、大いに口の如き形といへり

めなもみ—稀茶の俗稱、野生にしく莖方直枝對生、葉三稜ありて細毛を生じ秋枝端に小黄花を著く

しまた生死しやうじの相さうにあづからずといはど、實まことの理を得たりといふべし」といふに、人いよいよ嘲あざける。

常磐井の相國出仕しやうきふのしやうこくしゆつししたまひけるに、勅書ちよくしよを持ちたる北面ほくめんあひ奉りて、馬よりおりたりけるを、相國しやうこく後に、「北面ほくめんながしは勅書を持ちながら下馬し侍りしものなり。かほどのもの、いかでか君に仕うまつり候ふべき」と申されければ、北面ほくめんをはなたれにけり。勅書を馬の上ながら捧さかけて見せ奉るべし。おるべからずとぞ。

「箱のくりかたに緒ををつくること、いづかたにつけ侍るべきぞ」とある有職いっせきの人に尋ね申し侍りしかば、「軸ぐくにつけ表紙へいしにつくること兩説なれば、いづれも難なんなし。文の箱は多くは右につく。手箱てはこには軸ぐくにつくるも常のことなり」と仰せられき。めなもみといふ草あり。蝮くろはみにさよれたる人、かの草をもみてつけぬれば、すなはち瘡いのとなん。見知りておくべし。

其物につきて、そのものを費つひやしそこなふもの、數かずを知らずあり。身に虱しらみあり、家に鼠ねずみあ

糶汰—ぬか
みそ
上藤下藤—
藤は出家者
剃髪授戒し
てより一夏
九旬の間勤
行するをい
ふ僧位は其
戒藤の前後
にて次第す
るより上藤
下藤を一般
に上位下位
の義にいふ

り 國に賊あり、少人に財あり 君子に仁義あり、僧に法あり。
たふとき聖のいひおきけることを書きつけて、一言芳談とかや名づけたる草紙を見侍り
しに、心にあひて覺えし事ども、

一爲やせまし、爲すやあらましと思ふことは、おほやう爲ぬはよきなり。
一後世を思はんものは、糶汰瓶ひとつも持つまじきことなり。持經本尊にいたるまで、
よきものを持つ、よしなきことなり。

一遁世者は、なきに事かけぬやうをはからひて過ぐる、最上のやうにてあるなり。
一上藤は下藤になり、智者は愚者になり、徳人は貧になり、能ある人は無能になるべ
きなり。

一佛道を願ふといふは別のことなし、暇ある身になりて、世のこと心にかけてぬを第一
の道とす。

この外もありし事ども覺えず。

堀河の相國
—源基具
過差—おご
り
大理—檢非
違使の別當
久我の相國
—源雅實
まがり—貝
を磨きて造
れる飲器

堀河の相國は、美男のたのしき人にて、その事となく過差を好みたまひけり。御子基俊卿
を大理になして、廳務を行はれけるに、廳屋の唐櫃見苦しとて、めでたく作り改めらる
べきよし仰せられけるに、この唐櫃は上古よりつたはりて、そのはじめを知らず、數百
年を経たり、累代の公物、古弊をもちて規模とす、たやすく改められ難きよし、故實の
諸官等申しければ、その事やみにけり。

久我の相國は、殿上にて水をめしけるに、主殿司土器をたてまつりければ、「まがりをま
るらせよ」とて、まがりしてぞめしける。

ある人任大臣の節會の内辨を勤められけるに、内記のもちたる宣命を取らずして堂上せ
られにけり。きはまりなき失禮なれども、たちかへり取るべきにもあらず、思ひ煩はれ
けるに、六位の内記康綱、衣被の女房をかたらひて、かの宣命をもたせて、しのびやか
に奉らせけり。いみじかりけり。

伊大納言光忠入道、追儼の上卿をつとめられけるに、洞院右大臣殿に次第を申し請けら

膝突—小半
疊のうすべ
り

我朝の云々
—我朝のも
のとも見え
ぬは唐な
り、忠守は
平氏なり、
即ち唐瓶子
と解ける也
もてしづめ
たるけはひ
—しとやか
なる様子

れければ、「又五郎をのこを師とするより外の才覚候はじ」とぞのたまひける。かの又五郎は老いたる衛士の、よく公事に馴れたるものにてぞありける。近衛殿着陣したまひける時、膝突をわすれて外記をめされければ、火をたきて候ひけるがまづ膝突をめさるべくや候ふらん」と忍びやかにつぶやきける、いとをかしかりけり。
大覺寺殿にて、近習の人ども、なぞくをつくりて解かれけるところへ、醫師忠守参りたりけるに、侍従大納言公明卿「我朝のものとも見えぬ忠守かな」となぞくにせられけるを、唐瓶子と解きて笑ひあはれければ、腹立ちてまかり出にけり。
荒れたる宿の人めなきに、女の憚ることあるころにて、つれなくと籠り居たるを、ある人とぶらひ給はんとて、夕月夜のおほつかなきほどに、忍びて尋ねおはしたるに、犬のことなくしくとがむれば、けす女のいでて、「いづくよりぞ」といふに、やがて案内せさせて入りたまひぬ。心ほそけなるありさま、いかで過すらんと、いと心ぐるし。あやしき板敷に、しばし立ち給へるを、もてしづめたるけはひの若やかなるして、「こなたへ」と

たてあけ—
開閉

俄にしも云
云—今俄に
はあらず日
頃よりたし
なみて焚き
しめし香の
匂也
今宵ぞ云々
—下部ども
の言葉、今
宵は泊る人
のあれば心
安く寝ぬべ
きを喜ぶ也

いふ人あれば、たてあけ所せけなる遣戸よりぞ入りたまひぬ。内のさまはいたくすさまじからず、心にくく、火はかなたにほのかなれど、物の綺羅など見えて、俄にしもあらぬにほひ、いとなつかしう住みなしたり。「門よくさしてよ。雨もぞふる、御車は門の下に、御供の人はそこく」といへば、「今宵ぞやすきい寝べかめる」とうちさよめくも、忍びたれど、ほどなければほの聞ゆ。さてこの程の事どもこまやかに聞え給ふに、夜ぶかき鶏も鳴きぬ。こしかた行くすゑかけて、まめやかなる御物語に、この度は鶏も花やかなる聲にうちしきれば、明け離るゝにやと聞きたまへど、夜深く急ぐべき所のさまにもあらねば、すこしたゆみ給へるに、隙白くなれば、忘れ難きことなんどいひて立ち出でたまふに、梢も庭もめづらしく青みわたりたる卯月ばかりのあけほの、艶にをかしかりしをおほし出でて、桂の木の大なるがかくるとまで、今も見おくり給ふとぞ。
北の家かけに消え残りたる雪の、いたうこぼりたるに、さし寄せたる車の轆も、霜いた

かぶしかた
—女の髪
容、貞徳の
説には女の
打傾ける形
けはひなど
云々—話の
言葉の途切
れ途切れ僅
に漏れ聞ゆ
るをいふ
四部の弟子
—四衆とも
いふ、優婆
塞は佛弟子
の俗男、優
婆夷は俗女

くきらめきて、有明の月さやかなれども、隈なくはあらぬに、人ばなれなる御堂の廊に、なみなみにはあらずと見ゆる男、女と長押にしりかけて、物がたりするさまこそ、何事にかあらんつきすまじけれ。かぶしかたちなどいとしと見えて、えもいはぬ句の、さとかをりたるこそをかしけれ。けはひなどとはつれく聞えたるもゆかし。
高野の證空上人京へのほりけるに、細道にて馬に乗りたる女の行きあひたりけるが、口引きける男あしく引きて、聖の馬を堀へ落してけり。聖いと腹あしく咎めて、「こは希有の狼藉かな。四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼はおとり、比丘尼より優婆塞はおとり、優婆塞より優婆夷はおとれり。かくのごとくの優婆夷など身の身に、比丘を堀に蹴入れさする、未曾有の悪行なり」といはれければ、口引の男「いかに仰せらるゝやらん、えこそ聞き知らね」といふに、上人なほいきまきて、「何といふぞ。非修非學の男」とあらよかに言ひて、きはまりなき放言しつと思ひける氣色にて、馬引きかへして遁けられにけり。たふとかりける評論なるべし。

しれたる—
ざれたる

數ならぬ身
むづかし—
數ならぬ身
と某の答へ
しは安らか
ならずと也

人我の相—
人と我との
隔をたて
他人を軽く
し我を重く

女のものいひかけたる返事、とりあへずよき程にする男はありがたきものぞとて、龜山院の御時、しれたる女房ども、若き男達の參らるゝ毎に、「時鳥や聞きたまへる」と問ひて試みられけるに、某の大納言とかやは、「數ならぬ身はえ聞き候はず」と答へられけり。堀河内大臣殿は、「岩倉にて聞きて候ひしやらん」と仰せられけるを、「これは難なし。數ならぬ身むづかし」など定めあはれけり。すべて男をば、女に笑はれぬ様におほしたつべしとぞ、淨土寺の前關白殿は、をさなくて安喜門院のよく教へまらさせさせ給ひける故に、御詞などよきごと人の仰せられけるとかや。山階左大臣殿は「あやしの下女の見奉るも、いと恥しく心づかひせらるゝ」とこそ仰せられけれ。女のなき世なりせば、衣紋も冠もいかにもあれ、ひきつくるふ人も侍らじ。かく人に恥らるゝ女、いかばかりいみじきものぞと思ふに、女の性はみなひがめり。人我の相ふかく、貪欲甚しく、物の理を知らず、たゞ迷の方に心もはやくうつり、詞も巧に、苦しからぬ事をも問ふ時はいはず、用意あるかと思れば、又あさましき事まで問はずがたりにいひ出す。深くたば

する心を云ふ、我相、人相、衆生相、壽者相を般若の四相とす

道人一得道者名爲道人一餘出家者未得道者亦名道人一(智度論)便利一便通

かり飾れる事は、男の智慧にも優りたるかと思へば、その事あとより顯るよを知らず。質朴ならずして拙きものは女なり。その心に隨ひてよく思はれんことは、心うかるべし。されば何かは女の恥かしからん。もし賢女あらば、それも物うとく、すさまじかりなん。ただ迷をあるじとしてかれに隨ふ時、やさしくもおもしろくも覺ゆべきことなり。寸陰惜む人なし。これよく知れるか、愚なるか。愚にして怠る人のためにいはど、一錢かろしといへども、これを累ねれば貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜む心切なり。刹那おほえずといへども、これを運びてやまざれば、命を終ふる期忽ちにいたる。されば道人は、遠く日月を惜むべからず。只今の一念空しく過ぐることを惜むべし。もし人來りて、わが命明日は必ず失はるべしと告げ知らせたらんに、今日の暮るる間、何事をか頼み、何事をか營まん。我等が生ける今日の日、何ぞその時節に異ならん。一日の中に、飲食、便利、睡眠、言語、行歩、止むことを得ずして、多くの時を失ふ。そのあまりの暇、いくばくならぬうちに、無益の事をなし、無益のことをいひ、無

法華の筆受一法華翻譯の執筆者、靈運は涅槃經の筆受なるが如し 惠遠白蓮の交一廬山の惠遠庭中に白蓮花を植ゑ同志と淨業をつとむ、これを白蓮の交といふ おきてて一いひつけて

益のことを思惟して、時を遷すのみならず、日を消し月をわたりて、一生をおくる、尤も愚なり。謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風雲のおもひを觀ぜしかば、惠遠白蓮の交をゆるさざりき。しばらくもこれなき時は死人におなじ。光陰何のためにか惜むとならば、内に思慮なく、外に世事なくして、止まん人はやめ、修ぜん人は修ぜよとなり。 高名の木のほりといひし男、人をおきてて、高き木にのほせて梢をきらせしに、いと危く見えしほどはいふこともなくて、おると時に、軒だけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛び下るともおりなん。如何にかくいふぞ」と申し侍りしかば、「その事に候ふ。目くるめき枝危きほどは、おのれがおそれ侍れば申さず。あやまちは安き所になりて、必ず仕ることに候ふ」といふ。あやしき下臈なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠もかたき所を蹴出して後、やすくおもへば必ずおつと侍るやらん。

雙六の上手といひし人に、そのてだてを問ひ侍りしかば、「勝たんとうつべからず 負けじとうつべきなり。いづれの手かたく負けぬべきと案じて、その手をつかはずして、一目なりとも遅くまくべき手につくべし」といふ。道を知れるをしへ、身を脩め國を保たん道もまたしかなり。

四重一殺生、偷盜、邪淫、妄語

五逆一父母、阿羅漢を殺し和合僧を破り佛身の血を出す

「圍碁雙六」のみてあかし暮す人は、四重五逆にもまされる悪事とぞ思ふ」とある聖の申しよこと、耳にとどまりて、いみじくおほえ侍る。

明日は遠國へ赴くべしと聞かん人に、心しづかになすべからんわざをば、人いひかけてんや。俄の大事をもいとなみ、切に歎くこともある人は、他の事を聞き入れず、人のうれへよろこびをも問はず。問はずとてなどやと恨むる人もなし。されば年もやうくたけ、病にもまつはれ、況や世をも遁れたらん人、亦これに同じかるべし。人間の儀式、いづれの事が去りがたからぬ。世俗の黙しがたきに從ひて、これをかならずとせば、願も多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は雑事の小事にさへられて、空しく暮れなん。日

日暮れ云々
白居易傳に、日暮而途遠吾生已蹉跎、老人病者などの菩提の途未だ至らざるに譬へし也

今出川のおほい殿一菊亭兼季

暮れ途とほし、吾生既に蹉跎たり、諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮儀をも思はじ。この心を持たざらん人は、ものぐるひともいへ、現なし情なしともおもへ、譏るとも苦しまじ、譽むとも聞きいれじ。四十にもあまりぬる人の、色めきたるかた、おのづから忍びてあらんは如何はせん。ことうち出でて、男女のこと、人の上をもいひ戯るよこそ、似けなく見ぐるしけれ。大かた聞きにくく見ぐるしき事、老人の若き人にまじはりて興あらんと物いひ居たる、數ならぬ身にて、世のおほえある人を隔なきさまにいひたる、貧しきところに酒宴このみ、客人に饗應せんときらめきたる。

今出川のおほい殿嵯峨へおはしけるに、有栖川のわたりに水の流れたる所にて、齋王丸御牛を追ひたりければ、あがきの水前板までさよとかよりけるを、爲則御車のしりに候ひけるが、「希有の童かな。かよる所にて御牛をば追ふものか」といひたりければ、おほい殿御氣色あしくなりて、「おのれ車やらんこと、齋王丸に勝りてえ知らじ。希有の男なり」

太秦殿藤原信清

とて御車に頭をうちあてられにけり。この高名の齋王丸は、太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。この太秦殿に侍りける女房の名ども、一人は膝幸、一人は特徳、一人は胞腹、一人は乙牛とつけられけり。

ぼろくく一暮露・虚無僧なり

宿河原といふ所にて、ぼろくくおほく集りて、九品の念佛を申しけるに、外より入りくるほろくくの、「もしこの御中に、いろをし坊と申すほろやおはします」と尋ねければ、その中より、「いろをしことに候ふ。かくのたまふは誰ぞ」と答ふれば、「しら梵字と申す者なり。おのれが師ながしと申す人、東國にていろをしと申すほろに殺されけりと承りしかば、その人に逢ひ奉りて、うらみ申さばやと思ひて尋ね申すなり」といふ。いろをし「ゆよくも尋ねおはしたり。さること侍りき。ことにて對面したてまつらば、道場をけがし侍るべし。前の河原へまゐりあはん。あなかしこ。わきざしたち、いづ方をもみつぎ給ふな。數多のわづらひにならば、佛事のさまたけに侍るべし」といひ定めて、二人河原に出であひて、心ゆくばかりに貫きあひて、共に死にけり。ほろくくといふもの

わきざしたち云々一朋輩方どちらをも助太刀は無用なり

さらぬ一其他

友とするに云々一論語季氏篇に出でたる益者三友損者三友の類

は、昔はなかりけるにや。近き世に、梵論字、梵字、漢字などいひける者、そのはじめなりけるとかや。世を捨てたるに似て我執ふかく、佛道を願ふに似て鬪諍を事とす。放逸無慚のありさまなれども、死を軽くして少しもなづまざる方のいさぎよく覺えて、人の語りしまよに書きつけ侍るなり。寺院の號、さらぬよろづの物にも名をつくること、昔の人はすこしも求めず、たゞありのまよに安くつけけるなり。この頃は深く案じ、才覺を顯さんとしたるやうに聞ゆる、いとむづかし。人の名も、めなれぬ文字をつかんとする、益なき事なり。何事もめづらしき事をもとめ、異説を好むは、淺才の人の必ずあることなりとぞ。友とするにわろきもの七つあり。一には高くやんごとなき人、二には若き人、三には病なく身つよき人、四には酒をこのむ人、五には武く勇める人、六にはそらごとする人、七には慾ふかき人。善き友三つあり。一にはものくるゝ友、二には醫師、三には智恵ある友。

さうなきー
 雙なき、こ
 の上なき
 御湯殿ー料
 理の間、湯
 にて物を煮
 などするよ
 り出でし語
 北山入道殿
 ー西園寺實
 氏、常盤井
 相國と號す

鯉こいのあつもの食ひたる日は、鬚げんそよけずとなん。膠にかんにもつくるものなれば、ねばりたるものにこそ。鯉ばかりこそ、御前にても切らるよものなれば、やんごとなき魚なり。鳥には雉きさうなきものなり。雉松茸きじまつたけなどは、御湯殿みゆどのの上にかよりたるも苦しからず。その外は心憂きことなり。中宮ちゆうぐうの御方みかたの御湯殿みゆどのの上のくろみ棚たなに、雁かりの見えつるを、北山入道殿きさやまにゅうだうだんの御覽みらんじて、歸かへらせたまひて、やがて御文みんにて、「かやうのもの、さながらその姿にて、御棚みたなにゐて候まをひしこと、見みならはずさま悪わるしきことなり。はかぐしき人のさぶらはぬ故ゆゑにこそ」など申まをされたりけり。

鎌倉かまくらの海うみにかつをといふ魚は、かの境さかいには雙さうなきものにて、この頃ころもてなすものなり。それも鎌倉かまくらの年寄としよりの申し侍まをりしは、「この魚おのれら若わかりし世までは、はかぐしき人の前まへへ出でづること侍まをらざりき。頭かしらは下部しもべも食くはず、切りて捨すて侍まをりしものなり」と申しき。かやうの物ものも、世よの末すえになれば、上うさままでも入りたつわざわざにこそ侍まをれ。

唐からのものは、藥くすりの外ほかはなくとも事ことかくまじ。書かみどもは、この國くにに多くひろまりぬれば、書

遠とほきもの云
 云ー尙書
 に不ふ寶たから遠
 物もの則すなは遠人
 格がく

得えがたき云
 云ー老子
 に、不ふ貴たか難がた得え之の貨か使つか民たみ不ふ爲な盜とう
 桀けつ紂しゆうー夏かの
 桀けつ、殷いんの紂しゆう、
 世よに無む道だうの
 王わう也
 王子わうし猷いー晉しん
 の人ひと、名なは
 徽い子し、王わう羲い
 之の子こ也

きも寫うつしてん。もろこし船ふねのたやすからぬ道みちに、無用むようのものどものみ取り積たみて、所ところせく渡わたしもて來くる、いと愚おろかなり。遠とほきものを寶たからとせずとも、また得えがたき寶たからをたふとせずとも、書かみにも侍まをるとかや。

養やしなひ飼かふものには馬ば牛うし、繫つなぎ苦くるしむること痛いたましけれど、なくて叶かはぬ物ものなれば如何いかんはせん。犬いぬはまもり防まもぐつとめ、人ひとにも優やさりたれば、必ずあるべし。されど家いへごとにあるものなれば、ことさらに求め飼かはずともありなん。その外の鳥獸とりけだもの、すべて用もちなきものなり。はしる獸けだものは檻かごにこめ、鎖くさりをさよれ、飛とぶ鳥とりは翼つばさを切り、籠かごに入れられて、雲くもを戀こひ野山のやまをおもふ愁うれやむ時ときなし。そのおもひ我身わがみにあたりて忍しのびがたくば、心こころあらん人ひとこれをたのしまんや。生しやうを苦くるしめて目をよろこばしむるは、桀けつ紂しゆうが心こころなり。王子わうし猷いが鳥とりを愛あいせし、林はやしにたのしぶを見て逍遙せうせうの友ともとしき。捕とへ苦くるめたるにあらず。凡みなそめづらしき鳥とりあやしき獸けだもの、國くにに養やしなはずとこそ文ふみにも侍まをるなれ。

人の才能さいのうは、文ふみあきらかにして、聖ひじりの教しやうを知しれるを第一だいいちとす。次つぎには手てかくこと、旨ひなと

めづらしき鳥云々一尙書に、珍禽奇獸不_レ育_二于國_一

多能は云々一論語孔子の言に吾少也賤故多_二能鄙事_一君子多乎不_レ多也

する事はなくとも、これを習ふべし。學問に使あらんためなり。次に醫術を習ふべし。身を養ひ人を助け、忠孝のつとめも、醫にあらざばあるべからず。次に弓射、馬に乗ること六藝にいだせり。必ずこれを窺ふべし。文武醫の道、まことに缺けてはあるべからず。これを學ばんをば、いたづらなる人といふべからず。次に食は人の天なり。よく味をととのへ知れる人、大なる徳とすべし。次に細工、よろづの要おほし。この外の事ども、多能は君子のはづるところなり。詩歌にたくみに、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすとはいへども、今の世には、これをもちて世を治むること、漸く愚なるに似たり。金はすぐれたれども、鐵の益多きに如かざるがごとし。

無益の事をなして時をうつすを、愚なる人とも、僻事する人ともいふべし。國のため君のために、止むことを得ずしてなすべき事おほし。そのあまりの暇、いくばくならず思ふべし。人の身に止むことを得ずして營む所、第一に食物、第二に著物、第三に居所なり。人間の大事この三つには過ぎず。飢ゑず、寒からず、風雨に冒されずして、しづかに

過ぐすを樂とす。たゞし人みな病あり、病に冒されぬれば、その愁忍びがたし。醫療を忘るべからず。藥を加へて、四つの事もとめ得ざるを貧しとす。この四つ缺けざるを富めりとす。この四つの外を求め營むを驕とす。四つの事儉約ならば、誰の人か足らずとせん。

是法法師は、浮土宗に恥ぢずといへども、學匠をたてず、たゞ明暮念佛して、やすらかに世を過ぐすありさま、いとあらまほし。

人におくれて、四十九日の佛事に、ある聖を請じ侍りしに、説法いみじくして、みな人涙をながしけり。導師かへりて後、聽聞の人ども「いつよりも殊に今日は尊くおほえ侍りつる」と感じあへりし返事に、ある者のいはく、「何とも候へ、あれほど唐の狗に似候ひなん上は」といひたりしに、あはれもさめてをかしかりけり。さる導師のほめやうやはあるべき。また人に酒勸むるとて、「おのれまづたべて人に強ひ奉らんとするは、劍にて人を斬らんとするに似たることなり。二方に及つきたるものなれば、もたぐる時ま

唐の狗に云云一眞頼翁の説に唐の狗け狎也狎は涙を常に流してある故に此法師の自ら涙を流し説經せざるを斯く嘲りし也云々